山田流箏歌通解　中

11
516

始

11-516

山田流箏歌通解中の巻目次

いの部

今様朝妻船 二〇

ろの部

六段前歌 三一
六段後歌 三一
六段前歌 四五

はの部

花うつぼ 四
花くらべ 五
春日影 九
初秋 一一
春の朝 一九
初櫻 二四
春の宮曲 三四
春の田家 四八
花妻 四八
初烏 七〇
花ごよみ 七一
花の鐘 七四
はりま八景 一三八

ほの部

ほたる 七
ほとゝぎす 六七
蓬來(新) 七六
蓬來(舊) 九七
豐年獅子 一五八

との部

常磐の榮 一〇六

ちの部

千代榮 三六
地久節 五一
千歳の春 八〇
千箱玉章 九三
千代壽 一〇八
千里の梅 一三三
蝶の夢 一五七

をの部

小の山 二五
朧月 八三

わの部

若竹 一
若菜摘 六

大正 10 11.17 内交

かの部　二
雁　二
龜と兎　二一
かざしの雪　一一五
春日詣　一一九
鐘の音　一二七
記念の歌　一四一
垣の夕顔　一六二
河東七草　一八四

よの部
吉野山　一七

たの部
高砂　一七
民の賑　五〇
伊達模樣　九〇
玉川　一七三

その部
早春　二一
早春與　四四

つの部
つるかめ　六
椿づくし　一六五

ねの部
子の日の遊　六三
根岸四季詠　一三二

なの部
夏心　一一
那須野　一五二
浪花じし　一六七

らの部
落梅　八

うの部
うさぎ　三
歌の道　一〇
梅づくし　一八
薄霞　四〇
海邊の初春　五五

のの部
乃木櫻　一一七

やの部
大和心　三
山櫻　二八
大和心　六四
八重垣　一四四
八千代獅子　一六三

まの部
松づくし　四六
稀の壽　五九

萬歳　六九
松の榮　一一三
松づくし　一七〇
萬歳獅子　一七八

ふの部
福壽草　一〇
芙蓉の峰　九八

この部
金剛石　二七
勾當内待　一一一
護國歌　一二三
この心　一六八

えの部
江の嶋（舊）　一〇〇
江の嶋（新）　一〇三
江の嶋（貝づくし替歌）　一〇五

（舊）越後獅子　一七四
（新）越後獅子　一七六

ての部
手習　一三

あの部
蟻　二
秋の七草　一六
秋の夜　二二
あやめ草　五三
あづまの花　七八
有明の梅　一六四
有明　一六六
秋の夜　一七二

さの部
櫻　四
さみだれ　二三

榮ゆる宮　三三
西行　三七
小夜砧　三九
佐保姫　六五
櫻がり　一四八
三番叟　一七八

きの部
如月　一五
喜撰　二九
記元節　四一
菊の友　八八

ゆの部
弓八幡　一二

みの部
深雪　一四
三つの船　二七

亂前歌　四五
御苑生の竹　五二
都路　一五〇
御山獅子　一六〇
御代の賑　一八五
御代の榮　一八五

しの部

白雪　五
四季の花　八
新年の雪　一四
四季の詠　四二
四季の榮　八五
四季の艶　九一
四季の段　一二九
七卿落　一三七
七福神　一五五

深夜の月　一五八

ゑの部

海老　七

ひの部

姫松　一

もの部

紅葉の賀　六〇
紅葉狩　一五九

せの部

關の清水　五六

すの部

雪中の梅　九
住吉　一二三

箏歌通解（山田流）中の巻

不二之舍　直正著

表裏歌物

姫松

ひめまつこまつ、姫松小松、緑の色ませ、春毎に

【句義】姫松、五葉松の一種○小松、小さい松こゝでは姫松を女児小松を男児と見るがよい。

【通釋】松が年々榮える様に子供も立派に年々成長せよ。

若竹

若竹をだけ、若竹をだけ、操なたわめそ、うきふしに

【句義】若竹、今年生の竹○をだけ、小は言葉を美しくする爲に添へたので強に小さい竹と見るには及ばない○な撓めそ、そは清みてよむ上下のなそは二番で禁止辭○うき節、憂き節で竹の縁語。

【通釋】若竹よ小竹よ雪にも霜にも緑の色をかへるな人も其通で若い内から心掛けて嫌ひなつらい事に出逢つても決して操をかへるでは無いぞよ。

雁

かり雁流れ、大きな雁先に、小さな雁あとに、仲善く流れ

【句義】かり雁、呼び出しに重ねたのである。

【通釋】雁に言寄せて兄弟仲よくせよといふ心。

蟻

したゝる汗を拭ひつゝ、引いてためこむ蟻の倉、冬のこもりも暖かし

【句義】したゝる汗、ボタボタ垂れて來る汗○したゝる汗をでは語格に違ふしゝたるゝ汗といふとよい。

【通釋】蟻は夏の内に暑さ厭はず働いて餌を倉に運んで置いて冬になると穴ごもりて暖に送る人もさういふ心懸を持ちたい。

大和心

佐藤左久作曲

敷島の大和心を、人問はゞ、朝日に匂ふ山櫻花

【句義】敷島、大和の枕詞、○匂ふ、色の美しく映えること。

【通釋】日本魂はどんなものかと人が尋ねるなら朝日がうつる櫻の花の様な立派なものだと答へてやらう是は本居宣長の歌。

兎

兎うさぎ何を見てはねる、十五夜お月樣見てはねる

【句義】十五夜、太陰暦八月十五夜で滿月の夜○月の中の黑い影を兎といふのは昔支那から傳はつて來た話で夫から月といへば兎といふ樣になつた。
【通釋】兎よ何がそんなに嬉しいか月が出て來たので嬉しいの。

櫻

櫻さくら、彌生の空は、見渡すかぎり、霞か雲か、にほひぞ出づる、いざやいざや、見に行かん
【句義】彌生、三月の異名○にほひぞ出づる、花が咲き出したこと。
【通釋】春の最中になると櫻が咲き出して其處此處一面に霞か雲がかゝつた樣に綺麗だサアサア見に行きませう。

花うつぼ

加藤壽岳作

ものゝふの、櫻狩して歸るにも、やさしく見ゆる、花うつぼかな
【句義】ものゝふ、武士○櫻狩、花見をして日を暮すこと○やさし、優美○花うつぼ、矢を入れて負ひ居るもの花見歸に櫻の枝を入れた形。
【通釋】花見歸に花をうつぼに入れて何と優美な武士では無いか勇しい上に優しい是が眞の大和心の表徵といふもの。

花競

梅の白妙、櫻のにほひ、桃の薄色こきまぜて、春の綾織る、絲柳
【句義】梅の白妙、梅の花の白く美しいこと○こきまぜて、搔き交ぜて○春の綾織る、色々の花が交つて綺麗な有狀を綾に見立てたのである○糸柳、枝垂柳の枝を糸をかけたのに見立てゝの名。
【通釋】春は梅の花や櫻の花や桃の花が咲き夫に柳の綠が交つて綾錦の樣に綺麗である。

白雪

佐藤左久作曲

吉野山、峰の白雪ふみ分けて、入りにし人のあとぞ戀しき、入りにし人のあとぞ戀しき

【句義】吉野山、大和國にあり。

【通釋】是は靜御前が鎌倉鶴が岡の社前でうたつた歌で吉野山の雪を分けて山奥へと御出でになつた方が戀しい。

若菜摘

佐藤左久作曲

春日野の、若菜摘にや白妙の、袖ふりはへて人の行くらん

【句義】春日野、大和國にあり○若菜、春の七草○白妙、袖の枕詞○袖振り延へて、長い袖の着物を着て勞働服を脱ぎ遊びの着物にかへて。

【通釋】是は古今集紀貫之の歌で長い袖の着物を着て遊びに人が行く彼は春日野へ若菜摘に行くので有らう。

鶴龜

鶴は千代、龜は萬代幾年も、いはひ重ねてめでたけれ

【句義】愛でたけれ、感愛の心。

【通釋】鶴は千年龜は万年共に長生のめでたいものよ。

螢

清き流のいさら川、袂すゞしき夕暮に、螢とぶなり、いざや幼兒、取り集め來て夜もすがら、窓の光に書を見よ

【句義】いさら川、小川のこと○窓の光に書を見よ、昔支那に車胤といつた人貧しくて燈油を買ふことが出來ず螢を集め其光で讀書して後大に立身した夫から後學問を勵むことを螢の光に書を讀むといふ様になつた。

【通釋】風も涼しい夕方川に螢が飛んで居る綺麗なことよサア子供等よ彼螢を集めて學問した人の様に是から心懸けなさい。

海老

えびは元より翁にて、腰に梓の弓をはり、目さへめでたき千代八千代

【句義】梓の弓、梓で作つた弓で梓は木の名○目さへめでたき、鰕の目の出て居る

のを目出度に懸けたのである。

【通釋】海老は弓なりに腰の曲つた翁の樣で目が出て居て目出たい長生の姿である。

四季の花

春は花、夏は橘、秋は菊、冬は水仙うめもどき

【句義】花、櫻のこと○梅もどき、葉は梅に似て枝細く五辨淡紅の花が夏の初に咲く。

【通釋】四季の花を列ねたもの。

落梅

年たちかへる春の空、垣根の草は色づきて、柳の絲もうちけぶり、薫もゆかし梅の花、をりもをりとて笛の音の、雲に響ける心地して、花も散るなり、花も散るなり笛の音に

【句義】年立ちかへる春の空、昔の暦は立春と正月元日と同じで有つたからかういつたので有る○柳の糸もうちけぶり、柳の芽が出て來ること○笛の音の雲に響ける心地、上手に笛を吹くと雲が漂ふと昔支那の人が言つたことがある。

【通釋】年が替つて春になると垣根の草は青くなつて柳も芽をふく梅は咲いてかをる其處に上手な笛の音がして其響に梅の花も散る。

雪中の梅

今井慶松作曲

降りつもる、雪を凌ぎて咲く梅は、松の操に劣らざりけり

【通釋】眞白に積つて居る雪にも負けず咲く梅の操は中々四季に緑をかへない松にも劣らない。

春日影

常磐なる松の木末に、雛鶴が、みぎはの龜と諸共に、千代を樂しむ春日影

【句義】常磐、永久かはらぬこと○雛鶴、鶴の子○みぎは、水のきは○春日影、春

の長閑な日向。

【通釋】　松の上には鶴の子が居て池の水際には龜が居て鶴龜共に千代をかけて樂しく遊ぶさても長閑な春の日よ。

歌の道

鶯も蛙も、うたふ歌の道、月雪花の折々は、心うらゝにうたへ樂しめ

【句義】　鶯も蛙もうたふ歌の道、是は古今集の序文に「花に鳴く鶯水にすむ蛙の聲を聞けば生きとし生けるもの何れか歌をよまざりける」と有るのを取つてかう言つたので有る。

【通釋】　鶯も蛙も歌をうたふと言ふから況して人としては月雪花の時々には心長閑に歌ひ出して歌の道に樂しめ。

福壽草

初春の日向になほす福壽草、めでたき御代の長閑さよ、花の笑顔もうつりぎな、つひ蕾さへ開き初め

【句義】　なほす、据ゑ置くこと○花の笑顔、咲いた花のこと。

【通釋】　泰平な御代の初春はのどかで日向に置いた福壽草もニコ／＼笑ひ出して彼方此方に愛嬌を撒くと夫に引かされて外の蕾までも咲き初める。

夏心

佐藤佐久作曲

わが宿の、池の藤波咲きにけり、山時鳥いつか來鳴かん

【句義】　わが宿、我家○藤波、藤の花を波に見立てゝいふ言葉○山時鳥、山と有つてもたゞ時鳥といふのと同しこと。

【通釋】　古今集に詠人知らずと有る歌でわが家の藤の花が咲いたが時鳥は何時來て鳴くて有らうか。

初秋

佐藤佐久作曲

秋來ぬと、目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる

【句義】　來ぬ、來た○さやか、ハツキリ。

【通釋】是は古今集藤原敏行の歌で秋が來たと目にハッキリとは見えないが風の音をきくとたしかに秋の聲がする最早秋になつたかと驚かれる。

弓八幡

山田検校作曲

松高き枝もつらなる鳩の峰、曇らぬ御代は久方の、月の桂の男山、げにもさやけき蔭に來て、君萬歳と祈るなる、神にあゆみを運ぶなり、神に歩を運ぶなり

【句義】弓八幡、男山八幡宮のことで源氏の氏神武運を守り給ふ神即應神天皇である天皇御降誕の時赤白の旗八旒空から降たので八幡といふ弓矢幡の三つの武具の名にも通はせて有る○松高き枝も連なる、松は徳川家は元松平家で有るから夫に言寄せて有る枝も連なるは御連枝方といふ心枝の繁つて居るところを見せて御繁昌の徳川家御一門といふこと○鳩の峯、山城國にある男山の一名○曇らぬ御代、治まつた御代○久方、月の枕詞○月の桂の男山、桂は月世界に有るといふ木桂の男といふのは善き男のこと夫を男山に懸けたので有るげにもさやけき蔭に來て、實に神徳明かなこの御山に來て○神に歩を運ぶなり、祈願の爲に參詣すること。

【通釋】御一門御繁昌で泰平の御代是も守護の神の靈徳で有る其神の祭つて有る男山になほ我君の万歳を祈る爲に參詣すると徳川將軍家を祝つたもの是は謡曲の弓八幡から出た。

手習

手習ふ稚兒よ難波津に、咲くやこの花冬籠り今を春べと文字の花、書の林にかをらせて見よ

【句義】稚兒は乳兒だが今は廣く子供のこと○難波津、今の大阪のこと○この花、梅の花○冬籠、冬の內木が芽を出さないこと○春べ、春は物の榮える時春榮の心○難波津に云々、是は博士王仁が仁徳天皇の御盛徳を讃嘆して「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べと咲くや此花」とよまれた歌の言葉○文字の花、美しい字のこと○書の林、學問の道のこと花の緣で林といつたのである。

【通釋】　手習する子供よ梅が冬の内に寒さに堪へて春に咲き出る様に若い内に苦勞して手習をして後に立派な花の様な字を學問の道に咲かせて見よ。

深雪

今よりはつぎてふらなんわが宿の、薄おしなみ降れる白雪、薄おしなみ降れる白雪

【句義】　つぎて降らなん、毎日續いて降るがよいぞやの心○おしなみ、押し靡かせて

【通釋】　是は古今集に詠人知らずとある歌で今日我宿から見渡の薄を押し靡かせて雪が降つて綺麗なこと是から毎日降ればよい。

新年の雪

山登萬和作曲

見渡す限野も山も、春に知られぬ花咲きて、一夜の程に新しき、年となしつる今朝の雪、たのみ多かる世のさまも、さやかに見えてめでたしや

【句義】　春に知られぬ花、雪が木の枝に積つて花の様に見えること○一夜の程に新しき年となしつる、一面に雪が積つて一夜の内に様子がかはつたこと○たのみ多かる、頼みが多いに田の實(稻)が多く取れると懸けた雪は豊年の兆と昔から言はれて居る。

【通釋】　今朝見ると野も山も一面に雪が積つて花の様で春が知らない花が咲いた一夜の内に周圍の様子がかはつてしまつた是では今年も豊年であることがたしかに見えてめでたい。

如月

山登萬和作曲

きさらぎ空のうらゝかに、をちの山べは雪消えて、世は花鳥の春なれや、都のちまた賑ひて、深山の奥も青柳の糸にぬふてふ花笠に、さゝ鳴ながら鶯の、春の來つるとうたふ音を、心の友にすみなれて、越の山家の樂しさや

【句義】　きさらぎ、二月の異名○をちの山、遠くに見える山○花鳥の春、花が咲き鳥が囀づる陽氣な春○糸に縫ふてふ花笠、古今集に東三條左大臣の歌「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざゝん老かくるやと」から出た言葉で柳の糸で縫ふ

といふ花笠○さゝ鳴、鶯の鳴き始めの聲○春の來つるとは格に違ふ春來にけりとに改めるとよい○越、今の越前越中越後のこと。

【通釋】　二月になると空は長閑で遠くの山は雪も消え花は咲き鳥は鳴き春らしくなり都の町々賑やかで奥山の梅にも鶯が鳴きはじめた夫を心の友として捿み馴れて見れば越の國の山家も中々樂しいもので有る。

秋の七草

秋の野に、咲きたる花は何々ぞ、おのが指折り數へ見よ、錦を粧ふ萩が花、尾花葛花女郎花、誰がぬぎかけし藤袴、親のなさけの撫子に、露を命の朝顔の花、この七草の花はしも、昔の人のめでそめて、秋野の花のうるはしき、其名は今に高まどや、野邊に匂へる秋の七草

【句義】　誰が脫ぎかけし藤袴、草の名のふぢばかまを藤色の袴に懸けたので古今集藤原敏行の「何人か來て脫ぎかけし藤袴來る秋毎に野べを匂はす」といふ歌から出た○親のなさけの撫子、花の撫子を鍾愛する兒に懸けた○高まど、大和國高圓野のこと評判が高いと懸けた。

【句義】　秋の野に今咲いて居る花は何か數へて見れば錦の樣な萩の花尾花葛花女郎花誰が脫いで掛けて置いたかといふ藤袴親が大事に育てた撫子の花露の有る間だけを命として咲く朝顔この七色の花を昔の人が珍重しはじめて奇麗だといふ評判が高くなつた高まどの野の七草。

吉野山

雲と見てしはよそめにて、花わけのぼる吉野山、霞の奥は知らねども、見ゆる限ぞ櫻なる

【通釋】　吉野山に雲がかゝつたと見たのは遠くから見た時の間違で來て見ると是は〱一面の花盛霞の奥は分らないが目に見える限りはみんな櫻である是は八田知紀の「吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限は櫻なりけり」といふ歌から出た。

高砂

所は高砂や、尾上の松の年ふりて、猶いつまでもいきの松、是も久しき名所かな、是も久しき

名所かな

【句義】 高砂、尾上、播磨國にあり○年ふりて、年古くなつて○命ながらへて、長生をして○いきの松、九州いきの松原に生きを懸けた。

【通釋】 高砂や尾上の松の様に年長く長生をして是からもまだ〱生きる生の松原是も久しく聞えて居る名所であるよナア。

梅づくし

靜心なき春の日に、風が誘うて梅が香つれて、北野の梅や薄くれなゐに、夕日まばゆき窓の梅、誰が袖ふれしねやの梅、心のやみは梅ならで、いつか別を世は白梅か、君をやり梅惜しむは花の、香もなつかしき紅梅の、飽かぬ契を梅にかたらん

【句義】 靜心なき、心が落付かぬこと○北野の梅、京都北野の梅北に來たを懸けた○誰が袖ふれし閨の梅、古今集の「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」といふ歌から出たので誰が來てこんなよい香を殘して行つた閨の梅かといふこと○世は白梅、知らぬを白梅に懸けた○君をやり梅、君を歸してやりを太宰府のやり梅に懸けた。

【通釋】 心がソハ〱して落ち付かないことよ春の風が香を誘つて來た北野の梅夕日に紅くまばゆい窓の梅誰の袖がさはつたかよい香のする閨の梅別がつらいので心が闇になつても其闇の中に知らぬ顔をして居る白梅君を歸してやるやり梅惜しいのはなつかしい紅梅の様な人其人と飽きない契をせめて梅にでも語らう。

春の朝

上原眞佐喜作曲

霞にむせび香に迷ふ、鳥もうたへば蝶も舞ふ、春のたましひ花となり、光のどけき日に匂ふ、大和島根の朝ぼらけ、櫻に笑まぬ人やある、櫻に笑まぬ人やある

【句義】 霞にむせび香に迷ふ、春の野に霞や花の香が深く立ち籠めた形容○鳥もうたへば蝶も舞、春が來て鳥虫の喜ぶさま○朝ぼらけ、夜の引き明け時○櫻に笑まぬ人やある、花を見て喜ばない人が有らうか有るまい。

【通釋】 霞や花の香が立ちこめた春は鳥も蝶も喜んで歌つたり舞つたりする春の魂

が櫻花となつて形をあらはして長閑な朝日にうつる日本の國の朝げしきを見て愉快に感じない人は有るまい。

今様朝妻舟

山田檢校作曲

一夜かりねに近江路の、朝妻山は深からぬ、人の契の名なれやと、馴れにし鳥籠の山風に、寢亂髪の柳かげ、つながぬ舟の浮きて世に、遂のよるべはいさや川、いざ白波も聲そへて、うつや鼓の、うつや鼓のうつゝなや

【句義】　今様朝妻舟、當世風の遊女舟といふこと近江國朝妻の渡に居たからの名○一夜假寢にあふみ路、近江に逢ふ身を懸けた○朝妻山、朝妻渡の側にある山朝に淺の心を通はせてある○鳥籠の山、近江國にあり床に懸けた○寢亂髪の柳かげ、山風に吹き亂された髪の様な柳○遂のよるべはいさや川、いさやは不知の心遂にたよりにする所を知らないをいさや川に懸けたいさや川も近江國にある○うつや鼓、鼓を打つのと波の音が鼓の様に響くのとを兼ねた心でうつゝの序詞この頃の遊女は鼓を持つて居たので有る。

【通釋】　一夜を假に逢ふ近江の朝妻舟は其側の朝妻山の名の様に深くない約束の名で心は髪の様に亂れ繋ぎ付けて無い舟の様に取り止めも無く世を渡つて最後の落付どころもわからないさて〳〵なさけない事ようつゝないことよ。

龜と兎

もし〳〵龜よ龜さんよ、世界の内におまへ程、あゆみののろい者は無い、どうしてそんなにのろいのか、なんとおつしやる兎さん、そんならお前とかけくらべ、向ふの小山の麓まで、どちらが先にかけつくか、どんなに龜がいそいでも、どうせ晩までかゝるだらう。こゝらでちよつと一眠り、グウ〳〵グウ〳〵これは寢すぎた、しくじつたピヨン〳〵ピヨンあんまり遲い兎さん、さつきの自慢はどうしたの

【通釋】　油斷と自慢とを戒めた歌。

早春

今井慶松作曲

窓の鶯、朝な〳〵、曉知らぬ夢路をとひて、春めきそめぬ昨日今日、袖ふく風は猶寒けれど、今朝や遊ばん野に山に、梅のさかりの過ぎぬ間に

【句義】　朝な〳〵、毎朝○曉知らぬ夢路、曉知らずに眠る春の寢心よきこと。

【通釋】　この頃は春らしくなつて來て毎朝寢て居る内から窓に尋ねて來て鶯がなく

まだ風は少し寒いが梅の散らない内に今朝は野山に遊に行かうでは無いか。

秋の夜

松虫の、鳴く音もいとゞあはれなり、葎が奥の夕まぐれ、萩がさえだにおく露も、そよと音なふ風故に、玉と亂れて淋しとも、いとゞ淋しき折からに、高根を出づる月のかげ、ちりも曇らぬ光かな、松ふく風も一しほの、景色を添へて照りまさる、今宵の空のさやけきに、寝てやはひとり明石潟、月に浮かるゝ友あらば、鳥はなくとも詠めあかさん

【句義】あはれ、面白いこと○むぐらが奥の夕まぐれ、雜草茂る中の庵の夕方○玉と亂れて、風に露がバラ〳〵散る有狀○高根、高い峰○やは、反動辭○明石潟、播磨國にあり夜を明かしに懸け寝て夜を明かさうか明かされないといふ心になる。

【通釋】秋の夜は松虫の鳴くのも面白い荒れ果てた雜草の中の庵の夕方は萩の小枝の露がソヨ〳〵吹く風に玉と散つて見るも中々淋しい時分に向ふの峰から月が出てよく冴え渡つて居る松ふく風になほ冴え渡るアヽよい景色こんな夜を獨寝て明かされようかとても明かされない善いところよ明石潟はもし一緒に月に浮かれてくる人が有るならば夜が明けるまで詠めたい。

さみだれ

山登松齢作曲

なよ竹の、夜の間の夢の短きに、長々しくも繰りかへす、軒の糸水いとゞしく、槇の板戸のあけくれに、しめり勝なる閨の内、うつら〳〵とうたゝ寝の、枕に遠き時鳥、雲間ほのかに忍ぶねも、ゆかしやまゝにならぬ身の、うき數まさる夏草の、鐘をばよそに聞き捨てゝ、まだ焚き殘る蚊遣火の、もゆるばかりの物思ひ、晴るゝ間も無き夜半のさみだれ

【句義】なよ竹、嫋やかな竹○夜の間の夢の短きに、夏の夜の短きこと、夜を竹の節に懸けた○軒の糸水、雨垂○槇の板戸のあけくれ、雨戸の開けに夜の明けを懸け是より夜が明けても日が暮れても物思ひが絶えないことをいふ○うたゝ寝、假に横になること○忍ぶねもゆかしや、時鳥が遠くで雲の中に姿を隱し鳴く音が僅に聞えること自分も物思の爲めに心の内で泣いて居る忍音仲間でゆかしい○うき數まさる夏草の、夏草の茂る樣に憂いつらい事が數多くなる心○鐘

をばよそに聞き捨てゝまだ焚き殘る蚊遣火、夏の夜は短いので夜明の鐘はきこえてもまだ宵の蚊遣火が燃え殘つて居る自分の物思ひの火も燃え殘つて居て中々晴れさうにも無い。

【通釋】竹の節の短い夏の夜にも似合はず長々しく每日雨が降つて明けても暮れても晴れ〴〵としないで寢て居ると枕に近く時鳥が忍音に泣く夫は思ふ儘にならないで憂いつらい事が夏草の樣に數多くなつて夜は明けても未だ蚊遣火が燃え殘つて居る樣に自分の物思も容易に盡きないで胸の晴れる間が無いのと同じ樣に每日雨がふりつゞくさて梅雨といふものは氣分まで晴々としないもので有る。

初櫻

佐藤左久作曲

長閑なる、春の日影は君が代の、光やうけぬ初櫻、去年植ゑかへし賤が家に、打連れ立ちて都人、集ひ來にけり今日の日も、花の木かげに菅の根の、長き日あかぬ見る人の、心にめでゝ心をば、花も汲みてか嬉しさの、こぼるゝばかり咲き匂ふ哉

【句義】春の日影、春の日のこと○君が代の光やうけぬ、君が代の光を受けたと見えて○菅の根、長の枕詞。

【通釋】春の日は君が代の光をうけたと見えて如何にも長閑である其光を受けて去年百姓家の樣なわが家に植ゑかへた櫻が咲きはじめて都の人も連れ立つて見に集つて來た春の長い日を一日飽きないで賞美してくれる人の心を花も酌み取つて嬉しさがこぼれ出て花がこぼれさうに美しくさいた。

小野の山

忘れては、夢かとぞ思ふ思ひきや、戸無瀨の宮の花ざかり、御供つかへてよる晝わかず、君を八千代と祝ひしも、天の河原や交野の野邊に、御狩暮しゝ其時々を、思ひ出づれば袖のつゆ、睦月ばかりのことなれば、深雪ふりつみ道さへわかず、たど〳〵しくも音づれて、見あげまつれば何となく、物の哀ぞ身にしみまさる夢かつゝか小野の山、雪ふみ分けて君を見んとは

【句義】小野山、山城國にあり文德天皇の皇子惟喬親王世をすてゝ此山に入らせられ小野の宮といはれたこの歌は極めて睦しかつた在原業平が小野山に御尋ね申じ上げた時の心持をうたつたのである○忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや、業平

が小野宮を御尋ね申し上げて御出家遊ばされた姿を見て悲しんで「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや道ふみ分けて君を見んとは」世の中は夢の様に思はれると申し上げられた其歌の上の句である○戸無瀬宮、山城國大井川の川上に有つた惟喬親王の御所○天の河原、河内國から大和國へかゝつて居る地名○交野、河内國にあり○御狩、花見のこと○袖の露、涙○睦月、正月の異名○雪ふみ分けて君を見んとは、業平の歌の下の句で君の樣な尊い方を雪を分けて來てこんな山奧で御見上げ申す時代が來やうとは思はなかつたといふ心。

【通釋】ウツカリして居ると夢の様に思はれる昔戸無瀬の宮の花盛の頃夜晝御側離れず御供申し上げて君を八千代に御榮ゑ遊ばす様に祈つたことも天の河原や交野で御花見の有つた時分を思ひ出すと今更涙の種である丁度正月頃で有つたから雪は深いし道はわからず難澁して來て見ればこの御姿なさけ無いことで有る思へば世の中は夢か現か小野の山へ雪を分けて來ようとは思はなかつたと業平の歌の上の句で言ひ起し下の句で結んだ中々巧妙な作である。

金剛石　　山木千賀作曲

金剛石も磨かずは、玉の光は添はざらん、人も學びて後にこそ、眞の德はあらはるれ、時計の針の絶間なく、廻るが如く時の間も、日かげ惜しみて勵みなば、如何なる業かならざらん、水は器に隨ひて、其さまぐになりぬなり、己にまさるよき友を、選び求めて諸共に、心の駒に鞭うちて、學の道に進めかし

【句義】日かげ、時間○なりぬなり、なるので有る。

【通釋】昭憲皇太后御作で玉も磨かざれば光なく人も學ばざれば道を知らず夫で有るから撓ます勉強し善き友を選びて共々に修業せよといふ意味の御歌。

三つの船

花の都の大井川、遊も三つの友をわけ、船のよそひは唐錦、綾織る波の川淀に、おくれて乘れるみやび男は、歌にも詩にもしらべにも、かねて心を筑紫箏、つくしゝ業は白波に、今も響くや、今も響くや大井川

【句義】三つの船、白河天皇大井川に行幸あり詩歌管絃の三つの船を浮べて各得手なものに乘らせた時に桂大納言源經信が後れて來てどの船でも岸に寄せて吳れ

といつた皆三つの業に勝れて居るのに驚いた是は夫をうたつたので有る○大井川、山城國にあり○船の裝は唐錦、唐錦は立派な錦といふこと錦で包んだ様な立派な船○綾織る波、上に錦とあるから綾と續けて波の美しいところを形容した詞○川淀、水のゆるく流れるところ次のおくれの心にも通ふ○みやびを、風流な男○しらべ、管絃のこと○かねて心を筑紫箏、前方から修業に心を盡しを筑紫に懸けた筑紫箏は箏の異名で宇多天皇の御代に命婦石川色子が豐前の彥山で唐人から箏曲を學び得たからの名で有る。

【通釋】　花の盛の都大井川で御遊の時三色に友を分け船も立派に仕立てゝ出すと後れて來た一人が歌でも詩でも管絃でもよいからと言つた前方から心を盡して修業された人で其名譽は大井川の波の響と共に今の世にまで響き渡つて居る。

山櫻

長閑なる春の心にさそはれて、花の下紐うち解くる、契や昨日今日はまた、思はぬ方の山風の、吹くに任する花の枝、夫も浮世の習じやものを、心弱さを咎にして、あだなる花とともすれば、たつ名恥かし山櫻

【句義】　花の下紐打解くる、春に誘はれて花の咲くこと○ふくに任する花の枝、風に誘はれて散ること○あだなる花、心の淺はかな花○ともすれば、やゝともすると。

【通釋】　長閑な春の心に誘はれて咲いたと思へばはかない約束で昨日今日は思ひも寄らない風に誘はれて散る夫も世の中のならはしで有るから致し方が無いものをやゝともすると人が心弱いのを咎めて淺はかな花よと言はれるのが恥かしい。

喜撰

我庵は、都のたつみしかぞすむ、うつぶし染の麻衣、色といふ字はどうしたものか、始終のさだかにも、月のかほばせ見せぬも憂しや、雲の上なる三十一文字を、歌にのみ聞く戀の種、しげりやすうて其くせに、秋の初花露よりもろく、枯れにし後の音づれは、谷の螢か沖邊行く、あまのいさりの思ひをよそに、樂な夜毎の獨寢は、世をうぢ山と人はいふなり

【句義】　喜撰、この歌は喜撰法師の「わが庵は都の辰己しかぞすむ世を宇治山と人

はいふなり」といふ歌を上下に分けて付けてあるこの法師は歌の名人で宇治山に籠り密法を修し後雲に乘つて去つたといはれて居る○わが庵は都の辰巳しかぞすむ、自分は都の東南に捿んで居るといふこと○うつふし染の麻衣、庵が低くうつ伏になつて居ることを黒染料の五倍子に續けたのであるふし染の麻衣は法衣のこと○色といふ字は、書き始が撥ねて終も撥ねて取りついて居るところが無いので始終のしかとしない心○月のかほばせ、月のことで美しい顔にも通ふ○雲の上、貴い方々○あまのいさり、漁夫の舟で焚く火○世をうぢ山、うぢのうを憂に通はせてつらいところといふ心になる。

【通釋】　わが庵は都の東南其所に捿んで墨染衣を着て居るその墨といふ色イヤ色といふ字は始終がしかとしない字で其樣に月も顏をしかと見せて吳れないのがつらいことよ戀といふものは貴い方が三十一字の歌でよくいはれるが其戀の種は茂りやすくて一度思ひ始めると後から後からつゞくが其くせ秋の初花の露よりも脆く枯々になつて來て吳れなくなつたあとは谷の底に居る螢の樣に少しも見えず沖へ出て行く漁火の樣で段々見えなくなるいつそ思ひ切つて樂な夜每の獨寢をして居ると夫では世の中が憂い處になつてしまうと世間の人は言はれる。

六段前歌

まつとても花に寢ぬ夜は無きものを、如何につれなき山時鳥、幾夜こがれて待つ閨のとに、せめて慰む妻箏の、調さえ行く月のかげ

【句義】　まつとても花にねぬ夜は無きものを如何につれなき山時鳥、櫻の花の爲には寢ない夜は無いが時鳥を待つ夜は寢ないで居るこんなに心をこめて居るのに鳴かないとは不人情な時鳥であるといふ心○こがれて、心が身に添はないこと○妻箏、爪箏でたゞ箏といふのに同じ○調冴え行く月の影、箏の調が冴えるのを月に言ひ續けた。

【通釋】　花よりも心を盡して寢ないで待つのに時鳥は閨の戸に來て鳴かない不人情なものだせめてはと慰めに箏を調べると箏の音も月も冴える。

六段後歌

ふけて霜夜のさむしろに、思ひはつもりて雪のあけぼの

【句義】さむしろ、狹筵であるがたゞ敷物と見てよい。

【通釋】夜が更けて寒い閨に色々物思が積る夜が明けて見たら雪も積つて居た。

裏歌物

榮ゆる宮

年毎に榮ゆる宮の園の内、色香を競ふ花の頃、池の鏡を吹く春風も、錦を洗ふ水の面、きらを飾れる手をやめが、みさをとる手に散りかゝる、花は白波、袖は雪、岸根に咲けるかきつばた、色をかはせる紫の、藤のゆかりぞなつかしき、樂のひゞきは釣殿の、箏の調にまちとりて、うたふ聲には雲をもとゞめ、舞のたまもとの乙女が袖は。迦陵頻伽の心地こそすれ

【句義】池の鏡、水面平かに鏡の樣な池といふこと○錦を洗ふ水の面、花が水底に寫つて錦の樣に美しいこと○綺羅を飾れるたをやめ。綺麗な着物を着た美人○みさをとる、池に舟を浮べて棹をさすこと○岸根、岸といふに同じ岩根垣根の類○藤のゆかり、紫をゆかりの色といふので藤の紫がといふこと○釣殿、水に臨んだ御殿○待ちとりて、待ちつけて○雲をもとゞめ、音樂が上手だと空行く雲が止まると昔支那でいつた○迦陵頻伽、佛の國の鳥で不老不死顔美女の如く聲は類なく美しいといふ。

【通釋】年々に愈御繁昌になる御殿の御園の内に色々の美しい花が咲いて池を吹く風に水がゆれると錦を洗ふ様である其處を立派な衣裳を着た美人が舟に乗つて棹をさす其手に散つて來る花は波の様で袖は雪の様に美しい岸には燕子花上には藤互に紫の色を見せ合つて居る様子もなつかしい此方の御殿の樂は釣殿の箏の調を待ちつけて合せる其うたふ聲の面白さには雲も止まるで有らう乙女の舞の袖は佛の國の迦陵嚬伽を見る様である。

春の宮曲

佐藤作久作曲

三千とせに、なるてふ桃の花の顔、開くや露の玉の井に、玉のかんざしさす月影の、玉しく宮の舞の袖、唐大和の織物は、梅に牡丹に名もかをる、都言葉はすいも草、あづまはだてのおもだかや、はひまつはるゝ蔦かづら、匂ふ花菱ふきじざい、みやうが有りけるこの殿の、御簾のひまもる春風の、寒さしのげと恵もあつき、君がたまもの重ねて幾重、千代に八千代も榮つきせじ

【句義】三千年になるてふ桃の花の顔、西王母の仙園に三千年に一度實がなるといふ桃の花の様な美しい顔○開くやつゆの玉の井、笑み榮えることを面目が開けるといつて其美しい花の露が玉の様だと玉の井に懸けた玉の井は山城國にある○玉のかんざしさす月影、玉の簪をさすを月がさすにかけた○玉しく宮の舞の袖、月影がさして玉を敷いた様だといふのを御所を玉敷といふのに懸けた○唐の大和の織物は、舞衣の立派なこと○名もかをる、有名な○都言葉はすいも草、都言葉は粋なものといふのをすいも草にかけたすいも草はカタバミのこと紋所にもある○あづま　東國のこと○だての面だか、徳川時代に仙臺の伊達家が大層華奢を極めたので華奢をだてといふ様になつた面高は威張つて居ることを草の名に懸けた○はひまつはるゝ蔦蔓、蔓が這ひ纒ふつたかづら○花菱、水草で白い花が水面に咲く○ふき自在、草の名の蕗を富貴にかけ自由自在の心につゞけた○みやうが有りけるこの殿、茗荷を冥加に懸けて神の冥加があるこの御殿○君がたまもの重ねて幾重、頂いた御衣を重ねて其重ね重ねに千代御榮えになるで有らうとつゞく。

【通釋】不老長生の仙宮の桃の花が開いた様な美しい人が其花の露の玉の様な美し

い玉の簪をさして梅牡丹カタバミ澤瀉蔦花菱などの模様の舞衣で舞ふ様子は何ともいへない程立派である富貴自在に神の冥加にかなつたこの御殿で春もまだ寒いからとて御衣を賜はる夫を幾重も重ねて着る様にこの御殿は幾重にも千代に八千代にかけて御繁昌は盡きまい。

千代の榮

神の御前の榊葉に　心のしめをうちはへて　いつきぞまつる代々の親の　御蔭忘るゝ時もなし　うつればかはる世の中を、其程々にうら安く、渡るも神の惠なり、御靈のふゆこそかしこけれ、軒端にしげるゆづり葉のゆづりを受けしやしは子が　連なる枝も數そひて　榮ゆく末は千代までに

【句義】　心の注連、形ばなりで無く心から清淨になること○打ちはへ、打延でしめを張ること○いつき、神を祀ること○うら安く、心安く○御靈のふゆ、神靈の加護○かしこけれ、恐れ多く有りがたい○ゆづりを受けしやしは子、相續した子孫の末やしは子は彌數子の心○連なる枝も數そひて、親類一門も段々殖えて。

【通釋】　心を清め神の御前の榊に注連繩を引いて今日御祭りをする思へば代々の親の恩は忘れる間も無い時代は替つても替らずに心安く暮すのも神の惠である御加護の靈德がまことに有りがたくかうして代々相續して子孫も一門も增して千代まで榮える様に有つてほしい。

西行

われも昔はますらをの、眞弓つき弓年を經て、引きたがへたる朝夕は、命なりけり旅衣、苔の衣に身を染めかへて、心の塵を袖拂ふ、やぼな世界にいとし子の、いとしかはいは昔の事よの、よしの山、芳野山、こぞの栞の道かへて、まだ見ぬ花の色々を尋ね〳〵て歌枕、筆のすさみの墨染櫻、うつろふ春の花の顏、瘦せる姿に笠着たなりを、水の鏡にかげとめて、しばし立ちよる柳蔭

【句義】　西行、俗名を佐藤義淸といひ武勇に優れ和歌が上手で有つた鳥羽上皇の寵を受け左兵衞尉に任ぜられ撿非違使にもなる處を御辭退し後世の無常を感じ妻子を捨て嵯峨に行つて出家し西行といひ又圓位ともいはれた時に年二十三諸國を行脚して建久元年二月七十三才で沒した○眞弓槻弓、檀で作つた弓と槻の木

で作つた弓上にますらをと有るからこゝへ武具をつらね槻を月に通はせて次の年につゞけた○引き違へたる、事志とかはりたること武士が出家したからかう言つたのである○命なりけり旅衣、今は旅衣が自分の命で有るといふこと是は西行の歌に「年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」とあるのから出た言葉○苔の衣、僧衣○袖拂ふ、袖で拂ふ心○やぼな世界、えぶの世界の誤えぶは燄浮で凡夫のこと○去年の栞の道かへて、栞は木の枝を折り道のしるしとするもの去年の心覺とは道をかへてといふこと是は西行の歌に「吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん」と有るのから出た○歌枕、歌によむべき名所○すさび、慰ながらの業○墨染櫻、墨染の袖になつて尋ねたについての名櫻が墨染色に咲くことは古今集上野岑雄の歌に「深草の野邊の櫻し心あらは今年ばかりは墨染に咲け」とある○花の顏、武士の時分の西行の様子○やせる姿に笠着たなり、出家の姿○水の鏡に云々、柳の蔭の水に姿を寫して今昔を思ひ入つたところ是は西行の歌に「道のべの淸水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりけれ」とあるのから出た。

【通釋】　自分も昔は武士であつたが年を經て事志と違ひ今は旅の衣を命として墨染衣になつて凡夫の心の塵を拂ひ淸め妻子が可愛いと思つたのは昔となつてしまつた吉野山を去年とは道をかへてのぼつて名所を尋ね筆を執つて思ふまゝに墨を染めて歌をよみうつればかはる今の行脚僧昔は立派な花の顏と柳の下水に姿を寫してしばし思ひ入る。

小夜砧

佐藤左久作曲

源も、淸き流の玉川に、すみのぼりたる月の影、姿うつれる手弱女が、つちの數々うつ音もしんと、なりまさりたる後夜の鐘、響きも長き秋の夜を、つくぐ思へば折も折、誰を松虫音に立てゝ、草の戶近く鳴き明かすらん

【句義】　小夜ぎぬた、さは發語きぬたは衣叩布を晒して打つこと秋の業○たをやめ、若い女○つちの數々、擣衣の槌の音○後夜の鐘、午前二時より後を後夜といふ鐘は寺鐘○誰を松虫、松を待に懸けた○草の戶、百姓家の門先。

【通釋】　水も月も綺麗な玉川べりで若い女が衣を打つて居ると槌の音にいつか夜は

シン〳〵と更けて後夜の鐘の音が響も長く淋しい秋の夜をつく〴〵物思に耽つて居ると其時丁度誰を待つて來ないのを恨んでか松虫も百姓家の門先に夜を鳴き明かす。

薄霞

梓弓、春の日かげも薄霞、かすみて見ゆる糸柳、いつしか眉をかけ初めて、風もぬるめる野べ毎に、はやもえ出づる初若菜、すゞなすゞしろすがやかに、雪間に見ゆる若綠、かはらぬ色も淺澤や、摘みて祝はん春の若草、打群れ遊ぶをさな兒に、肩をならぶる姫松の、綠の空になく田鶴は、千代の聲さへ添へてけり、千代に八千代の聲つみ添へて、かたみにあまる若菜こそ、行末長き少女子が、よはひをこむる花がたみ、春の心ぞのどかなりける

【句義】　梓弓、春の枕詞○春の日影も薄霞、春の日のかすむこと○眉をかけ初めて柳の芽の出ること○萌え出づる初若菜、七草の芽が出ばじめたこと○すゞ菜、菘○すゞしろ、大根○すがやかに、鮮やかに清く○淺澤、攝津國にある若菜の名所淺澤小野のこと○若草、春の野草○姫松、五葉松の一種であるがこゝでは小松と見てよい○田鶴、鶴のこと田は發語○かたみ、籠○花がたみ、花籠。

【通釋】　春の日もかすみ初めて柳は芽を出し風は溫くなつて何處の野へ出て見ても七草が青々と眞白な雪の間から見え始めたどれ〳〵摘んで來て祝はうか春の野の若草の上で遊んで居る子供と背の高さをくらべる小松の綠夫と同じ色の空に鶴のめでたい聲も聞える花籠の若菜には若い女子の長い生ひ先もこもつて見えて春はまことにのび〴〵としたよいもので有る。

紀元節

三代目　山登松齡作曲

雲に聳ゆる高千穗の、高嶺おろしに草も木も、なびき伏しけん大御代を、仰ぐ今日こそ樂しけれ、海原なせる埴安の、池の面より猶廣き、惠の波に浴みし世を、仰ぐ今日こそたのしけれ、天津日嗣の高御座、千代萬世に動きなき、基定めし其上を、仰ぐ今日こそ樂しけれ、空にかゞやく日の本の、萬の國にたぐひなき、國の御柱建てし世を、仰ぐ今日こそ樂しけれ

【句義】　紀之節、神武天皇橿原宮に初めて御即位あらせられし紀念の祭日でこの歌

は其日を祝つた唱歌で有る○高千穗、日向國にある山○高嶺おろし、山よりふきおろす風○海原なせる、海の如き○天津日嗣の高御座、天皇の御位○國の御柱たてし、國を建てられたこと。

【通釋】　初は九州高千穗の宮を御出立になり大和に入られ國中を御定めになつた神武天皇の御代をたゝへ次には悪もの共が無くなつてみな〳〵安心して日を送ることが出來る夫は埴安の池より廣い德惠であるといひ次に萬世一系の皇位を御定めになつた御德をたゝへ次には世界中に類の無い國柄を御建てになつた御功績をたゝへてある。

四季の詠

山登萬和作曲

新玉の、年立ちかへる初日影、曇らぬ御代の長閑さや、やがて霞める四方の山、梢木末も色添へで、初音ゆかしき鶯の、聲をしるべに梅が枝の、花の下紐うち解けて、櫻がさねも何時しかと、薄き單の夏衣、森の下つゆ玉ちりて、水に心ぞうつるなる、たもと涼しき秋風の、野邊の千草になく虫の、音も更け渡る夜な〳〵に、月もはえ有るけしき哉、袖に時雨の神無月、もみぢ葉誘ふ木枯や、庭の錦もこの頃は、たゞ白妙にふり積もる雪に心も冬ごもり、春をまつ間の閨の埋火

【句義】　新玉、年の枕詞○鶯の聲をしるべに梅が枝の花の下紐うちとけて、鶯の聲に誘はれて梅の花がさいた○櫻がさね、春着る上﨟の衣○水に心ぞうつるなる。水の側が涼しくて行きたくなる○よな〳〵、毎夜○月もはえある、月の光が一段と引き立つこと○神無月、十月の異名○木枯、冬の風○庭の錦、紅葉のこと○冬ごもり、冬すべての物の閉ぢこもること○埋火、炬燵の様なもの。

【通釋】　まづ初日の出は長閑なもの夫れから間も無く四方の山が霞む木の芽も出はじめる鶯の初音がすると夫に誘はれて梅がさく櫻の頃には人が櫻重を着るが夫が間も無く一重の夏衣となつて梅雨になると森の木からは玉の様な露がこぼれる暑くなつて來て水の側がよくなる其内に涼しい秋風が吹く野原に虫が啼く月の光も冴えて來る十月になると袖に時雨がふりかゝる冬の風が紅葉を散してしまつたあとはたゞ眞白に雪が積つて總てのものが冬籠になつて春までの間は閨で火にでもあたつて春を待つことゝなる。

早春興

今井慶松作曲

うら〳〵と、日影匂へる久方の、空を心の朝ぼらけ、なく鶯の音に誘はれて、野べの霞を分けつ、行けば、このもかのもの雪消えて、若菜つむべくなりにけり、子の日の昔忍ばるゝ、小松が原の一本柳、古枝いつしかめも春風は、猶寒けれどたぐひ來る、香こそえならねいざさらば。尋ねてや見ん梅の初花

【句義】　うら〳〵と日影匂へる、日が麗かに照ること○久方、空の枕詞○空を心、空の様に晴々した心持○このもかのも、彼方此方○子の日の昔、昔正月初子の日に野に出て小松を抜き取り祝つたもので有る○忍ばるゝ、思ひ出される○めも春風、木の芽の張るを春に懸けた○たぐひ來る、風に香が添つて來ること○えならね、言ふことも出來ない程に善い○いざさらば、サア夫れならば。

【通釋】　麗かな日の朝早く鶯の聲に誘はれて霞のかゝつた野を行くと此方彼方の雪は消えて七草が摘める様に芽を出して居るかうい ふ時分になると昔子の日に松を引いたらうと思はれる小松原の中の柳もいつか芽を出して來て風はまだ寒いが其風が運んで來る梅の香のどうもよいことよドレ〳〵梅の初花を見に行かうかしらん。

六段前歌

箏の音に、峯の松風通ふらし、何れの緒よりしらべ初めけん

【句義】　らし、推定辭。

【通釋】　拾遺集齊宮女御の歌で峰の松風はよく箏の音に通ふ様で有るが松風はどの緒から調べ初めたもので有らうか。

亂の前歌

ことわりや白菊の　ことわりや白菊の、きせ綿を暖めて、酒をいざや汲まうよ、まれ人もごらんずらん、月星はくまもなし、處は潯陽の江のうちの、酒もり猩々舞を舞はうよ、あしの葉の笛を吹き、浪の鼓どつとうち、聲すみ渡る浦風に、秋のしべらや殘るらん

【句義】　ことわりや、道理で有るよ○きせ綿、昔は菊の花盛に綿を着せた○まれ

人、客人○潯陽の江の内、支那の河の名○猩々、人の顔で泣く聲は乳兒の様で酒が好きだといふもの。

【通釋】　菊がよく咲いたどりや酒を酌まうか客人どうです月も星もよく澄んだこの入江の内で葦の葉の笛に波の鼓を打ち添へて猩々舞を舞つたなら浦風に其響が傳はるで有らう。

松づくし

うたひ囃せや大黒、一本めには池の松、二本めには庭の松、三本めには下り松、四本めには志賀の松、五本めには五葉松、六つ昔は高砂の、尾上の松や曾根の松、七本めには姫小松、八本めには濱の松、九つ小松を植ゑならべ、十で豊久野伊勢の松、この松は五ようの松にて、情ありまの松が枝に、くどけばなびく相生の松、又いついつの約束を、日を待つ時まつ暮をまつ　連理の松に契をこめて、福大黒を見せいな

【句義】　大黒、天竺の厨の神で福の神となつて居るがこゝでは万歳樂の助役の名○志賀の松、近江の唐崎の松○高砂の尾上の松、播磨國加古郡尾上村住吉神社の境内にある○曾根の松、播磨國印南郡曾根村天神社境内にあつて昔菅公が太宰府へ御出の時御手植になつたといふ松○豊久の伊勢の松、とよくはとようけの轉伊勢の外宮に百枝の松といふことが有る夫のことで此松ば五葉松て有るといふこと○情有馬の松、有馬の有を情ありに懸けた有馬の松は太古からの名所で紀伊國東牟婁郡有井村の新宮に到る街道の右方の並木の松○相生の松、播磨國加古郡高砂町にある木は一つで幹が二つになつて居る相生は相逐であらう夫故二本の松が有るべきことゝも思ふが今は別問題として置く○連理の松、枝を連ねた松で一樹兩幹の高砂の相生の松のこと。

【通釋】　一より十まで數の頭字のつく松を數へて夫婦仲よく睦じくして福の神の大黒天を見る様にこの御家は榮えよと祝つたので有る。

中歌物

春の田家　　佐藤左久作曲

このめ、春雨降る毎に、萠えまさり行くわが門の、桑の梢を吹く風に、今朝もこぼるゝ糸櫻、こがひの庭におり立ちて、つげの小櫛もとらぬ子の、おどろの髪に佐保姫が、かみのかけたる花かづら

【句義】このめ、木の芽が張るといふので春雨へつゞけた序詞○萠えまさり、芽が出ること○こぼるゝ、糸櫻、糸櫻の花が散ること○こがひ、養蠶○つげの小櫛もとらぬ子、忙しさに櫛で髪を揃へるひまの無い女子○佐保姫、春の山の神○花かづら、髪飾。

【通釋】春雨に門前の桑の葉は段々伸びる春は深くなつて櫻は散る養蠶で忙しくなつて來る櫛をとるひまも無いのでしどろに乱れたまゝの髪へ春の神様が櫻の花を散らしかけたので自然美しい花かづらに成つた。

花妻　　山田檢校作曲

たれに靡くかいつしかと、紐解き初むる萩の花、錦のとこにおく露の、思ひ亂れて秋の夜の、長き夜すがらいたづらに、雲井の月の影ふけて、とふにつらさのまさるとも、知らでやすぐる秋の風、身にしむ頃はなれもまた忍びかねてや小男鹿の、聲より落つる涙さへ、なほ萩が枝にかゝるらし、とにも角にも思ひ餘り、下葉も今は色に出で、こがると知らば立ちこむる、霧のまがきの隔なく、千秋をかけて紫の、ゆかり忘るな萩が花妻

【句義】花妻、鹿が妻をよぶあたりに萩は咲くといふので萩のことを鹿の花妻といふことになつた○錦のとこ、萩の花野の美しいことを錦の衾に見立てた○夜もすがら　終夜○いたづらに雲井の月の影ふけて、待つ人も來ず無益に月が西に傾くこと○とふにつらさのまさる、鹿が妻どひすればする程戀しくなるといふ心○なれ、汝○らし、想像辭○下葉も今は色に出で　古今集の「秋萩の下葉色づく頃よりや獨ある身のいねがてにする」といふ歌からでた言葉で萩の下葉が露霜の爲に紅葉すること戀しい心が顔色に出るといふのに通ふ○霧のまがき、霧が立ちこめて物を隔てるところから籬といつた○千秋、年長く○紫、萩の花の色でゆかりの色ともいふ。

【通釋】誰に靡いたといふのかしどけなく咲き初めた萩の花の錦の様な衾に露が置

き乱れた様に涙がこぼれて秋の長い夜を待てども甲斐なく月は西に傾いて思へば思ふほど戀しくつらくなるのをも秋風は知らぬ顔をして吹いて渡る其風が身にしみると鹿よお前も戀しさに堪へかねてか涙をこぼすと夫が萩の花にもかゝるとも角も萩の下葉が赤くなる様に自分も思が餘つて樣子にも出るまで戀ひこがれて居ると知つたならば露のまがきの様な隔なくして末永く御互に由縁があることを忘れない様にして呉れ萩の花妻よ。

民の賑

山登萬和作曲

高きやに、のぼりて見れば烟たつ、あやしの賤が伏屋まで、天照日影雨風も、時をたがへぬのどけさに、民の竈は賑へり、君の惠ぞ有りがたき、君の惠ぞ有りがたき

【句義】 高きやにのぼりて見れば、仁徳天皇の「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどは賑ひにけり」といふ御製から出た言葉で仁徳天皇の國見を遊ばされた時に竈から煙が多く上るのを見て朕富めりと仰せられた心○あやし、卑しに同じ○賤が伏屋、小さい百姓の家○雨風も時をたがへぬ、五風十雨といつて五日に一度風が吹き十日に一度雨がふる是が一番順調な天候と昔支那から言ひ傳へられた。

【通釋】 高き屋で國見を遊ばして小さな家からも豊かに烟が上るのを御喜び下さつたといふ大御惠は天照る日影の様に隅々まで洩れるところが無く時候は順調に年は益豊年で有りがたい御代である。

地久節

中村秋香作歌
山登萬和作曲

雲井の秋の宮深く、かげ明かにすむ月の、大御光はうち日さす、都に鄙におしなべて、かゞやき渡り玉鉾の、道をさやかに照すなり、野にも山にもあきあまる、廣き惠の白露に、學の庭の姫松も、月日に添ひて生ひ茂り、世のうき浪に根をたえて、枯れし千草も花咲けり、高き御蔭を仰ぎつゝ、今日のみあれをことほげば、ことゝる袖にふきそひて、千代を調ぶる軒の松風

【句義】 地久節、皇后陛下御誕辰の節會○雲井、こゝでは禁裏の心○萩の宮、皇后陛下の御殿○月の大御光　皇后陛下を月にたとへて申し上げたのである○うち日さす、都の枕詞○玉鉾、道の枕詞○惠の白露、皇后陛下の御恩澤といふこと

で君恩如二雨露一といふ語から出たもの○學の庭の姫松、學校の女生徒○世のうき波に根を絶えて、生活の道を失つたもの○枯れし千草も花咲けり、育兒院感化院などのことをいつたのである○高き御蔭、尊い御惠古今集にも「筑波根のこのもかのもに蔭は有れど君が御蔭にますかげもなし」といふ歌があるこの蔭は聖德のこと○御あれ、あれはあらはれの約で御降誕のこと○ことほげば、祝へば。

【通釋】　皇后陛下の御惠德は都にも鄙にも隔なく輝き渡つて女の教育も段々進み生活に苦しみはてたものも救はれて再花が咲く様なわけで其有りがたい御德を思ひつゝ今日の御誕辰を御祝ひ申し上げて箏をとると軒の松風までが添つて來て千代を調べる天地も御高德を讚へるので有らう。

御苑生の竹　　今井慶松作曲

御苑生の竹、榮ゆべき、根ざしいよ〳〵かたまりぬ、千尋のかげに五百重さす、姫小松さへ立ち添ひて、照る日を世々に助けこし、星の林の若ざくら、春の深山に咲きにけり、みこどり早く宿らなむ

【句義】　御苑生の竹、園の竹昔支那で梁の孝王が竹がすきで園内に竹を澤山植ゑたので竹園と言つた故事から日本でも皇族方のことを竹の園といふので有る○千尋のかげ、竹が高く繁る○五百重さす、いよ〳〵繁昌の心○姫小松さへ立ち添ひて、皇太子妃殿下の册立○星の林の若ざくら、皇太子殿下のことを申し上げたもの○春のみやま、春の山に春の宮を懸けてある春の宮は皇太子殿下のこと○みこどり、皇子様をかけた

【通釋】　皇室御繁昌の基が固くなつた竹に松が添つた様に、皇太子妃殿下が御册立になつて、天皇陛下を御助け申し上げることゝなつて丁度若櫻が咲き初めた様で御めでたいことで有る、皇子様が早く御降誕の時を吾々は樂しみにして居る是は明治三十三年の御慶事の時に出來た歌。

あやめ草　　千代田檢校作曲

玉くしげ、道の榮にかけまくも、かしこき御代にすむ水の、惠に茂る菖蒲草、いつの五月にひき初めて、賤が袖さへ匂ふなる、露の朝日のかげ清み、さながらかざしの玉なれや、綠の末葉うちなびき、そよと薫もなつか

しながら、數ならぬ身のやるせなや、めならふ人のあまたとは、夫も雫のたねかいな、敷妙の枕に通ふ月かげに、同じにほひの小夜風も、何かあやめの長きねは、幾千代かけて軒にふくらん

【句義】玉くしげ、枕詞こゝではかけまくへ懸けたので有らう玉鉾のといふと穩かで有るとは思ふが○かけまくもかしこき御代、言葉に懸けるも恐れ多いが大御代にといふ心○いつの五月にひき初めて、何時から五月は菖蒲を取つて軒にふき初めたか○賤が袖さへ匂ふなる、賤は百姓のことこゝでは賤しい自分たちの袖にまで菖蒲のにほひがするといふ心○露の朝日のかげ淸み、朝日に菖蒲の露が美しいこと○かざしの玉、髪飾の玉○めならふ人、目にうつる美しい人が澤山あること○雫のたね、淚のたね○敷妙、枕の枕詞○同じ匂、菖蒲のにほひと尋ねて來る人の着物にたきしめた匂と同じ樣に善いにほひであるといふこと○何かあやめ、どちらがどうかわからないといふのを菖蒲に懸けた。

【通釋】道の榮える有りがたい御代には水も澄み渡る其惠にしげる菖蒲を五月に引いて軒に葺くことは何時から始まつたことかマア菖蒲を軒にふくと袖まで善い匂がして朝日がさすとならんだ綠の露が綺麗で丁度髪飾の玉の樣に見える又よい匂がそよ〳〵と通つて來ると丁度來る人の着物に焚きしめた香の樣に思はれてなつかしくも有るがこちらが物の數にもならぬ身であると思ふとかなしくなるこちらより外に立派な人が澤山有ると思ふと夫も淚の種である寢て居ると月はさす夜風によいにほひがすると夫は人の着物の匂か菖蒲の匂かわからないが菖蒲の長い根を軒にふくのは幾千代かけてゞ有らうか。

海邊初春

佐藤左久作曲

雪の富士の根、三保の松、綠の上の白玉を、みがき出でたる朝ぼらけ、ありたつ田子の浦風に、また肌寒きむつみ月、漁村の柳眉もまだ、けぶらぬ岸に磯菜つむ、袖に三つ四つ六つの花

【句義】富士の根、根は嶺に同じ○三保の松、三保の松原で駿河國にある○田子の浦、駿河國にある富士山を見るに景色よいところ○むつみ月、正月○眉もまだけぶらぬ、柳の芽がまだ出ないこと眉は繭で柳の枝を糸として芽が出ない内を繭にこもるといふ○磯菜、海岸の草○六の花、雪の異名。

【通釋】富士の山が白玉の樣に三保の松原の綠の上に見えて景色のよいことよ朝早

く田子の浦へ降り立つて見ると正月であるから風がまだ寒い漁師村の柳もまだ芽が出ない磯で磯草をつんで居ると袖には雪がチラホラ降りかゝる。

關の清水

別れては、行くも歸るも逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱の、はるけき沖はさゝ波や、滋賀の唐崎からき世渡るあまがへ、乾く間も絶えて荒波ぬれぎぬは、昔都の花の頃、みとも仕へて大井川、其御恵は身にあまり、遊びし事もみな夢なれや、思ひつゞけて夕暮方に、宇津の山べをうつらうつら、越え行く都に歸る夢をさへ、蔦の細道とぢはてぬ、三保の松原清見潟すぎて、富士の高根を打見上ぐれば、煙立つ、我身にたぐへ見る時は、富士も筑波もげによそならず、浪にうき島なれもうき、廻り／＼て小車の、車返は人だのめなれや、行きつかへりつ足柄山をたどるなり、小磯大磯打寄する、袖にも波はこゆるぎのいそ、急ぐ旅には有らねども、歎きこるとて鎌倉に、日數つもりて着きにけり。かゝる昔も有りにしを、今は輝く天地の、くまなき千代を千萬歳、動かぬ君が代千代八千代、常盤堅磐と祝ふかな

【句義】關の清水、近江國と山城國との境の逢坂山に關があつたそこに關の清水といふところがある拾遺集に「逢坂の關の清水に袖ぬれて今や引くらん望月の駒」といふ歌があるこの歌は俊基朝臣の東下をもとゝして作られてある○わかれては、俊基朝臣が今都を別れて出で立つ心○ゆくもかへるも、後選集の「これやこの行くもかへるも別れては知るも知らぬも逢坂の關」といふ歌から出た言葉逢坂に逢ふが懸けてある○うち出の濱、近江國琵琶湖の西岸○さゝ波や、滋賀の枕詞○から崎からき世、からを重ねた修飾語○あま、漁師○あら波、有らずを懸けた○ぬれぎぬ、無實の災難ぬれは波の縁語○昔都の花の頃、俊基朝臣の昔を思ひ出した心○みとも仕へて大井川、大井川は山城國にある行幸の御供で大井川に行つたこと夫をまた駿河國の大井川にとりなして駿河國の宇津の山へつゞけた○うつらうつら、ウト／＼として○蔦の細道、駿河國にある紅葉の名所○どぢはてぬ、夢をさへ蔦がとぢて通してくれぬ○三保の松原清見潟、共に駿河國にある○わが身にたぐへ、自分と同じ様で有ると思つて見ること○筑波、常陸國の筑波山○げによそならず、煙が立つのは山であると餘所々々しくしては居られない自身も思が燃えて煙が立ちさうだといふこと○波にうき島、浪に浮きと懸けてある駿河國浮島沼のこと○なれもうき、浮きを憂きに懸けたなれは汝○車返、駿河國沼津にある地名夫を車を返して京に行きたい心に通は

せた○人だのめ、人だのませで一向あてにならないこと○足柄山、箱根山のこと○小磯大磯、相模國の地名小磯は大磯に對して言つたのである○こゆるぎの磯、是も相模國の海岸の地名越ゆを懸けてある○磯からいそぐに音を重ねたところは語の修飾○なげきこるとて鎌倉に、歎きを木に取りなして懲るを木を樵るに通はせ草木を苅る鎌に懸けた。

【通釋】　都を別れて蟬丸が歌によんだ逢坂の關を涙にぬれながら行く末は死出の山路で有らうか逢坂山を越えると打出の濱に出る夫から唐崎で自身は鹽からい水の上を渡る漁師で有らうかからい目を見ることだ自分の袖も漁師の樣に波に濡れ通すが實は無實の災難である昔は花の春都で大井川の行幸にも御供申し上げて身に餘る程の皇恩をうけて遊んだことも今はみんな夢となつてしまつた夫是思ひつゞけて夕方宇津の山をウト〳〵と越えて行く夢にさへも都に返りたいと思ふが蔦の細道の蔦が閉ぢて通して吳れぬ三保の松原淸見潟を通りながら富士の山を見ると煙が立つて居るが自分の身に引きくらべて見ると富士や筑波といつて餘所ごとにしては居られない浮島沼へ來た沼よお前もうき世と思ふか廻り廻つて又よい事も來て車を都に返すといふ言葉に同じ地名では有るが一向當にはならないさうかうしながら箱根山にとさしかゝつて行く大磯やこゆるぎの磯も通つて急ぐ旅では無いがいよ〳〵鎌倉へ着いた昔はこんな事も有つたが今は天地にもれる隅もなく君の御稜威が輝いて千代八千代萬代かけて常磐堅磐に動くことの無い御代である。

稀の壽

四世　山木千賀作曲

菅の根の、長き思も今日こそは、松が枝ありて隔なき、惠にしげる竹垣の、綠木高く年經りし、梅もも〻枝や若枝さし、汀の池にすむ龜の、よはひも久しき萬代々、古來稀なる壽を、濱の眞砂の數々に、くらべて君を眞鶴の、綾羽重ねて紅の、頂深き御園生は、蓬が島も及びなき、かげ相生にそなれつ〻、榮え榮ゆるためしかや

【句義】　菅の根、長の枕詞○長き思ひ、長く思つて居たこと○松が枝、待つ甲斐に懸けた○梅も百枝や若枝さし、澤山に枝が出て繁ること初からこの句までに松竹梅が祝ひこめてある○古來稀なる壽、七十歲のこと「人生七十古來稀」といふ句から出た○まな鶴、たゞ鶴と見てよい君を眞似ぶ心を懸けた。○綾羽重ね

て、美しい羽を重ねて○紅の頂深み、頂が眞紅な鶴のこと○蓬が島、蓬萊山仙人の國○磯馴れつゝ、磯に馴れて久しく榮えること。

【通釋】　長く思ひまうけて居たことも今日は待つ甲斐があつて隔ない惠に竹垣は茂る梅の老木もいよ〳〵榮え池の龜も壽命が長く年の數を濱の砂子の數にくらべるまでに其樣にめでたい君を眞似た鶴も見えてこゝの御園は蓬萊山以上のめでたい場所で有る磯馴の相生松の樣に此御家も彌御繁昌なさるで有らう。

紅葉の賀

神無月、時雨の頃の御幸ぞと、心ゝとなき大内山も、御前の樂の試は言はん方なき景色かな、玉の御階さへ、光る源氏の光かも、かへすたもとの綾錦、あやしむまでに舞ひたまふ、君にも御心そゞろになりて、かくもめでたき有狀を、見るも夢かとのたまへば、老も若きもへだてなく、たかきいやしき樣々なれど、あはれ〳〵と淚の玉を、袖につゝまぬものもなし、君もその日はいそがせたまひ、雲井の庭をふみならし、威儀よそほひて御幸なる紅葉も今日ぞ色はえて、木々の木の葉は散りかひ亂れ、人のおもても照りまさりつゝ、幕の內より舞ひ出づる、袖は青海色さま〴〵に、青海波とて名も高し、はては菊さへかざし草、かをりゆかしきたゞずまひ、やがてまかでになりぬれば、音を添へて糸竹の、えならぬ手をも筑紫箏、ことにその夜は御位の、しなをも進めあで人の、光は末の世々までも、詞の花にぞ殘るなる

【句義】　紅葉賀、源氏物語の卷の名で桐壺の帝が朱雀院五十の御賀の爲に行幸あらせられて其日源氏が青海波を舞はれた時の盛觀をうつしたものでこの歌の前半分は前日の試樂のこと後半分が當日の樣子である○神無月、十月の異名○心いとなき、忙しいこと○御前の樂の試、前以て一度試にすべて一通りを演じて見ること○玉の御階、禁裏の御殿の階段○光る源氏、源氏の容姿のあまりに美しいので世の人が光る源氏といつたと源氏物語にある○かへす袂の綾錦、綾錦の衣裳で舞ふこと○君にも御心そゞろになりて、桐壺の帝もそゞろに昔桐壺の更衣（源氏の母）の世にあつた時を思ひ出されて○あはれあはれと淚の玉を、感淚をこぼすこと○君もその日は、朱雀院へ行幸の當日は○袖は青海色さまざま、衣裳の模樣は青海色其外色々のを御重ねで○青海波、舞樂の名○名も高し、大評判のこと○はては菊さへかざし草、初源氏は紅葉を冠にさして舞はれたが中頃で菊とさしかへた○たゞずまひ、樣子と見てよい○まかで、終りて退出のこと○筑紫箏、筑紫の人命婦石川色子が始めて學んだといふので箏のこと

を筑紫箏といふ樣になつた手を盡しを懸けて有る〇詞の花、言ひ傳となつて殘
ること。
【通釋】　間もなく十月時雨の頃の行幸といふので內裏では大層忙しい御前で試樂が
有つたが言ひ樣も無く立派で玉の御階さへ一段と光る源氏の爲に光を添へた樣
である其舞がまた立派で御上手で夫を見ると帝はそゞろに昔のことも思はれて
夢の樣で有るとの御言葉に老若貴賤共に感涙を催さないものは無かつた愈當日
は帝も御氣色麗しく禁庭を踏み馴らし行列の威儀もおごそかに行幸遊ばされた
紅葉も今日は一段と色が增さつて見え又散りくる紅葉がうつつて人の顏も一き
は美しく見える其內に幕の內より舞ひ出られた源氏の舞衣は青海色外種々重ね
られ舞は青海波といふので大評判で有る後には菊をかざしにかへて差し上げた
が香が添つていよ〳〵御樣子が立派になつたやがて退出の時となると一段と色
音をそへて箏や笛で言ひつくせない手をつくして筑紫箏も彈かれわけて其夜は
源氏を始め一同の位を御進めになり其貴い方々の立派な樣子は末の世まで言ひ
傳へて言葉の上に花となつて殘る。

子の日の遊

初春の、初子の野べに皆人の、いざとしいへば諸共に、われも雪間の小松原、二葉に千代を引きそへて、まと
ゐしつゝもさかづきに、汲むや霞のそなたなる、岡邊の梅もあたらしき、年の榮を見せ顔に、花のひもとき遠
方の、一むら竹に鶯の、もゝよろこびは今日よりと、聲たてそめつのどかなる、御代の春とて老いぬるも、
若きも共にかくしつゝ、心ゆく野をとふが嬉しさ

【句義】　子日の遊、正月初子の日に野へ出て小松を引て祝つたものである〇いざ
や、サア行かう〇雪間の小松原、初春の松原のこと雪に行きを懸けた〇二葉に
千代を引き添へて、二葉の小松に是からの千年の榮を添へて持つて來る〇まと
ゐ、圓く居ること〇くむや霞の、酒を汲むことを霞を汲むともいふ〇あたらし
き年の榮、新年のめでたさ〇をち方、むかふの方の〇もゝよろこび、鶯の春を
喜んで鳴く聲〇かくしつゝ、斯樣にして〇心ゆく野、氣も晴れ〴〵とする野〇
とふ、野へ來ること。
【通釋】　新年の初子の野に松を引きに行かうといふと我も〳〵と集つて來てまだ雪

の有る野の小松を引いて圓く居並んで酒を飲みながら向を見ると岡の梅も年の初といふ樣な顏をして咲きはじめ竹やぶに鶯も鳴きはじめる老若うちつれ斯うして春の野に來るのは嬉しいことである。

大和心

鍋島直大作歌
今井慶松作曲

世界の内に國といふ、國は有れども日の本は、遠き神代の昔より、御いづかしこきすめらぎの、惠の露にうるほひて、立ちかへりけり草も木も、遠つ御祖のみことのり、かしこみまつり大君の、御楯とならん民草の、生ひ始めけん高千穗の、高き敎はとつ國の、人々までも仰ぐなり、五千餘萬のはらからよ、三千年來傳へこし、大和魂ふりおこし、君には忠なる臣となり、親には孝なる子となりて、御國の名譽輝かせ、君のみいづを輝かせ

【句義】 立ちかへりけり、明治の御代から王政に立ちかへつたこと○草も木も、人民のこと○御楯、皇室の守護○高千穗の高き敎、天孫降臨の時からの日本の國體高千穗は日向國にある山天孫降臨の地。

【通釋】 世界の内に國は多いがわが國は天孫降臨の時から格別の國柄で君は民を御いつくしみ下されわけて明治維新からは王政に立ちかへり外國人も尊ぶ國で有るから五千餘萬の臣民は其つもりて三千年持ち傳へた大和魂をふりおこして君には忠親には孝の道をつとめ國の名譽と威光とを充分に輝かせよ。

佐保姫

半井桃水作歌
佐藤佐久作曲

佐保姫の春の粧ながむれば、遠山眉の緑濃く、殘んの雪の薄化粧、のどけき風に青柳の、寢亂髮を梳り、匂油の梅が香に、とり上げて結ふ髻の、かざしは野邊の早蕨や、露ぬきとめし玉かづら、賤機山に織りかけし、かすみの衣の色々は、山吹衣梅重ね、わきて亂るゝ糸遊の、うすもの綾にさきまじる、花の錦のぬひもよく、色香妙なる俤は、天津乙女も數ならず、雲の通路吹きとぢて、空行きまどふかりがねの、落つる箏柱に濱松の調の音さへすみ渡り、春鶯囀を奏すれば、鳥歌ひ蝶舞うて、春の幸をぞ祝しける、實に色かへぬ常磐木に、幾春かけて咲く藤の、その花房の末長く、榮え行くこそ樂しけれ、榮え行くこそ樂しけれ

【句義】 佐保姫、春の山の神佐保姫の春の粧で春の山の景色といふ心○遠山眉、遠山を眉に見立てた言葉○殘んの雪の薄化粧、殘雪を女の顏の薄化粧に見立てた○寢亂髮、朝の柳の枝を見立てた形○匂油の梅が香、匂入の油の梅が香梅が香は油の名○かざし、今のかんざし○玉かづら、女の髮飾○賤機山、駿河國にあ

る言葉の縁から織りかけしと續けた○かすみの衣、霞を佐保姫の衣と見立てた○山吹衣梅重、花の名を上の句の衣の縁で衣重とつけたまでのこと○糸遊のうすもの、春の野に立つものかげろふと同じ夫を薄絹に見立てた○ぬひもよく、花が美しく刺繡となつたといふこと○色香妙なるおもかげ、春の景色を女の姿にしていつた言葉妙は美妙の心○雲の通路吹きとぢて、古今集の「天津風雲の通路吹きとぢよ少女の姿しばしとゞめん」といふ歌から出た言葉で風が吹き閉ぢて雲が天の路へ一パイに塞がつたこと○落つる箏柱、雁の並んで飛ぶ形が箏柱に似て居る處から其聲が天から落ちて來て箏の調に通ふのを言つた○春鶯囀、樂の名○常磐木、四季共に綠の木。

【通釋】　春の山を見ると綠になつて來て雪が殘つて居て佐保姫の美しい眉に薄化粧といふ樣で柳に風が吹くと寢亂髮を梳る有狀梅の匂は油の梅が香で髮を結ひ上げたのに似て居て野の蕨はかんざしで有らう夫に露がチラ〳〵するところは玉かづらの樣だ賤機山にかゝる霞も山吹も梅も衣裳で野の糸遊は衣裳の綾野の色々の花は衣裳の縫ひとりで其美妙な春の姫神は僧正遍照が歌によんだ天津少女などとても及ぶものでは無い夫故風が雲の通路を塞いで姫を歸さない樣にしたので雁も空の路をまごついて啼く聲は箏に通つて其箏の音は濱の松風の調に通つて冴え〳〵とした音で春鶯囀の曲を彈くと夫につれて鳥も歌ひ蝶も舞つて春は榮えて嬉しい時よと祝ふ常磐木の綠かはらない樣に何時までも藤の花房の樣に末長く榮えて行くのが如何にも樂しい。

ほとゝぎす

夏の夜の、明くる間早み假初に、見る程も無き月影を、惜しむとすれどいねがての、枕にかこつ程をさへ、たえて忍べと音づれぬ、うしやつらさの人ならば、うらみも果てんかにかくに、雲井に遠き待乳山、心せきやのさとふく風に、雨もつ空のさ月やみ、やみは綾瀨の川船に、うきねしつゝもきかまほし、かくばかり、待つとはなれも白髯の、森の下露くさ〳〵に、よのみやび男のあこがれて、君まつ夜半にかはらぬは、たゞ一聲のほとゝぎす

【句義】　早み、早さに○いねがて、寢ね難き心○かこつ、愚痴をいふこと○たえて、其愚痴も絕えて言はないで○しのべ、戀しがつて待つ心○雲井に遠き待乳山、

空高く遠くなく音を待つを地名に懸けた待乳山は武藏國隅田川の西岸にある山○心せきやの里吹く風、心が急くのを關屋に懸け風がサツト吹くのを里に懸けてある關屋も隅田川の東岸で昔太田道灌が園を開いたところ○さつきやみ、夏の初の暗夜○やみは綾瀨の川船、暗の夜は物のあやめも分からぬことを綾瀨川に懸け綾瀨川は隅田川の上流であるが今は小さい溝となつて居る○きかまほし、聞きたい○なれも白髯、汝も知らぬを白髯に懸けた白髯の森は向島にあつて猿田彦神を祀つた祉が有る○くさ〳〵、草を種々にといふのに懸けた○よのみやび男、世の風流人○あこがれて、心も身にそはず時鳥を待つこと○君まつ夜半、人を待つ夜半。

【通釋】夏の夜は短いもので西に傾く月を惜しまうとするが其間も無く明けてしまふまで毎夜寢ることも出來ないで枕に愚痴をいふ程をさへも絶えて愚痴もいはずに戀しく思つて待つて居るが一向に來て鳴かないもし是が憂いつらい人ならば終には恨むで有らうが兎も角もせめて遠い雲井の音でも聞きたいと思ふ早く聞きたいと心もせき立つ風も吹く雨も降りさうな暗の夜待乳山か關屋の里か夫とも綾瀨川の船に一夜を明しても聞きたいものよ是程までに待つとは時鳥も知るまいが白髯の森には鳴くで有らうか風流人はみんな待ちこがれて丁度來る人を待つ夜半の樣に時鳥の一聲を戀しがつて居る。

萬歲

中能島松聲作曲

昔より、流つきせぬ三河水、濁らぬ御代は新玉の、春を待ちえて朝づく日、烏帽子素袍のはれ姿、うつや鼓の音高く、萬々歲や數々の、國の柱の神たちの御名を數へて舞ひうたふ、三六十年辰のとし、諸人の立てたる御館にて、誠にめでたうさぶらひける、雨がふれども雨もりせず、風がふけども寶風、御園の松の影高く、巣をくふ鶴や龜の尾の、長きよはひを君々に、捧げまつりて豐かなる、げに此殿の繁榮を、八百萬代の末かけて、つきせぬ御代とぞ祝しける、つきせぬ御代とぞ祝しける

【句義】萬歲、是は三河萬歲謠から出たのである○三河水、男川豐川矢作川の三つの川が有るから三河國といふ其三河の水○新玉の春、新年○朝づく日、元日の日の出○烏帽子素袍の晴姿、万歲樂の姿○國の柱の神達、國々を御守護の神國々にある一の宮のこと○三六十年辰の年、未祿住年で庚辰年庚辰月庚辰日辰時

のこと福德圓滿の時刻〇寶風、寶を吹き寄せる風。

【通釋】昔から流れもつきず三河の水が濁らないでめでたい泰平の年の正月元朝から烏帽子素袍姿で皷をうつて万歲樂が國々の神樣の御名を數へながら舞ひ謠ふ三六十年辰の年に人々が立てたこの御屋形は誠に目出たい雨がふつても雨もりせず風が吹けば寶風で御庭の松は高くしげり鶴は巣をくひ龜ば遊ぶ其龜の尾の樣に長い豊かな壽命を鶴龜は君に差し上げて八百萬代の末までもつきぬこの御殿の御繁榮を御祝ひ申し上げる。

初烏

三代目　山登松齡作曲

新玉の年のをだまきくり返し、盡きせぬ君が大御代を、祝うて家毎門毎に、朝日の御旗たなびきて、朝日影そふのどけさは、初烏さへうちとけて、かほうかほうとなく聲に、今朝くる春を告げ渡るらん

【句義】新玉、年の枕詞〇年のをだまき繰り返し、をだまきは糸卷年が糸卷を繰る樣に長く盡きず廻つて來ること〇初烏さへ打解けて、新年を烏も喜んでのどかになくこと〇かほう、幸の心。

【通釋】年の盡きない樣に盡きず榮える御代を祝つて家々門々に立てた國旗がたなびいて夫に朝日が長閑にさし初烏までカホウ〳〵と鳴くのは喜んで新年を知らせるので有らう。

花暦

山田檢校作曲

ことぶきを、こゝにのぶるは年をへて、同じ櫻の花の色を、そめます物は心から、開く日數をいつむつと、指折り見れば七ところ、思ひ立つ雲も一重の上野より、ながめはじめて淺草や、かをりは深き奥山に、袖振り合うて色々の、姿は雪に隅田川、渡守に言問へば、げにも吾妻の都鳥、言葉のはしのあかなくに、昨日といひ、今日と日暮し、とこしなへに、こゝはかはらぬ飛鳥山、とりのかほよの一群を、ほゝうとほむる、鶯に、もとより歌のえにしあれば、人の心を和ぐる、春の一時小金井の、河の名さへも玉なれば、光のどけき空につる、みきはに龜の御殿山、仰げばなほも高きやの、惠もみつる賑の、民の數々千代かけて、よろづよしとの花暦、萬よしとの花暦

【句義】ことぶき、祝言〇花の色を染め增すものは心から、年を經るにつけて同じ樣で有るが段々色がよく見えるのは櫻を愛する自分の心からである〇いつむつ五日の五を何時に懸けて六日につゞけた〇七所、この歌の中に上野淺草隅田川

日暮里飛鳥山小金井御殿山の東京の花名所七つをあげて有る○思ひ立つ、立つを雲が立つのと思ひ立ち見に行くのとに懸けた○雲もひとへの上野、雲の上野と懸けて上野の花は一重がよいことを言つて居る○淺草やかをりは深き奥山、淺に對して深きと對照の語奥山は淺草の內の地名○袖ふり合うて、長い袖を振り合うて花見衣の樣子○雪に隅田川、白と黑の對照語で花見衣の立派なのと粗末なのとをいつたのである○渡守に言問へば、隅田川の渡守に尋ねたらばで伊勢物語に「名にしおはゞいざ言問はん都鳥わが思ふ人は有りや無しやと」とある歌から出た言葉○言葉のはしの飽かなくに、伊勢物語の歌が面白いのと其歌の言葉書に都鳥の形をのべた中に口ばし赤くとあるのにかけてある○きのふといひ今日と日暮し、毎日花見て日を暮すといひ地名の日暮里を懸けた○こゝはかはらぬ飛鳥山、古今集に「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬となる」といふ歌から出てこゝは飛鳥山で有るから何時もかはらないといつたのである○鳥のかほよの一群、かほよ鳥とは顏えどりのこと花見の假裝の群○ほゝうと讃むる鶯に、誰もホヽウかほよ鳥よ鶯よとほめるといふ心日暮里の邊鶯谷(地名)の縁語○もとより歌のえにしあれば、古今集の序に「花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば生きとし生けるもの何れか歌をよまざりける」と有るので鶯は歌には縁が有るといつたのである○春のひと時小金井、春宵一刻價千金といふ句から出た○河の名さへも玉なれば、小金井の側の玉川のこと○空に鶴みぎはに龜の御殿山、鶴龜も居るめでたい御殿といつて御殿山につゞけた○仰げば猶も高き屋の、御殿とあるから仁德天皇の「高き屋にのぼりて見ればけぶりたつ民の竈は賑ひにけり」といふ御製の心につゞけたので有る○千代かけて萬よし、末久しく萬事吉である。

【通釋】　めでたいと思ふのは年々櫻の色がよくなることで有る今五六日で咲くかと待たれて先づ花名所を數へて見ると七ヶ所もある是から見に行かうと上野から淺草へ行くと奥山では花見の人が色々の姿をして來て居る隅田川へ來て渡守に聞くと吾妻の都鳥と昔業平に答へたといふが面白いことだと思ふ昨日も花見今日は日暮里へこゝは又飛鳥山こゝは假裝の群なども見えて面白いこの近い處の鶯谷といふので思ひ出した鶯はもと〳〵歌仲間で人の心を和げるものその人の

心を和げる春は昔の人も春宵一刻價千金といつた小金井は側の川も玉川といつて光ものどかで空には鶴池には龜が居る御殿を名にした御殿山高い御殿を仰ぎ見ると昔の有り難い御代の御惠も思はれてその御惠で民は榮え永い代かけて萬事吉と花暦にある如何にもめでたい事よ。

花の鏡　　山田檢校作曲

うつればぞ、花の鏡にわが姿、うつる心は誠のかげよ、朧月夜の渡殿に、人まつかげは誰やらん、うはの空よく花の香は、こちへとゞかぬかいま見の、人目關路のへだてはいやよ、せめてたのものかりのふみ、送る其日のひつじうら〳〵に、人〳〵の初手もうれし、向ふ鏡のかほよどり、かはらぬ契かたからめ、君が代の惠も深き池水に、すめる蛙も祝ひ歌、うたに和ぐ人心、賤もたときもおしなべて、花の鏡のくもりなき、春や久しき春や久しき

【句義】　花の鏡、古今集伊勢大輔の歌の「年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらん」から出た言葉で花のうつる水のこと○渡殿、彼方此方の御殿の間の渡○うはの空ふく、高いところを行く花の香○かい間見の人目關路、垣根越に見る様に人の見る目を遠慮せねばならぬ間柄○たのも、田の面に頼むを懸けた○雁の文、雁に付けて昔手紙を届けた故事から出て今はたゞ手紙のこと○ひつじうら〳〵、辻占昔は辻へ出て人の話を立ち聞きして自身のことを判斷したもの○人〳〵、人か來ること○初手、辻占が初手から出た○顔よどり、顔をえどりて化粧すること○蛙も祝ひ歌、古今集の序から出て蛙のなく聲も君が代を祝ふ歌であるといふこと○うたに和ぐ人心、是も古今集の序に歌は男女の中をも和らげとあるのから出た○たとき、貴き。

【通釋】　花の鏡にわが姿もうつる心もうつる夫が眞のわが形であるオヤ朧月にすかして見ると渡殿に人が見える誰を待つて居るので有らう花もかをるが上の空を行くので此方へは届いて來ない垣根越に見る様な人目を憚る様な間柄はせんないことせめて頼みになる様に手紙でも送らうかさて其返事はと思つて辻占をきくと初手から人來〳〵と出るのが嬉しい夫ならばと御化粧はするものゝ永くかはらない様にしたいものそのかはらない契の深い池にすむ蛙の歌は君が代を祝ふ歌で歌では男女の中をも和らげるものかうして貴賤共に花の鏡の曇りなく榮

えの久しい春はいかにもめでたい。

蓬萊（新）

この殿はうべも富みけりさきくさの、三つ葉四つ葉の、いつまでも、かはらぬ春のひな鶴を、宿す園生の松のかげ、ひたすや池の水鏡、こゝにうつして其面影を、ほのみづの江の浦島が、昔がたりのいと長々と、とくや小船のもやひ綱、雲井にまがふ沖の方、あら面白の青海波濤、龜の背にある身はやがて、うつゝとも無く夢ともなく、至るところは蓬萊宮、黄金をのべ玉をしく、ことなる龍の宮のうち、春は波間にさき散るさくら、秋は千しほに染めつくす、珊瑚の枝の初紅葉、月の夕にはた雪の日に、物のあはれは空蟬の、世にはたぐひも白波の、かへさ忘れて花園に、のどけく結ぶ夢の間に、いつかこゝらの月日も過ぎぬ、思へば不思議のえにしぞと、名殘はつきぬ月日貝、かひある今日の玉手箱、携へ出づれば悠然と、波の皷ぞきこゆなる、枝はふりても色かへぬ、松風は千秋の聲、年もやう〳〵呉竹の、幾よかふべき長生殿、老いせぬ門に立ちかへる、春をかぞふるさゞれ石の、いはほとなりて苔のむすまで

【句義】　蓬萊、仙人の捿む島この歌は主として浦島のことを言つて有る○この殿はうべもとみはり云々、この御殿はたいした御繁昌である御殿の軒が三つ端四つ端に重なつて居る立派な御普請よといふことで古今集に「この殿はうべもとみけりさきくさの三つば四つばに殿作りせり」とある歌の言葉○いつまでも、何時に五つを懸けた○ほのみづの江、ほのかに見るを水の江に懸けた○水の江の浦島、浦島は丹後國與謝郡水の江の人○長々と、長い話と綱の長いのとに懸けた○もやひ綱、舟をつなぎとめる綱○青海波濤、海の波の景色○黄金をのべ玉を敷く、蓬萊宮の立派な有狀○春は波間に咲き散る櫻、波の白く散るのを櫻と見立てたところ○秋は千入に染めつくす珊瑚の枝の初紅葉、珊瑚を紅葉と見たところ千入は數多度染めた赤で眞紅のこと○ものゝあはれ、總べての物の面白さ○うつせみ、世の枕詞○白波、知らぬを懸けた○かへさ忘れて、波が立ちかへる緣から浦島が國へ歸ることを忘れたのに懸けてある○こゝら、許多○月日貝、蛤の一種貝殼の內面の片方は赤く片方は白し○かひある、上の月日貝から重ね言葉で受けて蓬萊に來たかひが有るといふ心○悠然と、海上遙々と波の響く形容○くれ竹、年の暮と次の幾代の序詞とになつて居る年は暮れても幾世も限りなく榮えるといふ心につゞく○長生殿、唐の宮殿の名○老せぬ門、唐の宮門不老門のこと○さゞれ石、小石○苔のむす、苔がはえること古今集の「わが

君は千代にましませさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで」といふ歌から出た。

【通釋】　こゝの御殿は立派なことよ御庭の松には鶴が居る夫が池にうつつてほのかに見える水の江の浦島の長物語はといふとある日小舟の綱を解いて沖遙々と出ると波路の面白いこと其内に龜の背にのせられて行くといつか蓬萊宮へ來た立派な御殿の中で春は波の花秋は珊瑚の紅葉月にも雪にも面白いことはこの世にくらべるもの無く歸るのも忘れて長閑に遊び暮して夢の間に大層の長い年月を過ごした思へば不思議な緣も有るものと名殘は盡きないが一度歸らうと思つて玉手箱を貰つて波路へ出ると波はつゞみと聞え枝は古くなつて綠をかへない濱の松風はめでたい聲で合せて居る年限りなく榮える長生殿其御殿の前には不老門暮れてもまた立ちかへる春を數へると小石の様に數限りなく夫が集つて巖となつて苔がはえるまでの繁昌めでたいめでたい。

あづまの花

山田檢校作曲

よしのよく見し人はいさ、花はあづまの隅田川、世に似ぬ春の光ぞや、都鳥に言問ひし、昔には似ず渡守、春はいとなく水馴棹、さして堤を行きかよふ、人のたもとの淺緑、柳の糸に引かれ來て、ながき日ぐらし花の香を、袖にしめてはくみかはし、遊びたはれつたをやめの、うたふ一ふし夢ならば、殘らじ袖のうつり香を、如何に定めて咲き匂ふ、花の手枕夢ならで、かはすもあだの花のかげ、さすが嬉しきゆかりにも、紫生ふる武藏野の、廣き惠や仰ぐらん、なほ行末も千代八千代、長き堤の花ざくら、榮え榮えむ御代の春

【句義】　あづまの花、東國の花で隅田川の花のこと○よしのよく見し人はいさ、いさ濁つてよむべからず吉野の花を見た人は何といふか知らないがといふ心いさは不知の心是は万葉集天武天皇の御製「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」とある歌の言葉○春の光、春の景色○都鳥に言問ひし昔、業平が來た昔のこと○いとまなく、忙しいこと○人のたもとの淺綠、晴々とした色の春着の心○花の香を袖にしめては酌みかはし、花の香が袖に染みるまで一日花の下で酒を飲み遊ぶこと○殘らじ、のこるまい○如何に定めて、夢か夢で無いか迷ふ在様○ゆかり、由緣紫をゆかりの色ともいふ○紫生ふる武藏野、紫は草の名染料にしたもの古今集の歌に「紫の一本故に武さし野

の草をみながらあはれとぞ見る」とあつて武藏野は紫の名所となつて居る○廣き惠、上の武藏野から受けてこの野の廣い處から廣きへつゞけた○長き堤、隅田川の堤。

【通釋】　吉野を見た人のことは知らないが櫻は東國の隅田川が一番よい其景色は世に似るものも無く昔業平の來た頃は淋しい處で有つたが今は花見の人で渡守が忙しくみんな晴着姿で花見に引きよせられて春の長い日を一日花の下で酒を酌み合つて美しい女の歌をきいて居る春の面白い一刻は夢かとも思ふ位であるが夢ならば花の移香は袖にはのこらない筈夢でも無く花の下で枕をかはすのもあだめいて居るがさすがに嬉しいゆかりとも思ふそのゆかりの色の紫が生えたといふ武藏野の樣に廣い御代の御惠でかうして長閑に遊べるわけで君が代は長い堤の櫻の榮える樣に行末長い春かけて御榮えなさりませ。

千歳の春

新玉の、年の初子や鶯の、聲とし聞けば咲き初むる、梅のにほひの吹く風に、たぐへてぞやる朝夕の心づくしやわがせこが、衣春雨ふるごとに、野べの若草色はえて、妻こもりと鳴くきゞす、空も長閑にかり金の、霞の内に薄墨の、文字かとばかりかけるなる、四方の景色のゆかしさに、家路忘るゝこのもとや、幾代子の日の姫小松、ひかるゝ袖の初若菜、すゞなすゞしろ見そめてそめて、芹にせかるゝわが心、妻となづなのよし定まるならば、玉のはこべら二人が中は、ごぎやうのきしつ神かけて、かはりはせずと諸共に、誓を立てし佛の座、草の數々摘み遊ぶ、春の綠のうら〳〵に、ゆかり匂へるすみれ草、千草の色と今ぞ知らるゝ

【句義】　千歳の春、千代の春といふのと同じことで春の七草を結びこめて春の心をうたつたのである○新玉、年の枕詞○初子、正月初子の日○聲とし、しの文字は强辭○たぐへて、添はせて○心づくし、心配○わがせこが衣春雨、わが夫の衣を張るといふのから春雨へつゞけたもの古今集の「わがせこが衣春雨ふるごとに野べの綠ぞ色まさりける」といふ歌から出た○色はえて、色がよくなること○妻こもり、若草の芽をつまといふのから若草のめもこもつて居るわが妻もこもつて居るといふこと古今集の歌に「春日野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」とある○文字かとばかりかけるなる、雁の空を飛ぶ形が字を書いた樣に見える○このもと、木の下○子の日の姫小松、正月初子

の日に松を引いて祝ふ○すゞなすゞしろ、二つ共に七草の內○見そめてそめて、見初めて心に思ひそめて○芹にせかる丶、芹七草の內せきにせかる丶の心芹を急きに通はせてある○妻となづな、なづな七草の內妻と名が付くならばなづなに名付くを懸けた○玉のはこべら、はこべら七草の內玉の様な子供の心○ごぎやうの氣質、ごぎやう七草の內五行の合性よいこと○佛の座、七草の內未來は一つの蓮臺に乘らうといふ約束○うら／＼、のどかなこと○ゆかり匂へるすみれ草、菫の花は紫で有るからゆかりといつた○千草の色と今ぞ知らる丶、是が秋の千草の花の色となる草の初と春の若草を見て思ふ。

【通釋】年の始初子の日に野へ出て見ると鶯も鳴く梅も誘はれて咲き初めてよい匂を風につけて朝夕そこ此處に送ると其匂にわが夫戀しく思ひ出されるよ一雨毎に若草は色がます其野で雉子は鳴く長閑な空の霞の中を渡る雁は丁度薄墨で書いた文字の様で景色よさに家に歸るのも忘れて木の下で小松を引いたり若菜を摘んでやさしいすゞなやすゞしろの様な人を見初めて思ひ染めて早く／＼と急きに急いで妻と名が付くことに定まるならば玉の様な子供をでもほしいもの二人の中は合性よいので神様へ誓をかけて末長くかはるまい未來は一つ蓮の臺にまでと嬉しく七草を摘んで綠の野にのどかに遊ぶマア是も菫の花の色の何かのゆかりで有らう聽ては秋の千草のもと丶思はれる。

朧月

花鳥の、春や昔の春ならぬ、霞のひまに今もなほ、同じ光を仰ぎつ丶、とはゞや問はん夜半の月、こたへぬかげを朧氣に、袖にうつし丶花の露、ぬれて嬉しきこのもとに、飽かぬすさびのたはれ歌、あだなりと名にこそ立てれ櫻花、かをりを誘ふ春風に、心浮れて見渡せば、夫があらぬか白雲の、上野の岡の朝櫻、花には誰もこがれよる、岸邊の船の浮瀬をも、忘る丶すだの夕ざくら、そゞろあるきに日暮の、昨日今日と飛鳥山、あすは雪とぞふりなまし、面白や松風通ふ玉箏の、調も文も開け行く、春の山田のしめなはの、末長き代にひきや傳へん

【句義】花鳥の春や昔の春ならぬ、花も鳥も昔の春のもので無く若やかに面白い伊勢物語の歌に「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」とあるのから出た○同じ光、昔とかはらない若い春の景色○とはゞやとはん、

月を見に行かうか知らん行かうと自問自答の語○袖にうつしゝ花の露、花の露に月のうつること○ぬれて嬉しき、花の露に袖がぬれて嬉しい○あかぬすさびのたはれ歌、花に飽かないまゝに戯歌などをよんで見るすさびは慰みながらの所作○あだなりと名にこそ立てれ櫻花、櫻の花は淺はかなものと評判されて居るといふこと古今集の「あだなりと名にこそ立てれさくら花年に稀なる人を待ちけり」といふ歌の言葉○白雲の上野、知らぬを白雲に懸け雲の上の上野とつゞけたのであるこの雲は櫻を見立てた言葉○こがれよる、慕つてより來る○浮瀬、船の浮く川瀬浮きに憂きを懸けて世の中の憂き折に通はせてある○日暮、日を暮す心を地名の日暮里に懸けた○昨日今日と飛鳥山、昨日今日は毎日花に遊ぶ心では有るが一面には飛鳥を明日かに取なしての修飾語○あすは雪とぞふりなまし、明日は散つて雪の樣に降つてしまふで有らう古今集の「櫻花あすは雪とぞふりなまし消えずは有りとも花と見ましや」といふ歌から出た言葉○松風通ふ玉箏、松風に通ふ箏の音玉は箏を美しく聞かせた言葉○調も文も開け行く、箏の調も學問も開けて○春の山田、開墾地のことをにひばりといふので春に墾を通はせ開け行く山田の心を聞かせて有る○ひきや傳へん、言ひ傳へるのを箏の縁語で引き傳へやうといつたので有る。

【通釋】　古人が春や昔のと面白い歌をよんだ其の春の月を今も見に行かうよ月は一向に答へないで影を花の露にうつして居る其の露にぬれて景色よさに嬉しさに歌をよんだ淺はかなものと評判された櫻の花のにほひを誘ふ朝風に浮かれて來て見渡すと雲の樣な上野の花叉花の爲に誰も世の中のつらいことを忘れて船でこがれ寄つて來る隅田川の夕櫻こんな上野や隅田川と毎日花見に暮して日暮里から飛鳥山今の內充分に見ないと明日は雪の樣に散つてしまふで有らう面白い面白い箏の調も學問も山田も開けて山田の注連繩の樣に長い代かけてこの樂しいことを言ひ傳へよう。

四季の榮

穗積歌子作歌
山登萬和作曲

たらちねの、親のかふこのまゆごもり、こもりもあへず世の爲に、二度三度身をかへて、かへるや春の花曆、梅と櫻の中垣に、咲ける色香も三千歲の、桃こそ君がかざしなれ、ふくや軒ばのあやめ草、長きためしと引き

はへて、限もはても夏引の、手引の糸を繰りかへす、そのをだまきのつがね緒や、染めし千入のもみぢ葉は、幾つゆ霜の秋の色、くもりなき世の朝日子に、匂ふゆるしの唐錦、着つゝ歸れる故郷の、もとあらの小萩おきあまる、露の玉もひくむからに、老もわかゆと菊の花、八重咲く枝を九重の、たばりの袖に折りはへて、安くこえませ千代の坂、冬枯知らぬこの園の、常磐の松に八千代ふる、雪の毛衣重ねつゝ、鶴は長閑に舞ひ遊び、いやすみまさる池水の、青き淵には萬代も、よはひつきせぬ龜ぞすむなる

【句義】　たらちね、親の枕詞○親のかふこ、親の育てる兒とつゞけてかふこは蠶のこと○繭ごもり、繭に入つて居ること○こもりもあへず、籠つて居られないで蛾となつて出る○二度三度身をかへて、虫になり繭になり蛾になること○かへるや春の花暦、蠶がかはるのを返ると言つて夫を一年立ち返ることにも通はせて初から身をかへてまでをかへるの序詞としてある花暦は年中の花の暦○梅と櫻の中垣、梅と櫻との間にさくもの即ち挑のこと○三千歳の桃、仙人の居る國の桃で三千年に一度花が咲き實が結ぶといふ桃三千に滿ちを懸けて有る○かざし、昔は祝の時に花を冠の上に挿した○引き延へて、菖蒲を取つて祝ふこと○夏引の手引の糸、夏とつた蠶の糸夏に無い心を懸けた○をだまき、緒手巻で糸巻○つがね緒、組み紐○染めし千入の、紐を赤く染めた心で紐よりつゞけて更に紅葉に續けてある○匂ふ、色の美しく照り映えること○ゆるしの唐錦、ゆるしの色の上等な錦ゆるしの色とは紅のこと○着つゝ歸れる、成功して故郷に歸ることを錦を着て歸るといふ○もとあら、もとあら、陸前國にある萩の名所故郷はもと住みし處故にもとあらと續けた○小萩、普通の萩と見てよい小は添詞○露の玉もひ、露の玉から玉もひに續けて玉もひは水を酌む器○老も若ゆと菊の花、菊の露を飲むと老も若がへると聞くを菊に懸けた○九重のたばりの袖に、禁裏から賜はりし衣の袖に○折りはへて、菊の花を折り添へて○安くこえませ千代の坂、長く榮えませの心○八千代ふる、經るを降るに懸けた○雪の毛衣、鶴の白羽のこと。

【通釋】　蠶の様にかはりかはつて又春が來て花暦の初になつた梅と櫻との間にさく桃は仙境のめでたいもので君のかざしで有らう五月になる、軒に菖蒲を葺く夫は根が長いのを祝つてさ菖蒲の根の長い様に長い夏引の糸をたまきに纒いて更に組紐にして又赤く染めて赤い紅葉は度々の露霜で出た色夫は有りがたい御代

の朝日にうつる赤地の錦である其錦を着飾つて歸つて來る故郷のもとあらの萩に澤山置いた露同じ露でも菊の露を酌むと若がへるといふことで畏き邊から頂いた衣の袖に菊を折り添へて無事に長く御榮えなさりませ此處の御園の冬枯などは知らない松に毛衣を重ねた千年の鶴は長閑に遊び澄んだ池水の青々とした處には万年も齡の盡きない龜が捿むめでたい事よ。

菊の友

千代田檢校作曲

朝もよひ、清き流をとめくれば、うつろふ影にはぢもみぢ、思や色にあらはれぬ、穗に出でゝ、尾花は招く、妻こふ鹿は音にたてゝ、忍びあへぬがとがかいな、誰が秋風を心から、恨み顏なるくずかづら、くるてふ宵も人だのめ、いつかまことを菊の露、おちても匂ふ忘水、結び初めしが緣のはし、末白菊のよはひをかけて、替らぬ中に相生の、松の下風通ひ來て、調も千代の聲すめり、其玉箒のたまさかに、結ぶ契は秋知らで、根さへ枯れめや山路の菊の、今をさかりの香にめでし夜さへ月にわけなるゝ、袖の白露もすその雫、ほさで幾代の秋やかさねむ

【句義】　朝もよひ、きの枕詞○とめくれば、尋ねて來れば○櫨紅葉、恥ぢて顏を赤くする心が懸けてある○思ひや、戀心○とがかいな、無理はない○誰が秋風、秋に飽きを懸けた○うらみ顏なるくずかづら、葛の葉は秋風が吹くと裏返り易い故裏見に懸けた○くるてふ宵、葛の蔓の緣て繰るを懸けた○人だのめ、人賴ませあてにさせること○いつか誠を菊の露、菊に聞くを懸けた○忘水、野中の人に忘れられた古井戸（泉の樣なもの）○結びそめしが緣のはし、結びは水を掬ふことで緣結びに懸けた○末白菊の齡、白に知らぬをかけて長い壽命の心○相生、相逐で追ひかけ合つて共に榮えること○玉箒のたまさか、たまは重ねかけた修飾語○根さへ枯れめや、根まで枯れるで有らうか枯れまい○山路の菊、古今集の「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年をわれはへにけん」といふ歌から出た言葉○香にめでゝ、香を感賞して○夜さへ月にわけなるゝ、香が高いので夜もよくわかる心○袖の白露もすその雫、重語で露といふ心○ほさで、濡れたまゝにで前の歌から出た言葉。

【通釋】　尋ねて來て見ると淸い流に恥かしさうな色をして紅葉はうつつて居る尾花は穗を出して招く鹿は妻こひしさに忍びきれないで鳴くが無理も無い誰に飽きられてか恨みがほに葛の葉が動く來るといつても一向に來ない何時眞の言葉を

聞かれるか露が落ちてよい匂のする忘水を結ひ初めたのが縁の始で末長い壽命をかけて仲よくすると相生の松の風にまで千代の聲が澄んできこえるたまさかに逢ふ様では有るが約束は秋を知らず根は枯れず山路の菊の様に年々芽が出て今は花盛で香がよいから夜でも月の光に分けて行くことが出來る其分けて行く袖や裾にかゝる露を古今集の歌の様に干さないで千年以上も榮えたいと思ふ。

伊達模様

高橋義雄作歌
山室保嘉作曲

是やこの、盛り久しき三つ組の、小袖模様の蝶櫻、朝な夕なに少女子が、心の錦身に飾り、裾ふきかへす春風に、誘うて出づる初駒の、勇めば花や匂ふらん、時を經て開くや花の山續き、四方の惠もいや高き富士の根仰ぐ駿河町、朝日にうつる白雪は、田子の浦わの水鏡、四海波風おだやかに、鄙も都もおしなべて、伊達の模様の數々を、つけて目出度まひ納む、つけてめでたく舞ひ納む

【句義】伊達模様、江戸時代に仙臺の伊達侯が華奢風流を極めてから出來た言葉○是やこの、是があの○三組、この歌は三井呉服店で作つたから三組といつて小袖につゞけた○心の錦身に飾り、心の美しさを身に表はして○初駒の勇めば花やにほふらん、春駒の勇む時に櫻もさく。

【通釋】是が盛り久しい三井の三つ組の小袖模様の蝶櫻で其小袖を小女子が着飾つて誘ひ合せて春風に裾ふき返させて花見に出かけると花は山つゞき山の中でも駿河の富士山の様に高い皆様方の御ひいきイヤ富士の雪は田子の浦の水にうつつてよい景色先づ〳〵天下泰平で田舍でも都でも一様に色々の伊達模様を着てめでたく舞ひ納める。

四季の艶

山田檢校作曲

春霞紫立ちし曙の、梅に木傳ふ鳥の音も、いつしか更て卯の花の、衣や薄き舟人の、漕ぎ行く方は隅田川、有りや無しやの宵の月、尾花の風は君招く、淺き契はたな機の、さゝの一夜の假枕、思ひはつもる雪の朝、簾かゝぐる別には、裳裾ひかへて三和ならぬ、その緒だまきの糸によるこひ

【句義】梅に木傳ふ鳥、鶯○いつしか更けて、春も暮れて○卯の花の衣、白地の夏衣○有りや無しやの宵の月、影がかすかな三日月秋の初の心有りや無しやは業平が隅田川でよんだ「名にし負はゞいざ言問はん都鳥わが思ふ人は有りや無し

やと」といふ歌の中の言葉○淺き契は棚機の、棚機樣は一年に一度より外に逢ふことが無いので淺き契といふのである○さゝの一夜、棚機祭に笹を立てるから笹とつゞけ一夜は一節の心に通ふ○すだれ掲ぐる別、雪の朝簾を掲げて男を送り出すこと簾を掲ぐといふのは淸少納言に雪の朝一條天皇が香爐峰の雪はと仰せられた時に少納言は白樂天の香爐峰雪掲レ簾看といふ句の心で默つて簾をかゝげたといふ故事から出た○裳裾ひかへて三輪ならぬ、裳裾を押へて三輪では無いがの心是は昔玉櫛姫の處へ三輪の大物主神が毎夜通はれたがある日玉櫛姫が大物主の神が御歸の時に針に糸を通して裳裾に付けて置いて其糸をたよりに三輪の大物主神で有ることを知つたといふ故事から出て居る三輪は大和國にある山○緒だまき、糸卷○糸による戀、古今集の「糸による物ならなくに別路の心細くも思ほゆるかな」といふ歌の言葉で糸による樣に心細く心が寄る戀といふ心。

【通釋】朝霞が紫に立ちこめて鶯のないた春もくれて夏の薄い着物で涼み舟を隅田川に出すと間も無くほんのりとした秋の三日月に尾花は招いて居る秋の初に祭る棚機の約束は淺いことで一年に僅一夜の假枕故思ひは段々つもる積つた雪の朝簾をあげて送り出す時には三輪の神では無いが裳裾を押へてとめたくなるがさうも行かず糸の樣に心細く思はれる。

千箱の玉章　　山田檢校作曲

常磐なる松を浸せる千歲河、月も夕の品定め、桂男の俤ゆかし、見そめてそめて染めかゝる、龍田姫とは浮氣ばかりの色かへ、露の間も忘られんぼの中々は、いにし驪山の春の園、共に詠めし花の色、その言の葉もいもせどり、めをとのゑだといひ交しまの、水も漏さぬ誓詞の數を、筆に誓ひし墨色の、濃いなか浮名の種を卷紙に、愚痴の有りたけ文枕、文がやりたや室津の君へ、君が投げぶし投文なげてくどき文、夜毎に通ふ神かけてほんにとりなり、よいふうじぶみ、鳥渡こなたへかりの文、祈りまゐらせ候かしく、文も見ずとは橋立の道よ、道の切どできれ文いやよ誓ひ文、いよし御見とかいたるは、ほだしの種か緣結びぶみ、紅葉わけつゝ鹿のふみ、思ひまゐらせ候かしく、止めて嬉しきやまと文字、返す〴〵もめでたけれ、君は千代ませ八千代ませ、なほ色ますや萬歲樂、千箱の玉章たてまつる、是ぞ久しきみつぎかな

【句義】千箱の玉章、澤山の箱の手紙○常磐、とこいはの約常にかはらないこと○松を浸せる千年河、松の緑がうつる千年河松の榮を千年といふので千年河につ

ゞけた千年河は九州筑後川の一名○月も夕の品定め、河に月のうつる夕方景色の評をすること○桂男、月の世界に桂の木がある其下に居る男を桂男といふと支那から傳はつた話で有るがこゝでは美男子と見てよい○見そめて染めてそめかゝる、見そめ思ひそめ紅葉を染め○龍田姫、大和國龍田山の姫神で秋の山の神○浮氣ばかりの色かへ、赤く色に出る紅葉の神で其上に浮名が立田姫といふから浮氣にのみの色かへと問ひかけ其様でないといふ心を見せて有る○忘られんぼの中々は、忘れられないといふことを戀慕にかけて互に思ふ中はの心○いにし、昔○驪山の春の園、驪山は支那の山この山に華淸宮といふ溫泉宮が有つて其處で玄宗皇帝が始めて楊貴妃を見られたのが春で有る○その言の葉、玄宗が貴妃に約束された言葉○妹脊鳥、夫婦鳥の心で羽をならべて飛ぶ鳥○めをとの枝、枝を組みかはした木のことで是は玄宗が貴妃に「天ニ有ツテハ比翼ノ鳥トナリ地ニ有ツテハ連理の枝トナラン」と約束されたといふ言葉○いひかは鳥、言ひかはしたを河島に懸けた○濃い仲浮名の種を巻紙に、仲がよくて浮名の種を播くを巻に懸けてある○ふみ枕、文の序詞○室津の君、播磨國室津の遊

女○投節、端歌の一種遊女の謠つたもの○投文、人の袖へ入れる戀文投を重ねたのは修飾語○くどき文、その投文はくどいた文よといふこと○神かけて、戀がかなふ様に祈ること○ほんにとりなりよい封じ文、眞に其なり形のよい封じ文○かりの文、借の文を雁の文に通はせて有る○文も見ずとは橋立の道よ、小式部の內侍が「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」といふ歌をよんだが文も見ないといふのは其橋立の道のことよ○道の切戸、丹後國天の橋立に行く道に切戸の文殊といふのがあるこの切の字から次の切文へつゞく○切文いやよ誓文、緣切文は嫌ひ誓の文がよい○いよし御見、吉原の廓言葉で先頃御目にかゝつた時の心いよしはいにしの轉○ほだしの種、心がつながれる種○紅葉分けつゝ鹿のふみ、古今集の「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき」といふ歌から出た言葉紅葉を分けて鹿が妻をよぶ様な心の文○とめて嬉しきやまと文字、かしくと書きとめる假名文字に宿へ泊めて嬉しきを聞かせて有る○返す〴〵も、手紙の後に返し書といふのがある夫をかけて返す〴〵もといつたのである○なほ色ますや、榮えてゆくこと○久しきみつぎ、

長く絶えぬ献上物○係が是ぞと有つて哉の結は合はないみつぎ物としたらば善からう。

【通釋】千年河に月もうつる松もうつる波も月も松も定めかねたよい景色であるが月の中に居る様な桂男の姿が戀しくつて見そめて思ひそめ紅葉の色を染めた紅葉の神様の龍田姫も浮氣の色の神様かさうでは無い眞實に鳥渡の間も忘れず思ひ合ふ仲は唐の玄宗皇帝と楊貴妃との間柄の様に比翼連理の約束までして水も漏らすまいと誓の言葉を書いた其墨色の様に濃い仲が浮名の種をまく愚痴の有り丈を書いて室津の女にやりたいあの女の投節といふ様に投文で口説文をやらうか其上に毎夜神詣して鶏が鳴くまでも祈る夫でも文も見ないと言ふで有らうか文も見ないといふのは天の橋立さ其道の切戸の切といふ様に切文はいやよ誓文ならばよいがいよし御見と書いた文は心をつながれる緣結の文である鹿が妻をよぶ様に思ふ心を書いてかしくと止めて返す書も付けてめでたいことよめでたいめでたい君は何時までもなほ色添へて是が眞に萬歳樂澤山のふみを差し上げる是も永くつきない献上物である。

蓬萊（舊）

山田檢校作曲

この殿は、むべも富みけりさきくさの、三つば四つばのいつまでも、かはらぬ春の雛鶴に、色をならぶる白梅の、匂も聲ものどかなる、夏をむねなる泉のほとり、尾を引く龜に浦島が、昔語のいと若々と、釣の出立の人柄は、雲井にまがふ沖の方、あら面白の青海波と、醉へるが如くたゆたふて、歩むとも無く行くとも無く、到る所は蓬萊宮、黄金をのべ玉をしく、ことなる龍の都にも、戀となさけは目に立つ波の、音に聞えし姫はまだ、言ひ寄ることもしらぬひの、盡し盡せる心の內を、夫と悟れとうちつけに、なんと岩間のうつせ貝、よその見る目も中々に、仲立入らぬにひ枕、濡れぬ內こそ露をも厭へ、思へば不思議のえにしぞと、名殘はつきぬ月日貝かひ有る今日の玉手箱、携へ出づれば悠然と、波の鼓ぞきこゆなる、枝はふりても色かへぬ、松風は千秋の聲、年もやうやう呉竹の、幾世かふべき長生殿、老いせぬ門に立ちかへる、春を數ふるさゞれ石の、いはほとなりて苔のむすまで

【句義】色をならぶる白梅、鶴の羽の白いのと梅の白いのと色をならべる心○新作の方は海で龜の脊にのり蓬萊宮に行くが舊作の方は庭の泉で龜と話をして居る內に夢になつてしまふのである○後段も舊作は感心しない言葉が有るので新作が出たので有らう。

【通釋】　新作と大差が無いから略す。

芙蓉の峰

山田檢校作曲

眞白なる、高根も春は櫻花、咲耶姫とは神代の昔、神代も花の色盛、花の姿のいとしらし、しむぞいとしらし、いともかしこき人の世に、節もすぐなる竹取の、翁が娘はよい娘、磨き立てたる桂の眉に、顔は照りそふ秋の夜の、月にかこちて故郷を、戀しがるやつ、慕ふやつ、八つと八つとを指折り見れば、二八十六でふみ玉章を、雁が持て來る雲井より、ちらと見せたは冬立つ空に、降り來る雪の膚自慢、是見よかしに三保の松、羽衣といふ謎かけた、天津少女は浮氣かあだか、男ひでりかこの年月を、賤が伏屋にかり枕、いとも繰り候、機織り〳〵に、霓裳羽衣の曲をなし、東遊の駿河舞、雨に潤ふ花の袖、かへす袂に充滿の、寶をあまねく世にふらし、施し給ふいつくしみ、盡きぬ其名は蓬萊の、山またこゝに富士の根の、扇の裾野末廣き、御國の要と祝しけり

【句義】　芙蓉の峰、富士の山のこと○さくや姫、花の咲くを懸けた大山祇神の女富士山頂に祭れる神○花の色盛、花の樣に美しい娘盛○いとしらし、可愛らしい○しむぞ、眞に○いともかしこき・神のことを申して恐れ多い○節もすぐなる、竹の序詞○竹取の翁が娘、竹取物語中の人物かぐや姫のこと○桂の眉、桂は月世界の木でこゝでは月の形の眉○顔はてり添ふ秋の夜の、顔は照る月の樣に美しい○月にかこちて故郷を、かこつは愚痴をいふこと赫哉姫が月夜には故郷の月世界を思つて嘆いた○戀しがるやつ、赫哉姫を多勢の人が戀ひこがれたこと○二八十六、赫哉姫十六歳で昇天した○文玉章を雁がもて來る雲井より、雁は手紙を持つて來るものと昔から言はれて居るこゝは村上天皇が赫哉姫に御文を下さつたことをいふので有る○雪の膚自慢、雲の間から富士山の雪が見えたこと○羽衣といふ謎かけた、天人が三保の浦へおりて羽衣を漁夫に拾はせて夫から語らひ初めたので謎といふので有らう○賤が伏屋に假枕、天人が漁夫の妻となつて居たこと○機織り〳〵に、糸を繰つたり機を織るひまに○霓裳羽衣の曲、唐の代に方士が玄宗皇帝を連れて仙宮に行つた時仙樂を聞いて歸つて來てから其通りに作らせた樂○東遊の駿河舞、三保の浦で天人の舞つた舞○雨にうるほふ花の袖、舞の姿の美しいこと○御國、富士は駿河甲斐相模の三國の中にある。

【通釋】　雪で白い富士の高嶺も春は櫻がさく咲耶姫の神は神代の美人で花の姿は可愛らしい人の世になつては竹取の翁の娘赫哉姫はよい娘で月の眉に月の顔月の

都から來たので月夜には故郷を戀しがる多勢の人は赫哉姫を戀しがるしかし姫は十六で月の都に婦られた其時に雲井から御文を下さつた雲の中から雪の膚をちらと見せるのは富士の山こちらの三保の松原には天人がおりて羽衣の謎をかけてどういふつもりか長の年日漁夫の妻となり糸を繰つたり機を織つたり時に霓裳羽衣の曲やら駿河舞やら其舞の美しいこと袖を返す度に七寶充滿の寶を降らせて世に施し長く語り傳へる其名は蓬萊山こゝで言ふなら富士の扇の形の末廣く繁昌する御國の要でめでたい。

江の島（舊）　山田檢校作曲

（前略）あまのこどもの打むれて、そなれこうたの貝づくし、君が姿を見染めてそめて、引く袖がひを振り拂ふ、戀はあはびの片思、あだしあだ波櫻貝、梅の花貝其身は粹な、すひなすがひは男の心、こち姫貝一筋な、女心はさうじや無いわいな、何時か逢瀨のとこぶしに、逢うて離れぬはまぐりの、其月日貝まて貝と、いふをたのみの妹背貝、うたふ一ふし戀の海、かの深澤の惡龍も、たへなる天女の神德に、たちまち一念ほつきして、永く誓を龍の口、昔のあとをとゞめける、いく千代もつきせじ盡きじ、この島の、磯山松を吹く風、岩根によする波までも、さながら和風樂、青海波を奏すなり、ことわりなれや名にしおふ、妙音菩薩のしらべの糸、長く傳へて富貴自在、壽命長久繁榮を、守らせ玉ふ御神の、廣き惠ぞ有りがたき、廣き惠ぞ有りがたき

【句義】　江の島、相模國にあつて辨財天を祭つた島開化天皇の御代に此島出現し天女降るとも欽明天皇の御代より祭祀を絶たずともいはれて居る○たもとが浦風、袖に浦風がふくこと○しなどのおひて、風の神を級戸の神といふ追風の心○福壽圓滿、福に吹くを懸けた○誓の海、佛の敎に弘誓海の如しとあるのから出た（佛が弘く救はれる誓は海の樣に廣いといふ心）○干瀉、潮が干て洲が出ること○水は山の影をふくみ、水に山のうつると○山は水の心に任す、山は水の心に任せて影をうつさせて居る○神仙窟蓬萊洞、江島にある洞穴の名○峨々、岩のけはしい在狀○隨緣眞如、緣にまかせて救はれること○そなれこうたの貝盡し、貝盡の小唄○見染めて染めて、見染め思ひ染め○袖貝、小さく白く網目ある貝○あだし仇波、一向に定まらない波人の心にたとへてある○櫻貝、薄紅色の薄い貝殼○梅の花貝、白い小さい丸い貝○其實はすいな、粹を酸にかけて梅の實は酸いといふ心○すがひ、梅貝の實は酸いからいふ名○姫貝、男に對して言つたまでのこと○とこぶし、常臥で寢通すこと○月日貝、貝の內面片方赤

く片方白し○まて貝、竹管の様な貝○妹脊貝、夫婦といふ心○戀の海、海の様に深い戀心○深澤の惡龍、昔江島邊に深澤といふ湖ありて惡龍すみ人の兒をとりて食ふこの龍ある時天女に戀をしたが惡業が有るからとて天女にことわられ夫から惡業をやめて善龍となつたといふ話が有る○たへなる、美妙の○發起して、思ひ立つて○誓を龍の口、惡業せぬ誓を立てた立つを龍に懸けた○龍の口、相模國の地名○和風樂青海波、樂の名○名にし負ふ、俗にいふ名だいの○妙音菩薩、觀音菩薩の別名○しらべの糸、妙音から松風をしらべと言つて糸から次の長くへつゞけた。

【通釋】　春過ぎて夏の初の單衣の輕い袖に追風が心持よく吹いて福壽滿足な佛の誓の海では無いが潮が干ると徒步渡も出來る江の島は繪も及ばないよい景色で波には山の綠がうつり神仙の窟だの蓬萊洞などといふ穴が有る岩はそば立つて波には隨緣眞如の聲がきこえ心まで澄み渡る其時漁師の子供の群が磯馴小唄の貝盡をうたふ其うたの心は君を見染め思ひ初め袖を引けば拂はれた戀は片思で向ふは一向に仇波で心が定まらない粹かも知れないが夫は男の心此方は女で一筋に思ふ心は男心とは違ふ其内に逢ふなら常臥に合つて蛤の様になるその月日を待てといふのを賴みにして今から夫婦のつもりで居るとうたふ歌の一節も深い戀心である彼深澤の惡龍が神女の德に一念をひるがへして再び惡いことをしないと誓を立てた昔の跡が今に殘つて居るこの島の磯山風も岩打つ波も丁度和風樂青海波の様に聞える夫も道理よ妙音菩薩の糸の調で長く富貴自在に壽命長久家門繁榮を御守り下さるこの島の辨財天の廣い有りがたい御惠で有ればさ。

江の島（新）

春すぎて、今ぞはじめの夏衣、輕き袂が浦風に、科戸の追風そよ〳〵と、ふく壽圓滿限りなき、誓の海の夫ならで、干潟となればいと易く、あゆみをはこぶ江の島の、繪にも及ばぬながめかな、水は山の影をふくみ、山は水の心に任す、神仙の窟、名にきこえたる蓬萊洞、岨だつ岩根峨々として、隨緣眞如の波の聲、心もすめる折柄に、あまの子供の夫ならで、うたふ一ふし面白し、みづらゆひたる二人の稚兒が、眞砂子の上にお̀り立ちて、拂ふまでによろづ代の、龜のかはらをひろひとり、やがて四すぢのことのをかけて、ひくやしらべのいとたへなれば、波のひゞきもうちあひて、聞けば心も、空になりにけり、かくてひとりは雲鳥の、綾の衣の袖かへす、世に面白きその姿、しばしとゞめんよしも無く、もとの波間に消え失せぬ、げに有りがたき神仙の、まさ

しき使の歌舞は、この世のものに有らねども、後に傳へて今の世も、昔のあとをぞとゞめける、幾千代もつきせじつきじ、この島の、磯山松をふく風、岩根に寄する波までも、さながら和風樂、青海波を奏すなり、ことわりなれや名にし負ふ、妙音菩薩のしらべの糸、長く傳へて富貴自在、壽命長久繁榮を、守らせたまふ御神の、廣き惠ぞ有りがたき、廣き惠ぞ有りがたき

【句義】　あまのこども、漁師の子供○みづら、鬢のこと○までで、たゞ袖といふに同じまは發語○龜のかはら、龜の甲○四筋の箏の緒、琵琶の緒○いとたへなれば、神妙であれば○心も空になり、あまりの美妙に心がうつとりして○雲鳥の綾、雲に鳳凰の模様○衣の袖かへす、舞ふ様子○しばしとゞめん由も無く、舞が面白いので今しばしと止めて見たいがさうもならないでの心古今集に「天津風雲の通路ふきとぢよ小女の姿しばしとゞめん」とある歌の言葉。

【通釋】（前略舊に同じ）漁師の子供ではない様子餘に面白い歌で有ると思つて見ると兩鬢に髪を結つた二人の稚兒が砂の上に降りて來て龜の甲良を拾つて夫に四筋の緒をかけて琵琶にして彈く其調が神妙で波の響によく和つて聞いて居て心もうつとりして仕舞つたそうして一人の稚兒は舞ひ出した夫が又面白くつて何時までも見飽かないが其内にもとの波間に姿は見えなくつた是はたしかに神の御使の歌舞でこの世のものでは無いが後に傳へて今にあとが殘つて居る。（後略）

江の島曲　（貝づくし替歌）

あまの子供のうちむれて、磯馴小唄も貝づくし、沖の干潟に袖かひつれて、磯貝づたひあさり貝、誰も家路を忘貝、拾ふ甲斐なき身なし貝、梅の花貝名もかぐはしみ、競ふたがひの物あら貝や、よそへやらじのから貝に、ぬらすたもともやがて我からと、あきてさゞえのさゝ貝を、くめば面はの櫻貝、紅匂ふ色貝に、人の見る目もうつせ貝、うたふ一ふし面白や、かの深澤の惡龍も、妙なる天女の神德に、たちまち一念發起して、永くちかひをたつの口

【句義】　（江之島舊と重出故略す）。

【通釋】　漁師の子供が群れてそなれ小唄をうたふ夫が貝づくしで其歌の心は沖の方まで今日は潮が干たから袖引きつれて磯べ傳ひにあさると面白さに誰でも家に歸ることを忘れてしまふ拾つても仕方の無い身のない貝もある梅の花貝といふのは名がよい物あら貝といへば互に爭ふ心よそへはやるまいといふのはからか

ひでたもとを濡らすのも元はと言へば自分から作つたこと（我から、藻に住む虫の名）おいては押へて酒を飲むと顔が櫻色になるやがて眞赤になつて見る目もわからなくなつて夢うつゝに歌ひ出すのも面白いあの深澤の龍も天女の御蔭で惡心をひるがへして永く誓を立てることゝなつた。

常磐の榮

山勢松韻作曲

春きぬと、ゆふ告鳥の一聲に、明けてかすみの關も無く、見渡す山はうらゝかに、浦べ靜かにさゞ波の、よせてはかへし豐かなる、御代のためしにひく小松、誰が袖ひいて姫松の、契を結ぶ玉のをの、末もながきにかきかはす、其玉づさの音づれを、まつみはつらやもしやたぞ、よそにするすみかく筆の、とがは無けれど硯の海に、水さす人のつらましき、心のたけを一ふしに、思ひをこめて呉竹の、しげりて通ふ月の夜は、しのびかねしよ濱の松、峰の松風誘ふとも、たゞ一筋にこの君と、わが名を立てゝ高砂の、松はゆかしき諸共に、老いせぬ宿は若竹の、わかきは名にし男山、谷の戸出づる鶯の、壽そへて初音けふ、春引きのぶる妻箏の、調はつきじ萬代も、色はかはらぬ常磐木の、綠の空や山ぞのどけき

【句義】ゆふ告鳥、白木綿を付けた鷄で社に納めた鷄のこと春がきたことを告げと懸けて有る○霞の關もなく、霞の隔も無く明かに見える心○うらべ靜かに、前句うらゝかからの重語の修飾○さゞ波、水面の小さい波○ひく小松、引くは抜くことためしに引くを懸けた○姫松、松に寄せて女のことをいつたので有る○契を結ぶ、約束○玉の緒、壽命○たそ、誰かゞ○よそにする墨、餘所にするを墨をするに懸けた○水さす人のつらましさ、水をさした人はつらい人で有る水さすは熱情をさますこと○心のたけ、心にあるかぎり○呉竹、茂りの序詞○しげりて通ふ月の夜は忍びかねしよ、繁く通ふのに月の夜は忍んで行きにくい○峰の松風誘ふとも、外に待といふ人が有つて其方に誘はれても心を動かさないで○此君、竹の異名を人のことに懸けて有る○わが名を立てゝ、この君と連れ添ふと名を明かに言ひ立てゝ○高砂、播磨國にある○松はゆかしき、相生の松であるから美しい心○男山、山城國にある若い男に懸けた○谷の戸出づる鶯、春になつて谷の古巣の戸を明けて出る鶯○壽そへて、春を祝ひ添へて○春引きのぶる、春をのどかに引く箏○爪箏、妻箏に同じたゞ箏といふのに同じ○綠の空や山ぞのどけき、空も山も一つ綠にきれいで長閑で有る。

【通釋】今日から春であると鷄がないた見渡すと山も海もいかにも長閑である初子

の日の小松を引きに出るとよい姫松が有つた其姫に約束して手紙の取り遣りする内には返事が待つて居ても來ないので心配になることも有るが心の有りたけを盡し繁々通つてよそに心もうつさずだゞ一筋にこの君と連れ添ふことを名に立てゝ末は諸共に永く男山の榮久しい樣に榮え其山の谷の戸を明けて出て來て春を祝つて鶯はなく人も祝つて彈く箏の調がめでたく何時までもかはること無い碧の空綠の山がのどかで有る(松を女にし竹を男にしてある)。

千代の壽　　山木千賀作曲

實に日の本の文明に、開くや花の時ならん、常磐かきはに色かへぬ、枝葉しげりて千代の蔭、こもれる松の深みどり、四季折々の花の園、こゝにしめたる高殿は、心も清くすめる世の、玉の臺とかゞやきて、玉としつらふ別世界、見飽かぬ春の風景は、富士と筑波に向ふごし、堤の花や田をみめぐりと、櫻につゞく諸人の、袖うちつれて遠近に、通ふ橋場の渡しぶね、帆あげる舟や涼み舟、行きかふえにしの糸筋を、結ぶは神の白髯と、誰が待乳山夕かけて、棹さすかたは知らねども、いざ言問はん隅田川、水上清くてる月の、さやけき影は白浪に、よせてはかへし返しては、袖の白露おきそへて、秋長月の長き夜を、明しかねたる手枕に、鳴く虫のねの聲すみて、松風通ふ箏のねの、しらべゆかしき遠砧、面白や、見渡すながめ白雪に、梢々もうづもれて、山風寒くふりつもる、年の貢も春かけて、豐に千代の壽を、祝してうたふ爪箏の、音色も高き家の風、吹き傳へなむいつまでも、榮えて代々に盡きぬ言の葉

【句義】文明に開くや花の時ならむ、日本の文明開化で全盛の時で有らう○常磐堅磐、とこいはかたいはで万代に變らないこと○こゝにしめたる高殿、こゝに普請された御家○心も清くすめる世、泰平の世と心持よく住む心とを懸けてある○富士と筑波に向ふごし、駿河の富士山と常陸の筑波山とを向ふに見て○みめぐり、隅田川の東岸にある社○橋場の渡、隅田川の渡場往古は奥州街道で橋が在つたところともいふ○白髯の社、隅田川の東岸にある○待乳山、隅田川の西にある小さな丘○いざ言問はむ隅田川、伊勢物語に昔在原業平が隅田川で都鳥を見て「名にし負はゞいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありや無しやと」といふ歌をよんだ其歌の中の言葉でドレ尋ねて見やうといふ心○袖の白露おきそへて、波がかゝつて袖の露となる心から袖が露けい秋と轉じさせてある○手枕、枕のことたは發語○長月、九月の異名○遠砧、遠くの擣衣の音秋布を晒して打つのを砧といふ○年の貢、雪のこと雪は豐年の兆といはれて居るからの名○爪

箏、爪をかけて彈くからの名でたゞ箏いふのと同じ〇家の風、家風で家のありさま。

【通釋】日本文明の全盛と同じ様に御繁昌で四季に花も絶えないこの御園に今度御建てになつた御殿は住み心地よく立派で風景といへば冨士と筑波を遠くに見て近くは向島の三圍あたり花を見てあるく人が、橋場の渡から舟で行つたり來たりして又向ふに見えるのは縁結の白髯の御社此方のは誰をまつのかと思ふ待乳山から舟を出すと向ふの岸は隅田川の言問(地名)で月が浪に寫つて綺麗である秋は總じて陰氣なもので夜は中々長い虫は鳴く松風は箏の調の様に聞える又夫へ遠砧も交つて聞えて面白い面白いと言へば白雪がつもつて年は寒くなるが雪は豊年の兆といふので先めでたいことよ目出たいのを祝ふ箏の音の高い様に家の譽を高くあげて永く世に傳へさせたいもので有るこの言葉も何時までも盡きない言葉として榮えるで有らうと思ふ〇この歌初に四季折々の花の園と置き夫より櫻といひ涼舟といひ月といひ虫といひ雪といつて結んである。

勾當内侍

佐藤　左久作曲

影深き、大内山の老松に、宿れる月も八千草に、すだくや虫の諸聲も、あはれを誘ふ折しもに、ほのかにきこゆる玉箏の、主や誰とも白つゆを、踏みしだきつゝ義貞は、そゞろに心ひかされて、萩の戸近く立ちよれば、世にも稀なる上﨟の、月に向ひてかきならす、水の調もすみ渡る、折らば落ちなむ萩のつゆ、拾はゞ消えん玉笹の霰より、なほあだなれば、限なく月はさしながら、心の闇に迷ひけり、見し其人は勾當の内侍と知るや一筋に、思ひ入る矢に楯もなく、我袖の涙に宿る影ぞとも、知らで雲井に月やすむらん、知らで雲井に月やすむらん、おくりし言のいつしかに、天津空まで聞えけん、遂に内侍を賜び給へり、月にしらべし玉箏も、今こそ宿の妻箏と、末の緒かけて契りけん、末の緒かけて契りけん

【句義】勾當内侍、後醍醐天皇の宮女で有つたが新田義貞に思をかけられた後天皇内侍を義貞に下さつたので内侍は義貞の妻となつた〇大内山、禁中のこと〇すだく、集ること鳴くことでは無い〇あはれを誘ふ、感情を動かすこと〇白露、露に知らぬをかけた〇踏みしだき、露の中をふみ分けること〇萩の戸、宮中の局の名〇上﨟、貴い女〇折らば落ちなむ萩のつゆ拾はゞ消えん玉笹の霰、源氏物語箒木の巻の中の言葉で其もとは古今集の「折りて見ば落ちぞしぬべき秋

萩の枝もとをゝに置ける白つゆ」から出て居る女のなまめいて居る様子○あだなれば、今の口語のアダツポイので○心の闇、月はさしても心は戀の闇で有るといふ心○思ひ入る矢に楯もなく、俗にいふ矢も楯もたまらないといふ心○我袖の涙に宿る影ぞとも知らで雲井に月やすむらん、義貞が勾當内侍に贈つた歌わが戀しく思つた其人は我心を知らないといふ心○天津空、天皇の御耳に入つたこと○妻箏、爪箏に同じで有るがこゝでは妻に懸けて昨日までは殿上の玉箏が今日は自分の家の妻箏となつたといふので有る○末の緒、箏の緒の名を末長くの心に通はせて有る。

【通釋】　禁中の月もよし虫も面白き夜あまりに上手な箏の音がするので義貞が忍び寄つて見ると今しも勾當内侍が月に向つて箏を調べて居るので有つた其様子を見た義貞は一途に戀しくなつて歌を贈つたその事が恐き邊の御耳に聞えて遂に内侍を義貞に下さつた昨日までは貴い邊の玉箏が今日は自分の家の妻箏となつたわけで末久しくかはるまいと言ひかはしたで有らう。

松の榮

幾代かは、月日ふりにし姫松の、とかへり開く花の頃、相生年の名は夫ながら、すぎけん昔白雪の、積り積りし深緑、露もらさじと茂り合ふ、梢になるゝ友鶴の、夕のとこの起居にも、松風をのみかたしきは、翼ならべて萬代も、よそにも猶やあしたづの、妹脊と契るもろは貝、思ぞこむる曉の、鐘も響きていとよしく、清き浦輪の住の江や、浪間に見えし松の春、野べの遊も子の日なる、松のかむろの雙葉より、ふくむ色香も千代のはし、霞む男の引く袖に、たそうつり氣な青柳の、亂れし髪も童鬟、十二ひとへに一年の、四季の眺をかさね着て、九重匂ふ花の空、うたふ蛙がみじか歌、日の長うたに鶯の、言問ふ初音軒ばもる、松の下葉も色はなほ、まさきの桂長き代を、散りうせずして、この宿の、榮は同じ松が枝の、つきせぬ影こそめでたけれ

【句義】　いく代かは、‖かはは反動辭で幾代か量られない程多い年をの心○月日ふりにし姫松、長い月日を經た姫松松は女の心に通はせてある○十かへり開く花、松は百年を一返として千年に一度花がさくといふこと○相生年、同じ年○それながら、そのまゝで○深緑、深い雪と緑とに懸る○露もらさじと茂り合ふ、仲のよい處から濃やかに茂つて居る心にかけてある○松風をのみかたしきは、松風に待つを懸けて有る片敷は衣の片袖を敷くので獨寝の在狀○あしたづ、

葦邊に居る鶴○もろは貝、歯が合ふ貝蛤のこと○住の江、住吉のことで捿みよい心が通はせてある○波間に見えし松の春、松の綠が波に寫つて見えること○子の日、正月初子の日に野へ出て松を引いて身を祝ふ遊び○松のかむろ、かむろは髮振の義で子供といふこと二葉の松は松の子供で有る○千代のはし、千代も榮ゆべき端が見える○かすむ男の引く袖、霞がたなびくといふのに男といふ言葉を興に挾んだので有る○わらは鬢、乱らし髮を童といふので鬢の亂れたこと○十二單、白小袖單五衣表衣唐衣に袴を着裳を付けた女の裝束夫を十二ケ月として一年とつゞけて有る○九重匂ふ花の空、美しい花の空の心詞花集伊勢大輔の「古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬる哉」といふ歌から出た言葉○うたふ蛙の短歌日の長歌に鶯の言とふ初音、古今集の序に「花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば生きとし生けるもの何れか歌をよまざりける」とある言葉から出た短歌長歌は對にいつたまでゞたゞ廣く歌と見てよい日の長歌は日の長いを長歌に言ひかけた○まさきのかつら、深山にある蔓草で長に懸かる○散り失せずして、散つて無くならないで。

【通釋】　雪にも色をかへず千年も經つたらうと思ふ相生の松に馴れて居る友鶴が夕方床の上の起居につけても相手を待つて松風を聞きながらの獨寢には翼ならべて万代も住みたいと思ひ又餘所にも妹脊の鶴が中をよく蛤の様に合つて居るものが有らうかと思ひなどして居る内に夜も明けて見ると住吉の浦はよい景色で浪には松がうつる春といへば初子の日には松を引く子の日の松は松の子供で有るが二葉ながらに千代の色は含まれて居る其内に霞は立つ柳は亂髮の様にのびて來る段々に十二ケ月移つて四季の眺を重ねて八重にも九重にも櫻がさく頃となる蛙や鶯がうたふ歌もきこえる軒の松の葉の様にいつまでも散つてしまふことなくこの御家も其通に榮つきないのが如何にもめでたい。

かざしの雪

同じ常磐の松竹や、冬も葉がへぬかげ高く、强き姿とたをやかに、なびくさまにぞたぐふなる、千年くらべの妹と脊の、中に生ひ添ふ姫小松、裏若竹の綠兒に、おほしそめたるすゞしろや、春を待ち得ていつしかと、祝ひつゝ待つ甲斐あれや、千尋の底のみるふさの、振分髮のなりふりも、花の錦や雲鳥の、あやのよそひのかた

すぎて、うちたれがみのさねかづら、結びつときつなまめけり、今をつぼみの花櫻、花のかづらや玉葛、繰りかへしつゝ末長く、茂り榮えん柳のかみも、冬ごもりたる御園生に、ふりと降りしく白雪を、玉のかざしに千代かけて見む

【句義】　かざしの雪、かざしは髮挿であるがこゝでは松竹の上の雪の心○同じ常磐、松も竹も共に常磐のものといふ心○冬も葉がへぬ影高く、冬も綠に高く繁つて居る松のこと○たをやかになびくさまにぞたぐふなる、しなやかな女の樣子に似て居ること○千年くらべの妹と脊、松と竹とを千年同志の夫婦といつたので有る○姫小松うら若竹、女の子や男の子○おほしそめたる、成長しはじめた○すゞしろ、子供の髮罌粟坊主のこと○千尋の底の海松ふさの、深い海の底にある海松の樣に房々とした髮○花の錦、花の樣な錦○雲鳥のあや、雲に鶴の模樣の織物○よそひ、粧に同じ○さねかづら、さは發語根葛のこと長き蔓の汁で昔は髮を洗つたものであるそこで髮の長いのを形容してさねかづらとも言つた○今をつぼみの花櫻、今を蕾の樣な娘○花かづら、髮飾○玉かづら、草の名蔓が長く繰るより繰りの序詞ともなる○白雪を玉のかざしに千代かけて見む、柳の

上の雪を髮の上の玉の髮挿と千代までかけて見ようぞといふ心。

【通釋】　常磐同志の松と竹との中に子供が出來て間も無く育つて罌粟を置く樣になる早く育てよと祝つて待つ内には房々した振分髮となつて錦や綾の立派な衣裳にさねかづらの樣な長い髮が肩すぎて結ぼれたり解けたりして艶やかな娘となるマア櫻の蕾の樣なもので是から春をくり返して長く榮えて遂に冬になると柳の髮に雪がつもる其雪をば玉のかざしと千代までかけて見やうぞ。

乃木櫻

加藤　壽岳作歌作曲

散ればこそいとゞめでたき櫻花、木々の鑑と仰がれし、老木はよしや枯れぬとも、その花の香はとこしへに、うつし世を神ざりまし、大君の、みあと慕ひてわれは行くなり、いでまして、歸ります日の無しと聞く、今日の御幸に逢ふぞかなしき、百敷の御はしを守る櫻木の、その一本は、吉野櫻の强きが中に、やさしさこもる、大和男子のおもかげゆかし。また一本は、枝垂櫻のなよやかながら、いさぎよく、操は流石日の本の、ますらをうなのかゞみなり、かくばかり何れ劣らぬ女夫櫻、歸り來まさぬいでましの、そのみ車の轅にと、われから枯れし二本ざくら、花なきあともかんばしき、名は幾千代に殘るらん、名は幾千代に殘るらん

【句義】　乃木櫻、乃木將軍の大和心といふ心で櫻は大和心の表徵である○散ればこ

そいとゞめでたき櫻花、古歌の「散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ夜半に嵐の吹かぬものかは」といふのから出た言葉で潔く君の爲に命をすてる日本男子をほめた言葉○木々の鑑、木の中の手本の櫻の如く武人の中の手本の乃木將軍○老木はよしや枯れぬとも、乃木老將軍はたとへ薨去されても○其花の香は永久に、忠誠の御心の光は盡きる時が無い○うつし世を神去りましゝ大君のみあと慕ひてわれは行くなり、乃木將軍の辭世の歌○いでまして歸ります日の無しときく今日の御幸に逢ふぞかなしき、同將軍が御大葬を悲しんでよまれた歌○百敷の御はしを守る櫻木、皇室を御守り申し上げる日本心百敷は宮殿御階は御殿の階段○吉野櫻の強きが中に、乃木將軍の威容の中に優しさあること○枝垂櫻のなよやかながら、仝將軍夫人のしなやかで操の強いこと○其御車のながえにとわれから枯れし二本櫻、いよ〳〵御出ましになるその御車のながえの樣に左右について何處までも御供申し上げることわれから枯れしは自害されたこと轅は車の前にありて引く處。

【通釋】　櫻は潔く散るから人にほめられる人も其通で乃木將軍夫妻は御かくれになつても其眞心は永久に輝くので有る將軍夫妻の辭世の歌を見ても御大葬を悲しんだ歌を見ても眞心は燃え立つて居る是が眞に皇室の守の二本櫻で有る其一本は吉野櫻の樣で強い形で有るがやさしいところがこもつて居る今一本は枝垂櫻でなよ〳〵と靡きやすい樣で有るが潔よい操の強い所は日本の烈婦の手本であるこの二本の櫻の樣な立派な方々が愈御出ましの御車の轅にもと自害して御供申し上げられた其尊い心の輝は幾千代までを照すで有らうか永久に殘るで有らう。

春日詣

山登檢校作曲

いにしへの、奈良の都の八重霞、春日の野べのさを鹿の、角もいつしかをちこちの、往來の人のながめぬる、南圓堂の藤波や、さかりは夏にかゝりたる、その松が枝のふりもよく、三笠の山や雲井阪、雨にこそ行くうば玉の、闇の螢かきんすなど、棹さす舟の佐保川に、風も涼しきすゞの音の、ふるの社の神さびて、けがれ心も猿澤の、池に宿れる月の影、昔の人の形見ぞと、見るや采女がきぬかけし、柳も一葉ちる秋の、舟をたくみしさゝがにの、そのふることを思ひねの、枕に響くとゞろきの、橋ふみならす駒の足、鳴くや鈴蟲轡蟲、りんきの顔も三輪の里、いとくりかへす玉づさや、板屋に走る玉あられ、末は雪とも奈良晒、さらせる布の白妙

に、絶えず、絶えずあゆみを運ぶなる、春日の宮のたふとさは、かくとも盡きじ大和言の葉、

【句義】 春日詣、春日神社參詣といふことで南都八景をならべ奈良の都をうたつたもので有る○古の奈良の都の八重霞、詞花集伊勢大輔の「古の奈良の都の八重櫻今日九重ににほひぬるかな」といふ歌から出た言葉○春日の野邊、大和國の地名上の句の霞から音を重ねてかすがと續けて有る春日は鹿栖處の心から名づけられたといふ程で鹿の名所○さを鹿、さとをとは發語でたゞ鹿といふのに同じ○をちこち、彼方此方鹿の角が落ちから懸て有る○南圓堂、興福寺に有つて觀世音を安置した御堂藤原冬嗣の建立○藤波、藤の花のこと花の靡く樣子を波に見立てたのである○盛は夏にかゝりたる、藤は春から夏へかけて咲くといふ心から其藤がかゝつて居る松と次へうつる○三笠の山、春日山の中にある山の名山の形が笠に似て居る○雲井坂、是も奈良にある雨の名所○うば玉、闇の枕詞○佐保川、奈良の北を流れる川で舟の棹といふ心からつゞけて有る○布留の社、今は石上神宮といつて大和國にある大社(素盞烏尊が大蛇を切られた御劒が祀つて有るところ)上に鈴とあるから振るの心でつゞけた○神さびて、神々しいこと○猿澤の池、奈良にある池の名天竺の獼猴の池に形どつたといふこと穢れた心も去とつゞけた○うねめ、昔國々から美しい女を差出して朝廷に奉仕させた夫を采女といふので有る○衣かけし柳、猿澤池の岸に采女の衣かけ柳といふのが有る夫は昔ある采女が帝を思ひ參らせたが帝は夫を御承知ないので遂に嘆のあまり采女はこの柳に衣を脫ぎかけて置いて猿澤の池に入つて死んでしまつた後に帝がこの事を御聞きになつて猿澤の池へ御幸になつたといふことがあるそこで前句に昔の人の形見とあるので有る○舟をたくみしさゝがにの其故事、昔支那の黃帝が烏江といふ海の向ふの蚩尤を征伐しやうとしたが水が渡れないで困つた時に貨狄といふ家來が庭の池で柳の葉に蜘蛛が乘つて向ふへ渡るのを見て舟を作ることを考へ出して蚩尤を征伐することが出來たといふその故事で有る○さゝがに、蜘蛛のこと○轟の橋、三笠山の麓にある橋の名○りんきの顏も三輪の里、鈴虫轡虫から受けて鈴や轡の音でりんきとつゞけ三輪に見を懸けて有る三輪の里は大和國の地名○昔こゝに活玉依姫といふ神が有つて其處へ大物主神が通つた夜更けて來られて夜が明けない内に歸られるので何處の方

か一向に分からなかつたそこである夜男神が御歸の時に澤山の糸を糸卷にまいて置いて其糸の端を針に通して男神の裳に着けて置いて翌朝其糸をたよりに行つて見ると三輪の山まで來て居たといふことがある其處で次のいとくりかへすといふ言葉が出るので有る○板屋、奈良にある地名を板葺屋根に懸けた○奈良晒、晒布で奈良の名物眞白なので雪からつゞけ更に白妙につゞけた○やまと言の葉、大和の事といふのにかけて有る○附記　南都八景、「春日野の鹿」「南圓堂の藤」「三笠山の雪」「雲井坂の雨」「佐保川の螢」「猿澤池の月」「轟橋の行人」「東大寺の鐘」。

【通釋】　奈良の櫻は伊勢大輔が歌にもよんだ春日野は霞も鹿も面白いところ南圓堂の藤は遠くからも人が見に來る其藤のかゝつて居る松も木振がよい三笠山雲井坂などといふ名所も有る闇の佐保川の螢は金砂子を播いた樣でこゝに布留の社といふ尊い御社も有る猿澤の池の岸の衣懸柳を見ると昔の采女のことも思はれる池の柳の葉を見てから舟を作つた支那の昔の事など思ひながら寝て居る內にはや夜が明けて轟橋に駒の足音がする其足音で思ひ出した昔三輪の活玉依姫の許へ大物主神が通つたといふことがある地名に板屋といふところも有るが板屋に霰があたるのは音の高いもの其末には雪となる其雪より白い奈良晒布は奈良の名物で絶えず春日の社に參詣するが其尊いことよ大和の事はとても說きつくせたものでは無い。

護國歌　　三代目　山登松齡作曲

すめら御國のなりたちを、心にとめて誰も見よ、文武百官農や商、遠つ御祖の昔より、おのがさまざま學び得し、道にひたすら身をゆだね、其職業はかはれども、向ふ心は一筋に、强兵富國をめあてとし、一命捨てゝ働くも、獨の君を守るため、一つの國を保つため

【句義】　すめら御國、わが日本帝國○己がさまざま學び得し道にひたすら身をゆだね、自分が志して學んだ道で身を立てること。

【通釋】　判り易き故略す。

住吉　　山田檢校作曲

ことくか　すみよし

一千年の色は雪の内に、深き願も今日こそは、遙々來ぬる旅衣、日もうらゝかに四方の空、霞みにけりな昨日まで、波間に見えし淡路島、あをきが原も思ひやる、實に廣前の清々し、かたそぎの、ゆきあひの霜のいくかへり、契や結ぶ住吉の、松の思はんことの葉を、わが身に耻づる敷島の、道をまもりの神なれば、四季の眺のそのうへに、戀はことさら難題がちに、讀めたやうでも讀みおほされず、てには違に心を盡し、高いも低いも歩みを運ぶ中、おしてるや難波女の、よしあしと無くかりそめに、うたふ一ふしみやびなる、忘貝との名は空言よ、逢うて別れて其後は、又の花見を樂に、日數かぞへて思ひ出す、忘草との名は僞よ、茂りて枯れて夫からは、後の月見を樂に、夜半をつみつゝ思ひ出す、春や秋、徃昔世に光る君、御願はたしの粧の、今に絶えせずおくは猶、深緑なる其中に、花や紅葉を一時に、こき散したる賑は、筆も言葉も及びなき、折しも月の出汐に、つれて吹き來る松風の、つれて吹き來る松風の、通ふは箏のねがひも、三つや四つの社の、御めぐみ、猶幾千代も限なき、道の榮と祝しけり、道の榮と祝けり

【句義】　住吉、攝津國の地名こゝに社が有つて表筒男中筒男底同男の神と神功皇后とを祀つて有る舟の神といひ又歌の神とも言はれて居る○一千年の色、松は千年といふからで松の緑のこと○深き願、深い願に緑の色の深きをかけた○遙々、春の心をかけた○旅衣、遠くから參詣にくること○かすみにけりな、口語にして見ると霞んだワイナ○昨日まで霞に見えし淡路島、新古今集の「春といへばかすみにけりな昨日まで波間に見えし淡路島山」といふ歌から出た言葉淡路島は淡路の國のこと○あをきが原、日向國の地名昔伊弉諾尊がこゝで御禊をして其時に住吉の三柱の神が表れたと言ひ傳へられて居る○かたそぎの、ゆきあひ、社の棟の上の組み合せた木のこと○いくかへり、年毎に幾度も○住吉、地名に住み心地のよい心をかけた○住吉の松の思はん言の葉、玉葉集の「住吉の松の思はんことの葉をわが身にはづる敷島の道」といふ歌から出た言葉歌が下手で松に笑はれはしまいかといふ心○敷島の道、和歌のこと○四季の詠の其上に戀は殊更難題勝に、歌の題の中でも四季の題より戀の題はむづかしい○讀めたようでも讀みおほされず、歌に成つた様でも中々出來にくいといふのを人の心がわかつた様でも判りにくいことにかけて有る○てには違に心を盡し、歌のテニヲハ違に心配する樣に心の行き違が無い様にと心配して○高いも低いも歩を運ぶ中、尊い人も卑い人も戀故には歩を運ぶといふこと○おしてるや、難波の枕詞○よしあしと無くかりそめに歌ふ一ふしみやびなる、難波の女は貴賤共にみやびな歌をうたふといふこと善惡を葦蘆に懸けてある葦蘆は難

波の名物難波は今の大坂のこと假初は苅初にかけた〇忘貝との名は空言よ、忘貝は住吉浦にあるといはれて居る難波女の歌の言葉に忘貝とあるが戀は忘れるものでは無い〇わすれ草、是も住吉浦にあると言はれて居る〇茂りて枯れて夫からは、忘草が繁ると枯れて夫から又茂る時が來る戀も繁く通つて絶々になつて夫から又といふ心〇後の月見、九月十三夜の月見〇春や秋、春の花見秋の月見に絶えず思ひ出す〇世に光る君、世に輝いた光る君で光る君とは源氏物語中の中心人物源氏の君のこと〇御願はたしの粧、源氏が明石の上など共々に御願はたしに住吉の社に參詣されたことがある其時の支度か立派で有つた〇今に絶えせず、源氏參詣から引きつゞき今に立派な方々の參詣が絶えない〇おくは猶深緑、住吉の境内の奥は猶松が深いこと〇花や紅葉を一時にこき散したる賑、花や紅葉の時の賑を集めて散した樣な賑やかさといふことときは搔きと同じ心の添詞〇折しも、其時丁度〇松風の通ふは箏のねがひ、松風が箏の音ときこえること箏のねから願に懸けた〇三つや四つの社、願が滿つを三つに懸け夫より四つとして住吉の祭神四柱の大神にうつしてある〇道の榮、住吉の社の繁昌敷島の道の繁昌などを倂せて言つてある。

【通釋】　かねぐ\の願で漸この春は參詣に來た松は綠に淡路島はかすむまことによい景色である如何にもすみよさゝうな所と思はれるこゝの神樣は歌の神樣で有るが夫れについて思ひ出した歌は四季の題もむづかしいが戀ばわけてよみにくいやらテニヲハ違やらで心配する歌の題ばかりでない誰も戀の爲には心を盡して通ふ難波の女は歌が上手で住吉の忘貝とか忘草とかいふが戀は忘れることは無いもので花見に月見に春秋に思ひ出す昔源氏の君が立派な支度で住吉に御參詣になつてから今に絶えず立派な方々が參詣に來る玉垣の奥は松の深綠で花や紅葉を集めた樣に賑やかでよいところそこへ月は出る松風は箏の音ときこえる住吉の四柱の神の惠で願は滿足にかなふ實に千代も限りない道の繁昌でめでたいことよ。

鐘の音

中村秋香作歌
山登萬和作曲

山寺の、春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける、實に長閑なる花鳥の、色音めでつゝ暮す間に、いつ

しか春もくれなゐの、入日をのこす冬雲の、光をやぶる鐘の音、かの「待つ宵にふけ行く鐘の聲聞けば飽かぬ別のとりは物かは」とかこちしも、今は昔の夢がたり、ねざめの床のつれ〴〵に、夜中曉いつとなく、待つ友垣となりにけり、あはれ思へばなづさへる、この鐘の音、わがよのつひの、何時の時にかつげぬらん

【句義】「山寺の春の夕ぐれ來て見れば入相の鐘に花ぞちりける」新古今集の歌で夕方の鐘にちる花のあはれをよんだのである○花鳥の色音、花の色や鳥の聲○くれなゐ、春の暮に夕日の紅を懸けた○「待つ宵にふけ行くかねの聲きけば飽かぬ別のとりは物かは」是も新古今集の歌で小待從がよんだので有るがこの歌が評判になつてから小侍從のことを人が待宵の侍從といつた人を待つ夜の明けの鐘は逢うて別の鷄の聲よりつらいといふ心○かこち、愚痴をこぼすこと○今は昔の夢がたり、待宵の鐘などは若い人にあることで老いては夢物語で有る○友垣、友に同じ○なづさへる、馴れ親しんだ○わが世の終の、わが最後の時○告げぬらん、自分に鐘が別を告げるで有らうか。

【通釋】昔能因法師が「山寺の春の夕ぐれ來て見れば入相の鐘に花ぞちりける」と歌によんだが如何にも其通で花の色鳥の聲に樂しく遊んで居る内に早くも入相の鐘が響くと花がちるあはれの深いもので有る又小侍從は人待つ夜の明の鐘は別の鷄の聲よりつらいと言つたが若い時分はさも有らう老いては寢覺の退屈さに鐘の音が却て友となるこの聞き馴れた鐘が又わが最後の別を告げる時が有るかと思ふと淋しくなつてくる。

紀の路の奥　四季の段

山寺の春の夕ぐれ來て見れば、入相の鐘の音に花ぞ散りける、散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ、よしや散らでもあだし世と、花によそへし口ずさみ、それを手本に鶯が、歌をうたへば箏ひく鳥も、聲にあはせて鼓草、手をつく〴〵しつぽ菫、つゝじ山吹色々の、花も何時しか夏山の、青葉をわけて、初音めづらし時鳥、雲井のよそにこひ慕ふ、身は卯の花の白むまで、寢ずに待つのをなぶりにくるか、槇の板戸をほと〳〵と、叩く水鷄のだましくさつたか、ゑゝしんぞ面にくや、憎いかはいの睦言を、誰にもらして名は橘の、かをりほのめく薄衣、袂涼しき秋風に、招く薄は若紫の、萩に添ふとてこぼるゝ露の、つゆのよすがを忍び寢、松蟲鈴蟲きり〴〵す、霧わたりてふ霧の間を、わけこえ來つる初雁の、翼にかけておくるふみ、見よかし見よかしもみぢ葉も、色のもなかの時雨にぬれて、龍田の河に流の身、こひぢやせくまい浮世は車、めぐる月日もふるやふる、降る雪も霜も霰も、きえてたまらぬ諸行無常のことわりを、告げてや鐘もひゞくらむ

【句義】山寺の春の夕ぐれ來て見れば入相のかねの音に花ぞちりける、新古今集の歌○散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ「散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ浮世を何か久しかるべき」といふ古歌の上の句○あだし世、あてにならない果敢ない世の中○花によそへし口ずさみ、櫻にたとへて言つた歌○それを手本に鶯が歌をうたへば、古今集の序に鶯の聲も歌で有ると言つて有る所から人が歌をよんだのを手本にして鶯も歌をうたふといつた○箏ひく鳥、鼓草、つくづくし、箏をひくやら鼓をうつやら色々の手をつくす○雲井のよそにこひ慕ふ、高く空を見て時鳥をまつ心○卯の花の白むまで、夜が明けるまでの心卯の花は白きもの○寢ずに待つ、時鳥の聲を待つこと○ま木の板戸、小さい庵の戸○たゝく、水鷄の聲が物を叩くのに似て居るのから出た言葉で水鷄の鳴くこと○えゝ、感嘆詞○しんぞ、眞に○名はたち花、浮名が立つといふのを橘に懸けた○ほのめく、ほのかに薫る○薄衣、夏の單衣で焚きしめた香のにほふ心からほのめくうす衣とつゞけた○萩に添ふとて、薄が萩に立ちならぶこと薄も萩も秋草の中で風情あるもの○つゆのよすがをしのびね、薄が萩に添つて寢るといふのから松虫鈴虫が草葉の露をたよりとして小さい聲で鳴くといふ心に懸けて有る○きりわたりてふ霧の間を、天地一面に立ちこめるといふ霧の中を○初雁、初めて來た雁○翼にかけて送る文、雁の羽根につけて文を遠くにやること支那から傳へて來た故事○色のもなかの時雨にぬれて、秋の暮紅葉の美しい盛りに時雨がふつて紅葉を散らす○こひぢやせくまい、せくは水をとめること流れる紅葉は堰き止めきれないといふことを戀路は氣を急くものでは無いといふのにかけてある○浮世は車、世の中は善い事も惡い事も順々に廻つて來ること○ふるやふる、經るを重ねて降るにつゞけた○きえてたまらぬ、端から消えて何一つ溜つて居るものは無い○諸行無常、佛經の語で世の中の物はすべて移り變つて行くこと○ことわり、道理○告げてや鐘も響くらん、諸行無常の道理を人に知らせて鐘の音が響くで有らう。

【通釋】來て見ると鐘の響に誘はれて花が散る併し散るので櫻は人にほめられるよし散らないでも世の中は果敢ないもの故何時までも有らうかと花にたとへて人の世を昔の人が歌によむだ鶯が眞似て歌ふと箏や鼓で手をつくし春は陽氣で菫

つゝじ山吹などの花が盛と思ふ間に夏となつて夜も寝ずに時鳥を待つ頃となる水鷄はなく橘は咲く秋になると薄は招く萩の露がこぼれる其下で松虫鈴虫きり〴〵すが鳴く霧か立つ雁は來る紅葉が色づく時雨で散つて龍田川に流れる世の中は廻り持で雪や霜も霰も何一つ長く世に溜つて居るものは無いこの道理を告げて鐘の音が諸行無常と響き渡る。

根岸の四季の詠

上野なる根岸の里の樂しさは、春は鶯梅櫻、つゝじ山吹咲きつれて、花に心のひまぞ無き、またある時は思ふどち、菫咲く野にうち群れて酒酌みかはし遊びつゝ、つくしたんぽや色々の、その手ずさみに菅の根の、永き春日をあかずして、詠むるぞ面白き、夏は卯の花橘の、かをる軒端を行きかへり、山時鳥音づれて、青葉を誘ふ夕風の、涼しきまゝにうち出でゝ、澤邊を行けばこゝかしこ、燃ゆる螢は須磨の浦に、あまの繩たく藻鹽火の、かげかとのみぞ思はるゝ、秋は殊更もゝ草の、花のひもとくその中に、わきてなまめく女郎花、誰を招くか花薄、思ひ亂れて咲く萩の、花の錦の床の上、さし入る月のくま無さに、訪ひ來む人も有れかしと、嵯峨のあたりを思ひ出で、しばし慰むつま箏の、調につれてなきかはす、蟲の聲さへ小夜ふけて、いとゞあはれに聞ゆなり、いつしかと、野べの千草も冬がれて、落葉ちりしき霜おき渡し、こずゑ〳〵にふる雪は、春咲く花の心地して、實に面白き風情なり

【句義】上野なる根岸の里、東京上野の山の東から北へかけての山下の地名○花に心のひまぞなき、花を見てあるくのに忙しいこと○思ふどち、氣の揃つた友達○その手ずさみ、手慰で摘草などすること○菅の根の、長の枕詞○山時鳥、たゞ時鳥といふのに同じ○海士の繩たく、漁夫が網の繩を手繰り寄せること○藻鹽火、夜網を引く時に焚く火○もゝ草、色々の草○花のひもとくその中に、花が咲く中にも○わきてなまめく、取り別けクネ〳〵して居る○思ひ亂れてさく萩、萩の亂れ咲○花の錦の床の上、萩の花が一面に咲いたのを錦の床と見立てたので有る○嵯峨のあたり、京都の嵯峨の近邊○つま箏、たゞ箏といふのに同じ。

【通釋】根岸の里の四季の景色をうつしたもので別にむづかしい所も無き故略す。

千里の梅曲

とことはに、吹かせてしがな家の風、世をへて仰ぐふみの道、廣き惠を思ふその、心盡や千里まで、にほひお

こせし梅の花、心を染むる一えだを、たゞそのまゝの手向にて、かをりも神のまに〳〵と、ゆくての袖もにほふまで、思をはこぶおもひ河、水のそこひも深緑、結ぶ手にふく春風は、今日きさらぎの神わざに、よるのつゞみのすみのぼる、眞如の月もところがら、和光のかげもいさぎよし、塵もやはらぐおん德は、代々へてたえじ四方の民、慕ひまつれやかるかやの、關もる人も有らばこそ、神のなさけは深きよの、闇にもしるき梅が香、そもこの花は萬木に、さきがけしてかばかりの、かたち色香の花無ければ、おのづからおん神も、めでさせ給ひ、花もまた、心ありけり、とび通ひ、あるじ、忘れぬいさをしを、知る人ぞ知る、言の葉の、しげき林にとりそへて、君が千歳を守るなる、君が千歳を守るなる。梅のにほひやあめにみつらむ

【句義】　とことはに吹かせてしがな家の風、拾遺集菅公の母君の歌に「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」とあるのから出た言葉で永久に家の譽を世の中に立てたいといふ心がなは希求辭〇世を經て仰ぐ文の道、代々盡きずに菅公の學問を尊ぶといふ心〇廣き惠を思ふ園、今梅園を見るにつけて神の廣い惠を思ふ〇心盡しや、悲しむこと筑紫を盡しに懸けた〇千里まで匂ひおこせし梅の花、菅公の「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじ無しとて春な忘れそ」といふ歌の言葉で京都から太宰府まで菅公の御德に感じて梅が飛んで來たこと〇心を染むる一枝、心をかけた一枝〇かをりも神のまに〳〵、古今集にある菅公の「このたびはぬさも取りあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」といふ歌の言葉で梅の香を神樣の御心任せに充分御賞美下さいといふ心〇思をはこぶ思川、前句に香を運ぶといふ心を含ませてこの句に思を運ぶと續けたのである思川は筑前國太宰府の側の川の名〇水の底ひも深緑、底深い水の色の緑〇むすぶ手にふく春風、むすぶは水を掬ふこと緑の水を結ぶといふので春風につゞけた〇きさらぎ、二月の異名〇神わざ、祭事二月の天滿宮の御祭日のこと〇夜の皷の澄みのぼる、夜神樂の音が冴え渡つて〇眞如の月も所がら、濁りなく澄み渡つた心の在狀の月も場所が場所で有るからわけてよく冴える〇和光のかげも潔よし、佛が塵の世に入り凡夫を導くことを和光同塵といつて菅公は此世に假に人となつて衆生を導かれたといふ心〇苅萱の關守る人も有らばこそ、今の太宰府南門のあたりに昔苅萱の關が有つたといふ齋明天皇新羅征伐の時筑紫に行幸せられた頃から置かれたとのこと今は其樣な關守も無いから遠慮なく參詣せよといふ心〇神のなさけは深きよの暗にもしるき梅が香、梅の香は暗にも著しいが神の惠も其通りである〇形色香の花、木振もよし色も香もよし〇御神、菅

公のこと○花もまた心ありけり、菅公が梅を御寵愛になつて梅も菅公を有り難く思ふ○飛び通ひ、菅公が筑紫に行かれた時に梅も京都から一夜の内に太宰府に行かれた是を飛梅といふ○あるじ忘れぬいさをし、菅公が京都を御出立の時御庭の梅に向つて「東風吹かば」の歌を御よみになつたのを梅が忘れなかつたこと○言の葉のしげき林にとりそへて、昔からの歌も澤山あるがこの東風吹かばの歌を取り添へて○君が千年を守るなる梅の匂やあめにみつらん、君が代を守る菅公の御寵愛の梅の匂は天地に滿ち渡るで有らう○備考　いさをしはみいさをといふ方がよい。

【通釋】　母君が「家の風をば吹かせてしがなと」歌によまれたが遂に菅公は此上なく出世されて今でも學問の神樣として尊ばれて居る其菅公が筑紫へ御出でになつた時に梅も御供をして筑紫へ行つたその梅が咲いて人の袖にまで香をうつす夫が丁度春で二月は天滿宮の御祭で有るから御神樂はあるが月もよく照るマア有り難い神樣故其上に今は苅萱の關もなし誰も參詣するがよい一體梅は一年中の萬木の魁にさいて木振も花の香もよいので菅公も御寵愛になつた花も有りがたいと思つて御供をして行つた「東風ふかば」の歌も名高いもので君が代の榮える限り梅のにほひは天地に滿ち渡るで有らう。

七卿落　　佐藤佐久作曲

世は苅菰と亂れつゝ、茜さす日もいと暗く、蟬の小川に霧立ちて、隔の雲となりにけり、あら痛しや玉きはる、内裏に明けくれ宿直せし、實美朝臣季知卿、壬生、澤、四條、東久世、其他錦の小路殿、今身は浮草の定めなき、旅にしあれば駒さへも、進みかねてはいばえつゝ、ふりしく雨の絕間なく、袖は淚にぬれ果てゝ、これより海山淺茅が原、露霜わけて葦がちる、難波の浦にやく鹽の、辛き浮世は物かはと、行かんとすれば東山、峰の秋風身にしみて、朝な夕なに聞き馴れし、妙法院の鐘の音も、今宵はさえてあはれなる、いつしかくらき雲きりを、拂ひつくして百敷の、都の月をめで見給ふらん

【句義】　七卿落、文久三年八月十八日三條實美三條西季知四條隆謌東久世通禧壬生基修錦小路賴德澤宣嘉の七卿が長門に下つた○世は苅菰と亂れつゝ、世の中は苅り取る眞菰草の亂れた樣に亂れて○茜さす、日の枕詞○日もいと暗く、世の亂れたこと○蟬の小川、京都鴨川の上の細流○きり立ちて隔の雲となりにけり、明治維新前の世の亂れて京都の騷がしかつたこと○玉きはる、内の枕詞を

こゝでは内裏の枕詞にして有る○今身は浮草の定めなき旅にしあれば、七卿が長州へ行く爲に出立された時の有狀しは強辭○いばえ、駒の嘶くこと○雨の絶間なく、涙の絶間なく○海山淺茅が原、海山野に難澁すること○芦が散る、難波の枕詞○やく鹽の、辛きの序詞○辛き浮世は物かは、國の爲を思へば世の中の艱難は物の數では無いといふことかはは反動辭○妙法院、京都の寺の名○雲きりを拂ひつくして、世の中を穩にして○都の月をめで見給ふらん、都に安心して御住みになることが出來るで有らうか。

【通釋】世が亂れて京都も騷しくなつて來た夫が爲め三條公等の七卿は御氣の毒にもいよ／＼長州へ御落ちにならねばならない事となつて難澁な旅にと御出かけになつたいよ／＼門出となれば流石に悲しくも思はれて駒も進みかねる是も國の爲とは思ふもの丶今更都の名殘が惜しまれて是から後何時世が穩になつて再都に住むことが出來るやら。

はりま八景

山田檢校作曲

今日を門出の旅の空、うかるゝ聲も播磨なる、名どころところ尋ぬれば、心ときめくながめかな、山鳥の尾上の鐘は入相の、むつまじ月のなか／＼に。ひとりねるのを花にして、その花てふも靜やかに、賤のわらべに言問へば、おのれを名のる時鳥、とび行く方は高濱の、晴るゝ嵐に誘はれて、飾磨にかへる帆はちら／＼と、夕照なゝめに高砂の、松は千年の色なほ深く、ひく人多き手がら山、落つるかりがねたつ鷺山に、つばさ交ふるそのかずは、三五中の秋月、千さとの外の人心、千々にうつろふ秋の空、別府の夜雨きく手枕に、夢も結ばぬ夜な／＼、思ひはいとゞます井山、積るが上に積る雪、是ぞまことに豐かなる、年のみつぎと知られたり、あら喜しやこの望み、たんねるもげに君が代の、なほ久方の雲のあや、五風十雨のほど／＼に、時をたがへぬ八つの景色

【句義】播磨八景、尾上の晩鐘、高濱の晴嵐、飾磨の歸帆、高砂の夕照、手柄山の落雁、鷺山の秋月、別府の夜雨、増井の暮雪○うかるゝ聲も播磨、はりまに聲を張りを懸けた旅に出て心も浮き立つこと○心ときめく、面白さに心が動く○山鳥の、尾の枕詞○尾上、播磨國の地名高砂の古地○むつまじ月。正月の異名○なか／＼、却てに夫婦中の中をかけてある○獨ぬるのを花にして、旅の獨寢を面白いことゝして○其花てふも靜やかに、其興味も靜かに○言問へば、尋ねて見ると○おのれを名のる時鳥、自分の住む播磨の國のことを語りきかせてくれ

たことを時鳥にとりなしたので有るなのるは時鳥のなくこと○飛び行く方、時鳥から飛びといつたので有るが八景見物に行くこと○高濱、地名○晴るゝ嵐、晴嵐で有るがこゝでは晴れた日の風の心になつて居る○飾磨、地名○高砂、地名○引く人多き、手を引く心で手の序詞○手柄山、播磨國三輪山の別名○たつ、鷺の序詞鳥のとび立つこと○翼まじふる其數は三五夜中の秋月、十五夜の月で羽をならべて飛ぶ鳥の數まで見えると月の明かなことを言つたので有る○千里の外の人心千々にうつろふ秋の空、月が千里の外まで照して人々の心が見る人々で色々に秋の空にうつる○別府、地名○手枕、たゞ枕と同じ手は發語○夢も結ばぬ、寝かねること○よな〳〵、毎夜○増井山、播磨國の山の名思が増すと懸けて有る○つもるが上に、思がつもる心を通はせてある○年のみつぎ、雪は豊年の兆といふ心○この望、八景見物の願○たんぬるも、足りぬるもで八景見物して滿足出來たのも○久方、雲の枕詞君が代の榮久しいといふ久しをかけてある○雲の文、空模樣○五風十雨のほどほど、五日に一日風が吹き十日に一日雨がふる程々の違はないといふことで是は聖人國を治める代の在狀○時を違へ

ぬ八つの景しよく、五風十雨でのどかな八景のながめである。

【通釋】今日いよ〳〵出立して名所々々を見てあるくことゝなつた先づ尾上の晩鐘からして睦しい中の獨寝も面白く道を百姓家の子供に尋ねるとよく敎へてくれた次には高濱の晴嵐飾磨の歸帆高砂の夕照と順々に見てあるく高砂の松は千年の綠深い色で手柄山の落雁鷺山の秋月も千里の外まで照すかと思ふ樣によく澄み渡つて見えた別府の夜雨をきくと寝られないで色々物を思ふと思ひは增す增井山の暮雪この雪は豐年のしるしで有るア、嬉しいことよ八景見物の願が滿足したのも君が代の五風十雨の時を違へない有難い御蔭で有る。

記念の歌

佐藤佐久作曲

世を靡かせしくれなゐの、豐旗雲の色褪せて、散り亂れ行く六波羅の、武運の末ぞあはれなる、やみを心と力なく、よろひかぶとの星月夜、しげき人目を忍の緒、結ぶや春の別れ霜、たゞ一時の花と見て、榮華の夢の福原や、西に傾く緋縅の、鎧の袖に一しづく、包む言葉の花の露、消えての後も是をだに、記念にのこすよしもがと、賴むは師父のみかげのみ、昨日にかはる人心、戸ざしかためし中御門の内ぞゆかしき「さゝ波や志賀の都

はあれにしを昔ながらの山櫻かな」さらばとばかり見かへれば、有りつる人は音もせで、ぬかづく門のさし柳

【句義】記念の歌、薩摩守忠度が平家の一門西海に落ちた時淀から引き返して夜五條三位俊成の門を叩き歌稿を出して後日勅選の御沙汰でも有らば必一首を出してくれと賴んで別れた其後俊成は千載集を勅選の時に「さゞ波」の歌を千載集に加へた○豐旗雲、旗の樣な雲といふ心であるがこゝでは雲の樣に世を敝つた紅旗で平家の全盛のこと○色褪せて、色がさめて衰へたこと○六波羅、京都の地名平氏の邸宅の有つた處○やみを心、世が闇になつな樣な思で○かぶとの星月夜、兜の頂を星といふので兜から星月夜とつゞけた星月夜はたゞ夜と見てよい○忍の緒、兜の內緒人目を忍とかけてある○結ぶや、忍の緒を結ぶのと霜が結ぶのと懸けてある○たゞ一時の花と見て榮華の夢、平家の全盛は一時の花の樣で夢の樣にはかなくさめた○福原、攝津國の地名平氏が遷した都○西に傾く緋縅、緋を日にかけて平氏の衰運を言つたので有る緋縅は大將の着る鎧○一しづく、隱れた涙の心○包む言葉の花の露、鎧の袖の下に持つて居た歌の詠草○記念にのこすよしもが、記念に殘す方法をほしいと賴んだこともがは希求辭○師父、五條三位俊成は忠度の歌の師であつた○昨日にかはる人心、世が騷々しくなつて來たこと○戶ざしかためし中御門、世が騷しいので嚴重に閉して居た中門を少し細めに明けて俊成が忠度に逢つたこと○さゞ波や云々、さゞ波は志賀の枕詞で志賀の都は荒れたが櫻ばかりは昔の通りで少しもかはらないといふ心の歌○有りつる人、俊成のこと○ぬかづく門のさし柳、柳か承知した樣に動いて居るさし柳はさした柳といふので有る枝垂柳と見ると益風情が多くなつてよい

【句義】世を靡せた赤旗の平氏の武運が衰へて今は闇の夜に人目を忍んで都を別れねばならなくなつた福原の都の繁昌も僅一時の花の盛で今は夢のさめた樣にははかなく沒落の時となつたせめては今生の名殘に歌一首でも殘したく思つて歌の師匠の俊成を尋ねた俊成は世が騷しいので門を堅く閉して居たが細く明けて忠度に逢つて賴まれたことを承知した忠度はさらばと別れて又名殘惜しくふり返つて見るとたゞ門の枝垂柳が物淋しく動いて居た。

八重垣

山田檢校作曲

春立つや、門は松江の若綠、雲井なゝめに白波の、なぎさによするあらち山、光のどけき日のみさき、其簸の河の流汲む、鰐が淵瀬のみてらまで、ぬかづきすぐる草枕、縫ふてふ鳥も聲匂ふ、梅の花笠ひよりがさ、櫻は物を思はする、朝な〳〵の峰の白雲、浦わにしきのひかたのかひ、名に色々を呼びたてゝ、いそなつむてふ賤の女の、つぼをりならぬつまからげ、しどけなりふりよ、その十六の島小船、のりとるわざも、手馴れて、馴れて、棹も水馴のやるせなき、浪のあらめやうちよする、餘所の見る目も何よしあしの、サヨへ。やみをぬひ〳〵飛ぶ螢、袖師が浦のもやうどり、ほんにほんにしをらしや、そめいろ〳〵の蔦紅葉、てまのせき山つひうち超えて、サヨへ、月は夜ごろに木がくれの、妻にこがるゝさを鹿の、ほんにほんにしをらしや、秋もくれ、わがの河原のわが思ひ、緣を結ぶのみやしろへ、あゆみを運び、かねて願の一すぢを、つひうち明けていうて見よかいな、人目をはぢのかたさとや、戀ひ渡るらんさたの浦、雪の笘屋に友よぶ千鳥、ちりやちり〳〵散りかゝる、吹雪を花の面白や、旅のやどりを指折れば、遙々來ぬる道しるべ、見かへる空の八雲立つ、出雲八重垣つまごめに、八重垣つくるその八重垣を、守るや神の道すぐに、いく十かへりの春やまつらん、春ぞまちぬる

【句義】 八重垣「八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を」といふ

素盞鳥尊の御歌から出た言葉で出雲國の名所をうたつたので有る○春立つや、正月になると○門は松江の若綠、松江は出雲國の地名正月の門松の若綠の心○雲井斜に白波の、雲と波との境が斜に見ゆること○荒乳山、出雲國の山の名波の荒をかけて有る○日の岬、地名のどかな日と懸けた○簸の川、肥川とも大川ともいふ川○流くむ、流の下の心○鰐が淵瀬の御寺、簸川の川下にある鰐淵寺のこと○ぬかづき過ぐる、參詣して行く○草枕、旅の枕詞で有るが旅の心にもつかふ○ぬふてふ鳥、梅の花笠縫ふといふ鳥で鶯のこと○聲にほふ、美しい聲○梅の花笠日より笠、梅の花笠は日和の笠である○櫻は物を思はする、花が咲かない内は待遠に思はせ咲けば散るかと思はせとかく人に心配させる花で有る○朝な〳〵、毎朝○峯の白雲、櫻が山で咲いたのを白雲がかゝつたのかと見る心○浦は錦のひかたの貝、前句に峰と有るからこゝに浦と言つて山水の對照となる干潟を緋形として錦につゞけ錦貝といふ赤い貝のことを言つた○名に色々を呼び立てゝ、色々の名をつけて○磯菜、海邊にある食料になる草○てふ、といふの心の助辭○壺折、昔の女の旅裝束○褄からげ、裾をからげた形○

しどけなりふり、締のない姿○その十六の島小舟、出雲國に十六島「ウツプルイ」といふところがある夫を其女は若い十六の年といふのからつゞけた○棹もみなれの、水馴棹のこと○浪のあらめ、浪の荒いを海草の名あらめにかけた○よその見る目も何よしあしの、見る目を海松藻に善惡を葦蘆にかけた○袖師が浦、出雲國の地名袖といふ言葉から模樣どりとつゞけた模樣どりは模樣の縫ひとり○しをらしや、可愛らしい○染色々の蔦紅葉、蔦紅葉の染模樣○手間の關山、馬潟瀬戸の中に有る洲に昔は關が有つたとのこと○月は夜ごろに木がくれの、月が木に隱れるといふのから木隱になく鹿へつゞけた○さを鹿、さもをも發語たゞ鹿といふのと同じ心○わがの河原、地名○緣を結ぶの御社、出雲の大社を緣結の神と世の中で言つて居る○はじの片里、殉死に代へて葬る埴輪を作る人を埴師といつて出雲に居たもので有る野見宿禰も出雲の人で有つた其埴師のすむ片田舍といふのに恥を懸けた○こひ渡るらん佐太の浦、こひ渡る沙汰が有るといふのを地名の佐太の浦にかけて有る○ちりやちりちり、千鳥の鳴く聲から雪の散るのにうつして有る○見かへる空の八雲立つ、遙々來て見かへると家路は遠く雲が立つて見える心八は發語○八雲立つ云々、素盞嗚尊の御歌○守るや神の道すぐに、直なる道を神が守るといふこと○いく十かへりの春やまつらん春ぞまちぬる、十かへりは千年のこと幾千年の春を榮えるで有らうか榮えるに違ないその榮を待つて居る。

【通釋】頃は正月綠の空と白い波との間に荒乳山が見える此方は日の岬簸の川の下に鰐淵寺こゝに參詣すると鶯はなく花はさく浦曲に出ると錦貝がある磯菜がある夫を摘む女はしどけない姿の十六位十六島では舟でよし蘆の中を分けて海苔をとつたり荒布を苅つたりして居るさまも葦の螢も模樣の樣に美しい袖師が浦又蔦紅葉のよい手間の關山を超えて來ると月はよし鹿はなく春から旅立ち名所を見物して秋もくれる頃に大社に參詣することゝなつたこゝの御社は緣結の神樣はじの片里も佐太の浦も見て來ると苫ぶきの漁師の家に雪のふる頃となつた千鳥も啼く吹雪が花と見えて面白い遙々とかうして來て見かへると出て來た方には雲が立つて居て素盞嗚尊樣の八雲立つの御歌が思ひ出されるあゝ面白かつたかうして又來る春をまたう。

櫻狩

山田撿校作曲

のどかなる、衣きさらぎおしなへて、見渡す山もうちけぶり、柳の糸のあさ緑、春の錦かあやなくも、都に知らぬ白雲の、たてるやしるべ櫻狩、人の心もあこがるゝ、空を見捨てゝ越路には、待つらんものをゆく雁の、かをるかをる、つばさは雲に消え、聲はあはれに聞ゆなり、行方したひて立ちどまり、名殘はしばし忘れねど、初花車めぐる日の、ながえつらねて見ずも有らず。見もせぬ人や花のとも、知るも知らぬも花のかげ、あひやどりして菅の根の、長き春日もいたづらに、日數すごして花衣、なれしたもとも香にそみて、野べも山べも花ゆゑに、いたらぬくまは無けれども、山の、山の岩根をとめて落つる、千すぢ百すぢ佐保姫の、手引の糸のたきなくば、手折りて行かん、入相の、鐘より先に春がすみ、立ちなかくしそ風は吹くとも。

【句義】ころもきさらぎ、きさらぎは二月の異名頃も二月を衣を着にかけた○うちけぶり、草木の芽の出る在狀○春の錦、花は赤く柳は綠で美しいこと古今集の「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」といふ歌から出た言葉○あやなくも、わけは判からないがの心錦からあやとつゞけた○白雲の立てるやしるべ、白雲がかゝつて居るのを目あてにして花見にゆく花が咲いて白雲と見えるから言ふので有る○櫻狩、櫻ぐらしで花見のこと○あこがる、、浮かれて落ちつかないこと○越路、越前越中越後の方面○待つらんものを、待つて居るで有らうと雁は歸つて行く○かをるつばさ、花の香が雁の羽にまでかをる○雲に消え、雁が遠くなること○初花車、花を一輪二輪などといふ樣に車に見立てた心を花見車に懸けて有る○めぐる日、花見に廻り〳〵て○轅つらねて、花見車をならべて○見ずも有らず見もせぬ人や花の友、よく知らない人でも花見の友になること古今集の「見ずもあらず見もせぬ人のこひしくばあやなく今日やながめ暮さん」といふ歌から出た言葉○菅の根、長の枕詞○なれしたもと、着馴れた着物○岩根、岩といふに同じ○とめて落つる、傳はつて落ちる○佐保姫、春の山の神○手引の糸、瀧の水の美しきを糸にたとへたので有る○手折りて行かん、瀧が無ければ花を折らうものを古今集の「岩ばしる瀧なくもがな櫻花手折りてもこん見ぬ人のため」といふ歌から出た言葉○立ちなかくしそ、霞よ花を立ち隱すな○そは淸みて讀むのであるぞでは無い○風は吹くとも、風は花を散らしてもよい程にかくすな。

【通釋】春の初二月になると山の草木も芽を出しはじめ花は紅に柳は綠で錦の樣に

美しいよくは判からないが白雲の樣に見えるのを花の目標として尋ねてあるく其頃雁は越路に歸つて行く其聲があはれに聞えて名殘は盡きないがいよ〳〵花が咲き初めたとなれば毎日車をつらねて互に知らない人まで花見の友となつて長い春の日を花の香が着物にしみるまで見あるいて行かない處も無い瀧さへ無ければ山の櫻を一枝折つて土產に持つて行きたいがもう日が暮れるか日が暮れない內は霞よ花をかくすのでは無いぞよしや風は立つかも知れないが。

都路

都路は、五十路あまりに三つの宿、時得て咲くや江戶の花、浪靜かなる品川や、やがてこえくる川崎の、軒端ならぶる神奈川は、はや程が谷の程もなく、暮れて戶塚に宿るらん、紫匂ふ藤澤の、野もせにつゞく平塚も、元のあはれは大磯か、蛙なくなる小田原は、箱根をこえて伊豆の海、三島の里の神垣や、宿は沼津のまこも草、さらでも原の露拂ふ、富士のね近き吉原と、共に語らん蒲原や、やすらふ由井の宿なるを、思ひ興津にやく塩の、後は江尻の朝ぼらけ、今日は駿河の府中行く、暮にかずある鞠子とは、渡る岡部の蔦の道、千歲の松の藤枝よ、よしや島田の大井河、渡る思ひは金谷とて、照す光は日阪に、賑はふ里の掛川と、とけて袋井吹く風の、のぼる見附の八幡とは、濱松か枝の年久し、時雨の頃も舞阪を、遠近すぐる荒井の磯、袖に淚の白須賀も、元より名のみ二川や、浦吹く風の吉田こそ、夫と知られし御油の里、とけにし花も赤阪の、野田にやまさる富士川を、岡崎の宿いかならん、結ぶ池鯉鮒の假の夢、さむる波間の鳴海潟、たゞこゝもとに熱田の宮、八十うち渡す桑名の海、道の行くへは四日市、誓もかたき石藥師、しやうののやどり是ぞとよ、齡久しさ龜山と、止まる人なき關ならし、賤が家ならぶ阪の下、たれ土山に座せしめん、むれたる露も水口に、濁らぬ末の石部かな、野邊は綠の草津わけ、げにも守の大津とは、花の錦の九重に、心うき立つ都ぞと、君のことぶき祝ひたりけり

【句義】　五十路あまりに三つの宿、東海道五十三次のこと○野もせにつゞく、野の先につゞく平塚○三島の里の神垣、伊豆國三島の大社○富士の根近き、富士山に近い根は嶺に同じ○岡部の蔦の道、つたの細道といふ紅葉の名所が鞠子と岡部との間にある○島田、島田髷の娘にかけた○見附の八幡、遠江國見附の町にある八幡社○吉田、今の三河國豐橋市○野田にやまさる富士川、富士川は吉原と蒲原との間にある川こゝにあるのは誤で有る○ちかひもかたき石藥師、石とあるから堅きといひ藥師とあるから衆生を救ふ誓も堅いとつゞけたので有る○庄野の宿、石藥師に有つた昔の驛○關ならし、關で有らうの心ならじと濁つては惡い○むれたる露も水口に、露集つて水口から流れ出すこと。

【通釋】 夫々地名を飾つて東海道五十三次をならべたので有る。

那須野

山田撿校作曲

ふくろうしやけいの枝になきつれ、蘭菊の花にかくるゝ野狐の臥しど、蟲の聲さへわかちなく、荻吹き送る夜嵐に、いと物すごきけしきかな、野べの狐火思ひにもゆる、燃ゆる思にこがれて出でし、玉藻の前、萩の下露いとひなく、月にそむけて恨言、過ぎし雲井にありし時、君が情にいく年も、比翼の床に鴛鴦の、衾かさねて契りしことも、胸にしばしも忘れはやらで、獨涙にかこち草、ぬれてしをるゝ袖の雨、抑われこそは天竺にて、斑足太子のつかのかみ、もろこしにては褒似とよばれ、日の本にては鳥羽の帝に宮づかへ、玉藻前となりたるなり、清涼殿の御遊の時、月まだ出でぬ宵のそら、細砂ふきこし風もつれ、燈消えしその時に、わが身より光を放ちて照すにぞ、君は御脳となりたまふ、桐の一葉に秋立ちて、昨日にかはる飛鳥川、今は浮世をかくれ笠、都をあとに見なしつゝ、關の白川よそになし、那須野の原に住み馴れて、つひに矢先にはかなくも、かゝる此身ぞつらかりき、殺生石と世の人に、疎まるゝことゝなりはてし、涙の霰荻すゝき、振り亂したるありさまに、消えてはかなくなりにけり

【句義】 梟しやけいの枝になきつれ蘭菊の花に隠るゝ野狐のふしど、木の枝には梟が鳴く花の間には狐が隠れて居ると那須野の物凄い有狀で白樂天の詩の「梟松桂の枝に鳴き狐蘭菊の叢に藏る」といふのから出た○荻、薄の大きな様なもので風が渡ると淋しい音を立てる草○思にもゆる、おもひのひを火に取りなして煩脳の火に燃える心煩悶すること○こがれ出てし玉藻前、落ち付いて居られないで玉藻前の姿が顯はれ出た○萩の下露厭ひなく月にそむけて恨言、月夜に萩の上にボッと見えた姿○雲井にありし時　玉藻前が鳥羽の帝の御寵愛を受けたと○比翼の床に鴛鴦の衾重ねて契りしことも、夫婦仲のよいこと比翼は翼をならべる鳥で玄宗皇帝か楊貴妃に仰せられた言葉の中の一語○かこち草、愚痴の言ひぐさ○斑足太子の墳の神、斑足太子は天竺天羅國王の子で千人の首を集めて塚の神を祭つた惡虐な人○もろこし、支那○褒似、周の幽王褒似の笑顏を見る爲に烽火をあげて諸侯を集めた諸侯火を見て大事と思ひ急いで集まつたが王の戯で有つたこの後敵が來た時に火を擧げたが一人の集るものなく周は亡びた○清涼殿、天子の常の御座所○御遊、管絃の御遊○御脳、天子の御病氣○桐の一葉に秋立ちて、秋になると間もなく桐の一葉がこぼれるもので間も無く世が變つての心○あすか川、大和國にある川の名古今集に「世の中は何か常なる飛

烏川昨日の淵ぞ今日は瀨になる」と有つてかはり易い例に引かれる川○かくれ笠、笠に顏をかくす心で零落のさま○關の白河よそになし、京を白河越から出て都をあとにすること○那須野、下野國にある○矢先にはかなくも、三浦介と千葉介とに九尾狐が射止められ其靈が殺生石となつたとの事○涙の霰、涙が霰の樣にこぼれる○荻薄ふりみだしたる有狀、髮を荻か薄の樣にふり亂した玉藻前の物凄い形。

【通釋】是は謠曲の殺生石から出たもので枝の上には梟が鳴く草の中には狐が藏れて居る狐火は燃えるしかも月夜の萩の上にボツと玉藻前が浮き出て恨をのべる夫を聞くと我は昔は天竺では斑足太子の妃となり支那では周の幽王の代に褒似となつて顯はれ日本では鳥羽帝の御代に玉藻前となつたが淸涼殿の御遊の時に我身から光がさしたので帝が御病氣となりわが本性を安倍泰成に見あらはされ祈り伏せられて遂にこの那須野に來たところを三浦介千葉介に射とめられて殺生石となり人にきらはれる身の上となつてしまつた思へば情ない〳〵といふかと見る間に姿は消えてしまつた

七福神

中能島松聲作曲

八雲たつ出雲八重垣神遊び、天の逆鉾手にとりあげて、四方をきつと見開くは、是ぞ惡魔を毘沙門天と、威勢をはつて座し玉ふ、傍にならびし福祿壽、長き頭を振り立てゝ、福はこちらへ祿は又、御はらの中へたつぷりと、壽を萬歳に千代八千代、團扇をあげて招きける、やよ待ち玉へ我こそは、混沌未分の初より、何くれとなく骨折りて、億萬歳を經たればこそ、今では樂な隱居株、是ぞまことの壽老人、布袋は腹をかゝへつゝ、高らかにこそ笑ひけれ、かゝる所へ惠比壽三郎、漁の獲物の生鯛を、小側にかゝへて入り給ふ、大黑天にはいきせきと、小槌ふり〳〵米俵、御初穗なりと捧げつゝ、後につゞいて辨才天女、秘藏の琵琶を手に持ちて、靜々入り來る折しもよけれ、誠に今日は神遊び、粋も不粋も世の中の、縁を結ぶの御酒盛、酒は三久松の尾で、賓の船は朝夕に、入り來る福は小網町、其川通り名も高し、きほひは魚河岸四日市、勇む新場や茅場町、鎧の渡兜岩、花の江戸橋横に見て、ちよつと小舟で米がしの、運はよし町小あがりも、心嬉しい團扇河岸、新材木の屋造に、鶴と龜との盃も、數献まゐれば八百萬、御神も一しほ機嫌よく、鈴を振り〳〵拍子を揃へて、舞をまひ〳〵調子を揃へて、手を打ちしめます腹皷、其音も冴えてこの家の內、幾代かはらぬ繁昌は、實に神國の福のたね、目出度祝ひ納めけり、目出度祝ひ納めけり

【句義】八雲たつ出雲八重垣、神遊の序詞素盞嗚尊の「八雲たつ出雲八重垣妻ごめ

に八重垣つくる其八重垣を」といふ歌から出た言葉○天の逆鉾、霧島山にある天孫降臨の時の鉾で有るがこゝでは毘沙門天の鉾のことになつて居る○悪魔をびしや門天、悪魔をビシヤンと押し壓す心にかけてある毘沙門は天竺の福徳の神○福祿壽、天南星の化身で福祿壽の神○混沌未分の初、天地開け初めの時から○壽老人、壽星の化身壽命の神○布袋、慈愛に富みたる支那の和尚○惠比壽三郎、攝津國西宮に祀つてある神で伊弉諾神の第三子で有るところから三郎といはれるので有る○大黑天、天竺の厨の神で厨を豐にする神○辦才天女、天竺の女神で知惠辯舌の神○三久、東京本所に有つたといふ三河屋久七といふ酒屋の名○松の尾、酒の銘○小網町、魚河岸、四日市、新場　茅塲町　米河岸　芳町　團扇河岸、新材木、みな東京市内日本橋から神田へかけての町名地名○鎧の渡、上に同じ此處は昔武藏野時代には大きな渡で有つたとのこと今は橋になつて居る兜町の名の起りのもとで有る其岩のところが今は祉になつて居る。

【通釋】初に七福神を擧げて神遊の面白さをあらはし夫から日本橋神田の地名を祝ひ込み酒宴の陽氣なところをうつして祝ひ納めてある。

中　手事物並に京風物

蝶の夢

春の日の、長きは夢のうちなれや、つがひはなれぬ蝶々の、行きては歸り歸りては、花の臺に羽を休め、そよ吹く風に誘はれて、散るは櫻の木の間より、一ふしうたふ鶯の、みな是花のつまぞかし、都に近き石山の、月の出しほと諸共に、いそ打つ波の千代の聲、秋は夜毎に通ひ來て、文の數々雲井路に、かきつくしけんかりがねの、越路にかへる頃なれや、花もちり〳〵入る日の鐘も、響のどけき四方の海、國も治まる四方のめでたさ

【句義】長きは夢の内なれや、夢ではないか知らんの心餘りに日が長いのでかふ言つたので有る○みな是花の妻、蝶も鶯も花にとまるから花の妻で有る○文字の數々雲井路に、雁の並び飛ふ形が文字に似て居ること○花も散り〳〵、花が散るのと夕方になつて花見の人が散り〳〵に歸るのとに懸けた。

【通釋】春の日は長閑で夢では無いかと思はれる蝶々が花の上を行つたり來たり止つたりヒラ〳〵散る櫻の木の間に鶯もうたふ蝶も鶯も花の妻で有る又秋は石山

の月がよい湖水の波は千代の聲に響く其處へ通つて來た雁は花が咲くと北の國へ歸つて花もちる人も歸る入相の鐘の響も長閑に海も國も治る御代はめでたい

豐年獅子　加藤壽岳作曲

笹の葉に、雪ふりつもる冬の夜に、雪ふりつもる冬の夜に、豐の遊をするがたのしさ

【通釋】豐年祝の獅子舞の心で雪は豐年の兆といはれて居る其雪が笹の葉につもる冬の夜豐年祝の宴樂をするのが樂しい(是は神樂歌)。

深夜の月

山のはに一つら見ゆる初雁の、聲も淋しくいたづらに、あだし言葉の人心、飽かぬ別の悲しさは、夢うつゝにもその人の、知らぬ思の涙川、うつす姿やかねの音に、空とぶ鳥の影なれや、それならで、戀しき人は荒き風、うき身に通るはげしさは、君に恨は無きものを、小萩における白露の、碎けて落つる袖たもと、思ふ心のたえ〴〵に、蟲の聲々さえ渡る、鳴く音ふけゆく秋の夜の月

【句義】一つら、雁の一列○いたづら、無益のこと○あだし言葉、淺はかなあてにならぬ言葉○涙川、涙の多きことを川にたとへた○空とぶ鳥の影、鳥のかげが障子にうつると人が來るといふ諺の心。

【通釋】山をながめて約束した人が來るかと待つて居ると初雁が淋しい聲で鳴いて行くばかりで人は來ない人の言葉はあてにならないもの又來た人に別れる時の悲しさは夢かうつゝの樣で先の人は知るまいが自分は涙が川となる程である其內に明の鐘が聞える鳥が空をとぶ其鳥の影が涙の川に姿がうつる樣にうつればよいがさうは行かないで戀しく思ふ人は憂いつらい身に荒い風がはげしく當る樣に中々來てくれないさうかと言つて其方に恨は言はないがたゞ萩の露が碎けて落ちる樣に涙が袖にこぼれてはてては戀しく思ふ心も疲れて來ると虫の聲までたえ〴〵になつて月も一層身にしみ〴〵とあはれに眺められる。

紅葉狩　加藤壽岳作曲

下紅葉、夜の間の露や染めつらん、あしたの原は昨日より、色深きくれなゐを、わけ行く方の山深み、實にや谷川に、風のかけたるしがらみは、流もあへぬ紅葉ばを、渡らば錦中絶えんと、まづ木の本に立ちよりて、四

方の梢をながめて、しばらく休み給へや

【句義】あしたの原、地名に朝の原の見渡の心を懸けてある〇風のかけたるしがらみ、紅葉が散つて川へつかへて水を止める程になること古今集の「山川に風のかけたるしがらみは流もあへぬ紅葉なりけり」といふ歌から出た言葉〇渡らば錦中やたえなむ、紅葉が絶間なく散つて流れて川の錦の様なのをもし渡れば錦の中を絶つ様なもので有るの心古今集の「立田川紅葉乱れて流るめり渡らば錦中やたえなむ」といふ歌から出た。

【通釋】謠曲の一節で今朝見ると昨日より紅葉の色がよくなつた下の方まで色づくのを見ると夜の間の露が染めたものと見える奥山へ段々分けて見に行くと谷川には流れ切れないでしがらみとなつて居るこゝを渡れば錦を切る様なもので惜しくてとても渡られないまづ木の下で眺めてしばらく休みませうか。

御山獅子

神路山昔にかはらぬ杉の枝、萱の御屋根に五色の玉も、光をてらす朝日山、清き流の五十鈴川、御裳濯川の星の網、宇治の里ぞと見渡せば、頃は彌生の賑しき、かどにさゝ立て鈴の音、獅子の舞ぞとうたひつる、山をこしたる小田の橋、岩戸の前に神樂を奏し、二見の浦の朝景色、岩間によどむ藻しほ草、關寺の夕げしき、野べの螢や美女の遊、うかれて汲むや杯の、はやはと口にもみぢ葉の、そめて樂しむおい人の、淺間山、ながめもまさる奥の院、晴れ渡りたる富士の白雪

【句義】御山獅子、伊勢の御山の獅子舞の心〇神路山、伊勢の内宮を圍みたる山の名山内老杉多し〇萱の御屋根に五色の玉、内宮の宮造〇朝日山、神路山の別名〇五十鈴川、神路山から出て伊勢海に入る川〇御裳濯川、五十鈴川の別名〇星の網、山を朝日といふのに對して川の波の綾のきら〳〵光るところを星の網と形容したので有る〇宇治の里、神宮の所在地〇彌生、三月の異名〇小田の橋、二見浦に行く道の橋〇岩戸、二見浦の二つ石のこと〇藻鹽草、二見浦にある海草〇關寺、渡會郡岡本町の世義寺のことで有らう〇美女の遊、伊勢音頭のこと〇鳩口に紅葉ばの、盃に口をつけて顔が赤くなること〇淺間山、伊勢志摩國境の朝熊岳のこと醉の淺いを淺間に懸けた〇奥の院、朝熊岳の金剛證寺のことで弘法大師の中興とのこと此處へ登ると富士の山もよく見える。

【通釋】　神路山は昔のまゝで杉は繁つて萱の屋根に五色の玉は光つて居る五十鈴川の流も淸らかで頃は三月とて門每に笹を立て鈴をふりつゝ獅子舞をまふ山を越えて小田の橋を渡つて岩戸の前で神樂をあげる二見の浦はよい景色のところで藻鹽草も見える關寺もよいところ螢もよし伊勢音頭に浮かれて盃に口をつけて顏は少し赤くなる淺間の山の奧の院は富士の白雪も見えてよいところで有る。

垣の夕顏

佐藤左久作曲

忍び車の下すだれ、ほの〴〵匂ふたそがれの、空目あらぬ小柴垣、ひも夕顏の花葛、かゝるなさけもあだなれや、生者必滅會者定離、なり出づる身を誰が世にか、惜げに人のいひけちて、露のゆかりもくち惜しの、契と人にいはるらん

【句義】　忍び車、源氏が五條の夕顏の宿に忍びやかに尋ねられた時の車〇下すだれ、車にかけてある簾〇空目、見損なひであるかさうでは無い〇小柴垣、小さな生垣〇花葛、花の蔓で次のかゝるへ懸けてある〇生者必滅會者定離、生れたものは必死ぬ會つたものは必離れるといふ心の佛敎の語〇なり出づる身、出世した身を夕顏の實がなり出づるに通はせてある〇いひ消ちて、言ひ消しててで惡くいふこと。

【通釋】　夕顏の咲いて居る小柴垣の宿に夕方忍車が來て其車の中からちらと見付けたのは空目で有らうか空目で無いこゝに美しい人が居て源氏が通つて來て情をかけたが夫が淺はかな契で間もなく女は死んでしまつた源氏に引かれて出世したものを誰かが言ひ消して露の樣なはかない緣で口惜しいと人に言はれるで有らうよ是は源氏物語夕顏の卷の心。

八千代獅子

何時までもかはらぬ御代にあひ竹の、世々は幾千代八千代ふる、雪ぞかゝれる松の二葉に、雪ぞかゝれる松の二葉に

【句義】　あひ竹、笙の管笛を二本以上合せて吹くこと合竹に御代に逢ひと懸けた〇世を竹の節に懸けた。

【通釋】　何時までもかはらない御代でめでたい竹にも松にも豐年の兆の雪がふりか

ゝる。

有明の梅

佐藤左久作曲

月夜には、夫とも見えぬ花の香を、尋ね〳〵て春の野に、つひ夜を明し曙の、空もかすみて紫の、袖まだ寒き朝風に、あつらへつくる鶯の、聲する方に來て見れば、空もうらゝに香も高く、咲き亂れたる梅の花、かをりは袖にとゞめても、猶あこがるゝ花の色を、見つゝ飽かねば一枝と、野末の梅を手折りつるかな

【句義】 月夜には夫とも見えぬ花の香、月の光で梅の花の白いのがよく見わけられないが香がしるしになる古今集の「月夜には夫とも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける」といふ歌の心○紫の空の紫色と衣の色の紫とに懸けて有る○あつらへつくる、風にあつらへて傳へさせてよこした鶯の聲○あこがるゝ、梅を慕ふ心。

【通釋】 月夜には香でわかると言はれた梅を尋ね〳〵て夜を明し朝は朝風が持つて來る鶯の音に誘はれて出て見ると空ものどかに梅も香が高く咲き亂れて居る香は袖にもうつつたがまだ飽き足りないから一枝を折つて歸つて來た。

椿づくし

洲濵作歌
松島檢校作曲

つら〳〵椿春秋の、名は千里まで鷹が峰、その本阿彌の花の色、しろきを後のうつしゑも、如何で及ばん妙蓮寺、薄くれなゐに濃きべには、同じ花形の因幡堂、まだきにしをりの秋の山、さが初嵐身にしみて、つゆ時雨ふる頃よりも、すきもてあそぶ埋火の、春にうつれば天が下、賑ふ民の煙たつ、是は塩がま千賀の浦、しほくむ海人の腰みのゝ、あづまからげやあづまおや、清洲の里のちりつばき、咲きものこさぬ角のくら、數の中なるかうのもの、もくあんわびすけ唐椿、八千代つきせぬ花の數

【句義】 つら〳〵椿、つる〳〵椿で葉の色が美しい椿の心で椿をほめた言葉○鷹が峯、鷹に高を懸けてある京都の北に有る山で本阿彌光悦が徳川家から此處に邸宅をいたゞいて居り晩年草木の花を畫くのを樂にして世を送つた○白きを後のうつしゑも、論語に繪事は素より後にすといふ語がある繪は白い處へ書くのである○妙蓮寺、因幡堂、嵯峨、初嵐、埋火、鹽竈、角の倉、かうのもの、木庵、佗助、唐椿、以上みな椿の銘○まだきにしをりの山、最早草木がしをれる秋の山の心しをりは絞に懸け秋の山は椿の銘合の山に懸けた○賑ふ民の煙たつ、仁

德天皇の故事○千賀の浦、陸前國松島の海岸○あづまからげ、裾の端打り方○清洲の里、尾張國の地名清い砂にかけて有る○ちり椿、落椿○咲きものこさぬ角の倉、角までみんな咲いた。

【通釋】椿はよいもの本阿彌が上手に畫いた繪よりも美しい妙蓮寺も因幡堂もよい花早くも秋になつて草木はしをれ初嵐が身にしみて時雨の頃から炬燵に寄る樣になつて春になると又世の中が賑しくなつて民の竈からも煙が立つ煙が立つのは鹽竈で千賀の浦では海人が潮を汲む吾妻からげに裾をからげてさ綺麗な砂の上に散つた椿の風情も面白いもの今は隅々まで椿が咲いて藪の中にもかうのものや木庵侘助唐椿と榮が八千代に盡きない樣に數へてつきない椿の花の種類の多いことよ。

有明

佐藤左久作曲

秋の夜の、更け行く庭の淺茅生に、君まつ蟲の聲しげし、一夜も千夜とたのみこし、今宵ながらも、短くて明方近くなる程に、別を告ぐる鳥がねの、聞えぬ先に小夜ぶすま、拂ひもあへぬ露けさに、別れていにし其人の、影やいづくと見送れば、夫と姿は白つゆの、露の命のきゆるまで、浮世はいとゞ曉の、あかぬ名殘は有明の、月の影のみ恨めしきかな

【句義】淺茅生、草原のこと○君まつ虫、松に待を懸けた○一夜も千夜とたのみこし、一日逢はざれば千秋の如しといふ心で一夜に千夜の價値が有ると頼みにして居たが○小夜ぶすま拂ひもあへぬ露けさ、別を悲しく思ふ涙が衾にかゝつて拂ひ切れない○白つゆ、知らぬを懸けた○露の命のきゆるまで、露の樣にはかないこの命が消えさうに悲しい。

【通釋】秋の野にさへ君をまつ松虫の聲がしげい一夜を千夜の思でたのみにして來たのが逢ふと短くてすぐ夜が明ける夫が悲しくて別れない先から涙が拂ひ切れぬいよ〳〵別れて出て行く人の跡を見送ると命も消える樣に悲しい世の中に曉の別の時の月ほど恨めしいものはあるまい。

浪花獅子

君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで、たち並ぶやつをの椿八重櫻共に八千代の春

に逢はまし、高き屋にのぼりて見れば煙立つ民の竈は賑ひにけり

【句義】　さゞれ石、小石○いはほ、岩といふのに同じ○苔のむす、苔のはえること○やつを、山の尾高く長く延びたところ○逢はまし、逢ふで有らう。

【通釋】　古今集新古今集の歌三首を合せたもので一は君が代は小さい石が集まつて岩となつて夫に苔がはえるまで千代も八千代も御榮になるで有らう、二は立ちならぶ御二方は椿と八重櫻の様に御揃で八千代の春にまで御繁昌なさるで有らう、三は高い處に御上りになつて國見を遊ばすと民の竈から豐かに煙が上る様になつた、この終の歌は仁徳天皇の御製で（暫新古今集のまゝに）仁徳天皇は浪花に都を置かれたからこの歌を浪花獅子と名づけたので有る。

この心

佐藤左久作曲

この心、誰にかたらん片糸の、結ぶえにしも黒髪の、ながき別にならんとは、神ならぬ身の知るよしも、あらぬ浦わになぎさ漕ぐ、あまの小舟の舵をたえ、よるべも波の今はたゞ、この世に有らぬなき人の、わすれがたみはみちのくの、みゆきのそこに生ふといふ、けがれに染まる姫百合の、八重の汐路にこぎなれて、心づくしに咲く花の、かをりやいづと千早ふる、神々かけて祈りつゝ、問ふ人もなき柴の戸に、手植の松を友として、花の曙月の夜半

【句義】　片糸、語りがたいをかけて有る○黒髪、長の序詞○とは、反語ならうとは知らなかつたの心○舵を絶え、途方にくれる○よるべも波、たよりも無いを波にかけた○此世に有らぬなき人、昔は時めいた立派な人だが今はどうしたかことによると亡い人になつて居るかも知れぬ人○忘れがたみ、殘して置いた一人子○みちのく、陸奥で有るがこゝでは廣く東國と見てよい○みゆきの底、雪の中○姫百合、一人子が女で有つたのを百合にたとへた○八重の汐路にこぎ馴れて、百合の花から八重とつゞけ夫から旅から旅へと苦勞することにつゞけてある○心づくし、心勞を筑紫にかけた○薫やいづと、花が咲く様に父に逢つて喜ばしい日が有るかと○千早振、神の枕詞○問ふ人もなき柴の戸、父の筑紫での侘住居のさま柴の戸は山の住居のこと○花の曙月の夜半、花に明し月に暮す年を送ること。

【通釋】　この今の心を誰に語らうか語る人もない其かみ一度結んだ縁も思はぬ別と

なつて其後どうなつたことかことによると今は世に居られないかも知れぬがこゝに一人のわすれがたみの娘がある其娘は今は東國に居るが一度父を尋ねて見たいといふので旅を重ねて九州へまでも行つた父親は問ふ人もない山奥に手植の松を友として花に月にわびしく世を送つて居るは景清で有らう。

松づくし

松は常磐の深緑、惠の風を松島に、浪の花さくいその松、長閑に春もかすみつゝ、さゞ波かゝる志賀の松、土もさけぬる夏の日に、見るも涼しや白雪の、富士のにつゞく三保の松、葉つきもいつか初瀬山、雲井にさゆる月影も、夜すがらやどれや峰の松、末の松山行く末までも、色かへぬみさをの松、あられみぞれの浪こえて、空にも通へ橋立の松、まだ色々のことほぎや、老松若松姫小松、あこやの松のみかげを頼み、千代萬代もいきの松

【句義】惠の風を松嶋、松に待をかけて有る君の徳を風とし民を草として民が君の惠を待つといふ心松島は陸前國にある松の名所○さゞ波、小さい波○志賀の松、近江國唐崎の松○富士野につゞく三保の松、駿河國の三保の松原が富士の裾野から續いた樣に見える○葉月、八月の異名○初瀬山、大和國にある八月も果つをはつに懸けた○夜すがら、終夜○末の松山、陸奥國にある山古今集に「君をおきてあだし心をわれもたば末の松山波もこえなん」といふ歌があるので色かへぬ操の松とつゞけたのである○霰霙の波こえて、あられみぞれの冬にも緑をかへないでの心○空にも通へ、天の橋立の松の末が天につゞいて居る樣に見える景色○橋立の松、丹後國にある名所○ことほき、めでたい言葉○あこやの松、陸前國にあるがこゝはこやの松で有らうはこやの松といへば藐姑射の山の松で仙洞御所の御庭の松のことゝなる藐姑射の山は仙人の捿む山となつて居る○いきの松、長生の心に通つて居る生の松原は筑前國にある神功皇后が三韓征伐の時松の枝を折つて地に挿したのが生き返つて芽が出て來たといふめでたい松である。

【通釋】松はめでたいものでまづ松嶋の松には浪の花がさく春の志賀の松は波にまで映つて長閑である富士野につゞく三保の松は夏見ても涼しく思ばれる初瀬山の松に月が宿つた景色もよい末の松山の松は操の松で天の橋立の松は天に通ふ橋の樣に見える老松若松姫小松はこやの松の蔭をたのみにして千年も万年もい

きの松といふ様に長生をしたい。

秋夜

佐藤左久作曲

秋の夜の、すむや月かげながめつゝ、端居しせれば庭の面の、なく蟲の音も身にしみて、物のあはれも知られけり、今年の秋は如何にして、かくも哀に思ふらん、思ひ出づれば去年の秋、月の光の清き夜や、よのかくれがの伏庵に、君とかなでし袖の露、露けき袖も今ははや、わが身の上となりにけり、たゞその折のつま音が、なほも心に殘るなり、あだには物は思はじな、君が手なれの玉の箏、今宵はせめてとり出でゝ、涙にくもる空の月、うちながめてはかなでつゝ、あはれ慰むよすがとやせん

【句義】　端居しせれば、端居をして居れば○ふせ庵、小さい庵○つま音、箏の音○かなで、かき撫でゝ箏を彈くこと○よすが、たより。

【通釋】　椽側近く出て月を見て居ると虫の音も身にしみじ〲とすべての物が哀に思はれて來る今年の秋はどうしてこんなに哀に思はれるのかと考へて見ると去年の秋月のよい夜世の中を逃れて來てこの伏庵で君と一緒に箏を調べて涙をこぼしたことが今は自身一人で涙をこぼす秋となつた去年の其時の箏の音が今なほ耳に殘つて居るアヽむだに物を思ふまい今宵は君が手に馴れた箏を取り出して涙にくもる月に向つて調べてせめては慰めるたよりにでもしやうか。

玉川

山城の、井出や見ましと駒とめて、猶水かはん山吹の、花の露そふ春もくれ、夏來にけらし見渡せば、浪のしがらみかけてけり、卯の花咲ける津の國の、里に月日を送るまに、いつしか秋に近江なる、野路には人の明日も來む、今をさかりの萩こえて、色ある波にやどりにし、月のみそらの冬深み、雪げ催す夕ざれば、鹽風こしてみちのくの、野田に千鳥の聲淋し、ゆかし名だゝる武藏野に、さらす、さらす手づくりさら〲と、昔の人のこひしきに、今はたそひて奥山の、其流をば忘れても、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の水までも、名に流れたる六つの玉川

【句義】　玉川、井出玉川（山城）津國玉川（攝津）野路玉川（近江）野田玉川（陸奥）武藏玉川（武藏）高野玉川（紀伊）是を六つ玉川といふ○見まし、見ませう山吹の花の露そふ春、山吹の花に露おく美しい春○井出玉川の歌新古今集に「駒とめていざ水かはんや山吹の花の露そふ井出の玉川」○來にけらし、來たさうならしは推定辭○浪のしがらみ、浪の白いのがしがらみと見える其様に卯の花が見えるこ

と〇津國玉川の歌千載集に「松風の音だに秋は淋しきに衣うつなり玉川の里」〇近江、逢ふを懸けた〇野路、野路の玉川に野の心をも懸けた〇色ある波、萩の靡く狀を浪に見たてた〇野路玉川の歌千載集に「あすも來ん野路の玉川萩こえて色なる波に月やどりけり」〇夕ざれば、夕方になると〇みちのく、陸奥國のこと〇野田玉川の歌新古今集に「夕ざれば潮風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり」〇ゆかし名だゝる武藏野、武藏野には紫といふ草が有つて紫をゆかりの色ともいひゆかりゆかしいといふので名高い武藏野といふ心〇手づくり、晒す白木綿〇武藏玉川の歌拾遺集に「玉川にさらす手づくりさら〳〵に昔の人のこひしきやなぞ」〇高野玉川の歌風雅集に「忘れては汲みもやすらん旅人の高野の奥の玉川の水」是は弘法大師がこの山に毒虫多き故水を飲まぬ樣に教へた歌であるとのこと。

【通釋】六つ玉川の歌をつなぎ合せたのである。

越後獅子（舊）

越路がた、おくに名物さま〴〵なれど、田舍なまりの片言まじり、白うさぎなる言の葉の、面白がらせそなこと、直井の浦の海人の子が、七つか八つ目うなぎまで、うむやあみそのつなでとは、戀の心も米山の、とほき浮氣で黃蓮の、何いとひ川糸魚の、もつれもつるゝ草うらに、油漆と交はりて、末待山の白布の、ちゞみは肌のどこやらが、見えすく國の風流を、うつし太鼓や笛の音に、ひいてうたふや獅子の曲、むかひこやまの七九竹、枝ふしそろへて、きりをこまかに十七が、ひろのこぐちに晝寢して、花のさかりを夢に見て候、夢のうらかた越後の獅子は、ぼたんは持たねど富貴はおのが、姿に咲かせて舞ひ納む、姿に咲かせて舞ひ納む

【句義】越後獅子、越後國で行はれた里神樂の獅子舞の歌である夫が後に長唄などにも入る樣になつた〇越路方、越前越中越後を越といふがこゝでは越後と見てよい〇田舍なまりの片言まじり、是も名物の內で有る〇白菟なる言の葉、白菟が鰐を欺いて鰐に赤裸にされたのを大國主神に助けられた其時大國主神は八上姫を得たといふ神話〇直井の浦、長唄には直江津浦とある面白がらせさうなことをなほ言ふと懸かる〇七つか八つ目鰻、昔の時間の計數の七つ八つを鰻の名につゞけた〇うむ、麻をうむこと〇あみその綱手、網麻で舟を繫ぐ綱手を作ること〇米山、越後國中頸城郡に米山藥師といつて名高い戀心を綱手に作りこめと懸けた〇黃蓮の、芹に似た藥草長唄には逢ふ緣もとある〇いとひ川、河の名

何厭ふものかの心を懸けたこの河に糸魚（長さ二三寸鱗環をなして白糸をまいた狀）といふ魚が居る○草うら、長唄には草生津とある○油漆と交りて、仲のよいこと○松山、末を待つと懸けてある、東頸城郡の地名で白縮の產地○うつし太皷、太皷の打方○ひいて謠ふ、彈いたり謠つたり○七九竹、紫竹の竹○枝ふし揃へてきりをこまかに十七荷、枝節揃へて切方細かに丁寧に作り上げて十七荷作るといふこと○室の小口、家の入口○夢のうらかた、夢を判斷すると。

【通釋】　越後に名物は色々有るがなまり言葉も面白い白莬の話もある七つか八つ時まで海人の子は綱手を作る其綱手に戀心をこめて初は緣遠い浮氣の樣であるが遂には仲よくなる松山の縮はからだが見え透く風流なもの國の風流を彈いたり謠ふのが獅子の曲向ふの山の紫竹を刈つて丁寧に十七荷造り上げて安心して晝寢したらば花盛の夢を見た夢から考へて見ると牡丹に唐獅子といふが越後の獅子は牡丹が無いかはりに自分の姿を富貴な花にしてめでたく舞ふ。

越後獅子（新）

越後がた、國の名物樣々なれど、獅子のくるひのたはむれわざの、いと面白き里神樂、門邊に遊び行く、その乙女さへもうち連れて、七つ八つの幼兒も、餘念なぎさの浦の波、霞みはてたる山々の、四方の花鳥百千鳥、げに心よきなぐさみと、亂れ亂るゝ糸柳、そよと吹き來る風につれ、世に時めくや春の空、都の大路をちこちに、治まる國の風流を、うつし太皷や笛の音に、祝ひ祝ふや獅子の曲、獅子の怒の勇しさ、拍子を揃へて、わざをたくみにうなゐ子が、あるは舞鶴舞ひ遊び、おのがさま〳〵手品つくして、花のよそひの越後の獅子は、牡丹の富貴をふり分髮の、姿に見せて舞ひ納む、姿に見せて舞ひ納む

【句義】　獅子の狂の戲技、越後の國蒲原郡から諸國に出る角兵衞獅子のこと○里神樂、村社などであげる神樂○なぎさ、波打際に無を懸けた○百千鳥、面白い聲の色々の鳥○ときめく、繁昌の心○うなゐ子、七つ八つ位の子供○舞ひづる、舞ひ出づるの心。

【通釋】　越後の名物は色々あるが其中でも角兵衞獅子は面白い里神樂で七つ八つの子供まで一緒になつて長閑な春の都大路の門々を柳の糸の樣に亂れ亂れて狂ひ舞ふのが見ても心持よいなぐさみである大皷や笛で獅子の曲を歌ふ獅子の怒る樣子も勇しい柏子を揃へて上手に舞ひ出し舞ひ遊び色々手をかへて牡丹の花の樣な富貴な姿を振分髮に見せてめでたく舞ふのがいかにも面白い。

萬歳獅子

君が代は久しかるべきためしには、かねてぞ植ゑし住吉の、松の双葉はあやかりものよ、青葉はまして落葉さへ、妹背かはらぬ契とは、嬉しからうで有るまいか、松のよはひを重ね重ねる

【句義】　かねて、前方から○住吉、攝津國の地名住みよき心にかけた。

【通釋】　君が代の長く御繁昌なさるべき例には前から植ゑて置いた住吉の松この松にはあやかるべきものよ松は青葉の内はめでたいことは言ふまでも無いが落葉となつても夫婦かはらないといふ約束で二葉づゝ着いて居る其上に千年の齡といふのでマア嬉しいものでは有るまいか。

三番叟

とう〳〵たらりたらりらたらりあがりたらりとう、所千代までおはしませ、われらも千秋さむらはう、鶴と龜との齡にて、さいはひ心に任せたり、あるは瀧の水〳〵、日は照るともたえずとうたりありうとう〳〵、君の千年をへんことは、天津乙女の羽衣よ、なるは瀧の水、日は照るとも絕えずとうたりありう、とう〳〵あげまきやとんとうや、いろばかりやとんとうや、ざして居たれどもまゐらうれんぜりや、とんとうや、千早振神のひこさの昔より、久しかれとぞ祝ひ、そよやれちや、とんどうや、およそ千年の鶴は、萬歳樂とうたふたり、またばんだいの池の龜は、甲に三曲をいたゞいたり、瀧の水れい〳〵と落ちて、よるの月あざやかに浮んだり、渚のいさごさく〳〵として、あしたの日の色を弄す、天下泰平國土安穩の、今日の御祈禱なりありはらや、なじよの翁と、あればなじよの翁とゞ、そよやいづくぞ翁とゞ、千秋萬歳のよろこびの、舞なれば一さし舞はう、萬歳樂〳〵、おゝさへや〳〵、喜びありや、わがこのところより、外へはやらじと思ふ、物に心得たるあどの太夫殿にそとげんさう申さう、ちやうど參つて候、たが御たち候ぞ、あどゝ仰せ候程に御身あどの爲に罷立ちて候、今日の三番叟千秋萬歳とまうてをりそへ、色の黑い尉どの、この色の黑い尉が今日の三番叟、千秋萬歳ところ繁昌と舞ひ納めうずることは、何より以つて安うさう、まづあどの太夫殿はもとの座敷へおも〳〵とおなほりそへ、それがし座敷へなほらうずるとは、尉殿の舞よりいと安うさう、御舞なうてはなほり候まじ、あら、やうがましや、さらば鈴を參らせう、あどの太夫殿に申したきことの候、何事にて候ぞ、さ月の女房が笠のはをつらね、早苗おつとつて、打上げて唄うたが面白うはなく候か、實に面白きものにて候、さらば太夫殿に唄うて聞かせ申さう、これの御庭に池ほれば、水もわき候、黃金もわき候、池の汀に寶船がつくとも、ともへにはえびす大黑、中には毘沙門、吉祥天女辨財天、琵琶箏鞨皷笙ひちりきの、拍子を揃へてろかいの音がざはざは〳〵、神風追風吹き立ち〳〵、惡魔を拂つて御壽命長く、御子孫繁昌國も豐に、千秋萬歳の御よろこび、治まる御代こそめでたけれ

【句義】　三番叟、猿樂の翁の曲に出る黑い面をかぶつた翁のと○とうとうたらりた

らりらたらりあがりたらりとう、とうは十たらりは足りあがりは乗る心十に十を乗じて充分で充分で充分で又夫に十を乗じてといふので十を十で百となり又乗じて千となり萬となる心中のらの一字は虚字で心は無い調子を整へるために入れたもの是は大織冠鎌足が寶祚の萬歳を祝つた神歌の詞である○所千代までおはしませ、こゝに千代まで榮えよ○われらも千秋さむらはう、自分たちも千年かけて御側に居ませう○鶴と龜との齢にて幸心に任せたり、鶴の千年龜の萬年も自分の望み次第○鳴るは瀧の水、響くよ瀧の水が○絶えず滔たり、日は照つても水涸なく常に滔々と流れる○ありうとうとう、河流滔々○天津乙女の羽衣、天人が三年に一度づゝ降りて來て大きな岩を羽衣で撫でゝ其岩が磨り盡すまでといふこで大層な年の長いこと○あげまきや、小供の髪のことでこゝでは皇子を言つたのである○とんとうや、富み富むよの心○色ばかりや、ひろばかりやの誤で子孫廣く榮える心○座して居たれども、こゝにすわつて居るよりは○參らうれんぜりや、御側へ參らうと思ふよといふことで是等は催馬樂の歌から出た言葉○千早振、神の枕詞○神のひこさ、神の日子様で天孫降臨の時からの心○久しかれとぞ祝ひ、わが子孫久しく榮えよと祝はれたの心○そよ、左様よ○やれちや、調に入れた言葉意味なし○萬歳樂、樂の名○萬代の池、萬代を經た池○甲に三曲をいたゞいたり、三曲は箏胡弓三味線龜の甲には六角の紋が十三あるので十三絃の箏とし甲の圓く中高き形を胡弓の弓の圓きにとり龜の甲を上から見た全體で三味線に取りなしたのである○れいれい、灑々と水の清い形容○朝の日の色を弄す、なぎさの美しい砂利に朝日がうつること○ありはらや、合の手に入れた言葉意味なし○なじよの翁とあれば、何としたことか翁殿といふのにの心○なじよの翁とゞ、何としたことか翁殿よ○そよや、さればといふ様な心で再び呼び起すのである○一さし舞はう、一番舞ひませう扇をさしかざして舞ふので舞を一さし二さしといふのである○おゝさへや、おゝは受け應へた聲さへやは左様であるの心○喜有りや、喜びごとがあるやは嘆辭○わが此處より外へは、喜事を外へやるまいと思ふ○あどの、和殿で貴方といふのに同じ○そと、鳥渡○けんざう申さう、見參したい御目にかゝりたいに同じ○たが御立ち候ぞ、立つて居るのは誰か○あどと仰せ候程に御身あどの爲に罷り立

つて候、御前様が貴方と言はれたから御前様の爲に立つて居るのである○舞うてをりそへ、三番叟となつて舞つて下さいそへは候への心○尉殿、翁殿といふに同じ○舞ひ納めうずること、舞ひ納めやうとすることは容易である○おなぼりそへ、御座り下さい○安うそう、安う候の心○あら、感嘆詞○要がましや、むづかしいことを言はれるよの心○さ月、五月の異名○女房、女といふことゝでは田植の女○笠の端をつらね、笠をならべて○寶船が着くとも、着く〳〵跡から跡から寶船が來て着く○吉祥天女辨財天、吉祥天女といふのも辨財天のこと○さは〳〵〳〵、水を搔く音。

【通釋】　君は萬年かけて御榮え遊ばしませ自分等も千年かけて御側に居たいと思ふ鶴の千年も龜の萬年も御心任である瀧の音がよい音である日は照つても絕えず滔々と流れて居る君は天人の羽衣の話の樣に長く御榮え遊ばしませ瀧の水の河流滔々と絕えない樣に猶又御子樣たちは廣く御繁昌で富み榮えませドリヤ御側へ參らうか知らん神代の昔から君の御榮を祝つたものであるアヽめでたい〳〵千年の鶴は万歲樂をうたふ万年たつた池の龜は甲の上に三曲をのせて居る瀧の水に月はうつる小石に朝日はキラ〳〵光る是が天下泰平國土安穩を祈るしるしであるコリヤ何としたことか翁殿よ翁殿よめでたい事故一さし舞つたがよいぞや万歲樂を舞つてもらひたいオヽ左樣〳〵この喜を餘所へはやるまいヤ物をよく心得た方あの太夫殿に御目にかゝりたい、よい鹽梅に丁度來た、そこに立つて居るのは誰か、御身があなたと仰せられたから御用かと思つて立つて居ります、今日の三番叟となつて舞つて下さい色の黑い翁殿よ、自分が千秋万歲御繁昌と祝つて舞ふのは何より雜作もないこと夫ならばまづ太夫殿はもとの御席へ御着き下さい、拙者が席へ着くのは舞を舞ふよりは雜作も無いしかし舞はない內は座らない、アラ大分むづかしい事よ、夫ならば鈴を差上げませう兎も角も御舞ひ下さい、太夫殿に申したいことがある、何事か、田植の女連が早苗をとりながら唄つたのは面白くは無かつたか、如何にも面白い、それならば夫をうたつて聞かせう、こゝの御庭に池を堀ると水も沸く黃金も沸く澤山寶船がつく夫には七福神が手に〳〵色々の鳴物を持つて拍子を揃へて櫓櫂の音ざは〳〵と陽氣に舟にはめでたい神風追風が惡魔を拂つて御壽命長く御子孫繁昌御國は豐に悅

盡きず治まる御代がめでたい〳〵

河東七草

七草や、明けぬに向のよい夢を、さますも春の一もよふ、かけの垂緒の長々しく、祝ひ初めんと數ふれば、すゞなすゞしろ芹なづな、ごぎやう田平子耳菜草、猶色々の草々に、諸共にこそたうべしや、白河院の御時より、傳へ〳〵て今の世に、うちも揃ふや七草の、音も日本の國々、はやさぬ宿こそ無かりけれ

【句義】　一もよふ、一興といふ心○かけの垂緒、長の序詞にしたまでのこと○たうべしや、食ふこと。

【通釋】　今日は七草を祝ふ日である向ひの家で寢て居る内から音を立てゝ噺し立てゝよい夢をさますのも春の一興といふもの長くめでたく祝はうと思つてまづ數へて見るとすゞなすゞしろ芹なづなごぎやう田平子耳菜草其外のものも一緒に祝つてたべる是は白河院の御代から始まつて今でも日本國中祝ひ囃さない家は無い。

御代の賑

今井慶松作曲

天地の無窮極みなき、天津日嗣の御位に、わが大君の昇ります、今日の御典の尊さよ、垂穗の稻の大御饌に、白酒黒酒をとりそへて、皇御神に捧げます、大御祭のかしこさよ、大き正しき君が代の、大御祝に外國の、つかはし人も列りて、共にことほぐめでたさよ

【句義】　垂穗の稻、立派に出來た稻○大御饌、神に供へる食物○白酒黒酒、大嘗會の時に神へ供へる神酒○大き正しき君が代、大正の御代○外國のつかはし人、各國の大使○ことほぐ、御祝申し上げる。

【通釋】　畧す。

御代の榮

土井利剛作歌
今井慶松作曲

豊さかのぼる日の本の、國のみいづの高みくら、つかせたまへるよき日をば、祝ふ今日こそ尊けれ、千代の根ざしの菊の花、手折りかざして限なき、御代の榮を諸共に、祝ふ今日こそ樂しけれ

【句義】　是も前同樣御大典記念の歌である○豊さかのぼる、日の上る形容で立派に

11
3
576

眞赤に上る心〇みいづ、御威光の高いを高御座に懸けて有る〇千代の根ざし、年長く根がしまつて居ること〇かざして、祝の時に花を冠に挿すこと。

【通釋】　畧す。

終